センター姫とスモール王子

yuzoku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
センター姫とスモール王子

【Ｎコード】
Ｎ７９８７Ｕ

【作者名】
ｙｕｚｏｋｕ

【あらすじ】
デカいってだけで今年新設の女バスに入部させられたバスケ初心者の小泉ヒメ。でも意外とバスケっておもしろいかも!?　一方小学校のころからバスケ一筋もといドリブル命の王地大河、通称オージ。二人はバスケを通して絡んだり交わったりすることで、成長し合ったりしなかったり。。

さらわれ…ではなく勧誘される姫（前書き）

「はるか３ｐｔシューター」のその後の翔泉高校を描いております
ので一部「はるか～」の登場人物がでてきたりします。しかし主人
公たちは入れ替わっていますのでどちらから読んでいただいても楽
しめるようにはしています。

なお、この小説は男女２人の主人公が交互に「語り」になっていき
ます。

さらわれ…ではなく勧誘される姫

「あなた、バスケに興味ない？」
入学式が終わって早々、同じクラスの人がいきなり声をかけてきた。
いきなり話したこともない人からこんなこんなこと言われたから正直面喰ってしまって、すぐには何の返事もできずにいた。
「その身長、バスケだとかなり武器になるんだよね！スッゴイうらやましいなぁ。ねぇねぇいくつあるの？」
「身長は１８１センチだけど。」
正直身長は昔からネタにされてからかわれてきたので私にとってはトラウマでしかなかった。
「うわ、やっぱりスゴイ！なんか迫力あるなって思ってたんだぁ。あっ、ごめん名前も言ってなかったね。アタシの名前は塩見怜（しおみレイ）、気軽にレイって呼んで。よろくしくね！あなた名前は？」
「小泉陽愛（こいずみヒメ）。」
そして、その身長に似つかわしくないこの名前も気に入っていない。
そんなことはおかまいなしにレイはしゃべり続ける。
「わたし去年のウチの高校の男子の試合みて感動したんだよね！それであたしもあんな風になりたくてこの高校入って、それで女子でもバスケ部を作ろうと思っているの！あなた身長もあるみたいだしやってみない？」
「え、でもあたしバスケなんてしたことないし…」
「その点なら任しといて！この、プレーヤーとしてもコーチとして

も超一流のあたしが、ビシバシ指導してあげるから！」

なんか厳しい練習になりそうで不安だったが、高校に入って何か打ち込めるものがほしいと思っていたのも事実だったので、なかば強引であるが彼女の要求をのむことにした。

「よかったぁ。これで有望な新人第１号ゲットだわ。」

えっ、もしかしてあたしでようやく勧誘１人目だったの？なんだか不安が増してきた…

こうして、男子バスケ部の全国出場の陰に隠れて全然話題にならなかったけど、実は女子バスケットボール部も今年から新設されることになったのだ。

強気王子

オレの名前は王地大河（おうじタイガ）。翔泉高校のピカピカの1年生だ。

オレが入部している翔泉高校男子バスケット部の先輩たちは、今年見事全国出場を果たした。

そんな華々しい結果とは対照的に、しかも同じ一年であるリョウスケがベンチ入りして試合でも活躍する中、おれ達は毎日のようにランニングや筋トレといった屋外練習ばかりが続いていた。

もちろん先輩たちの試合は全国大会に行っても一生懸命声を枯らして応援したし、負けてしまった時はやっぱり悔しくてしょうがなかった。

しかしこれでようやくオレにもチャンスが回ってくるかと思うとわくわくの方が大きかった。

話は4月の入部期間に戻る。

オレは他の一年が自己紹介する日、運悪くというか勘違いで一日遅れで入部した。ちなみにオレの身長は168センチ。それでポジションはSF（スモールフォワード）希望だと言ったら、当時のマネージャーのサヤ先輩に「その身長で男子の高校バスケをやってくのはかなり厳しいと思うから、これから覚悟しときなさい。ま、前例がなくはないけど。でもガードじゃなくてフォワードで続けてくかどうかはよく考えときなさいよね。」と言われた。

でもオレはあきらめる気なんかなかった。だってSFって言ったら

一番スコアラーとして活躍できる花形ポジションだし、それにドリブルには正直それなりの自信があった。

しかし元キャプテンであるシュースケ先輩のプレーを目の当たりにすると、自分の認識がいかに甘かったかを思い知らされることになる。

でもそれで燃えてくるのがオレなんだよね。さぁ早くガンガンコートの中で練習してドリブル磨いて、どんな敵のディフェンスも、シュースケ先輩さえもさらっと抜かしてやるぜ！

さてと、今日も張り切って校庭の１０ｋｍ走行ってきますか！

今度は勧誘する側の姫

「バスケに興味ありませんかー？」
「今なら即レギュラー決定ですよー！」

あたしは今校門前でレイと声を張ってせっせとチラシ配りをしている。

そう、部活勧誘だった。

正直人前に出るのが苦手なあたしにとってはかなり恥ずかしい作業だった。

しかしバスケに興味ある人なんてそうそうおらず、当然いろんな反応が返ってくる。
「すいません、私そんな大きい人と一緒にやっていける自信ないです。」

レイがボソッと言った。
「あちゃ～ヒメを最初に引き入れたの失敗だったかな～」

おいおい聞こえてますぜダンナ。いろんな意味であたしにダメージのある勧誘活動であった。

そんな中、一人の女の子がこちらを見つめている。レイが目ざとく見つけて駆け寄る。
「もしかしてあなたバスケ部入部希望？」

「はい。」
「経験者だったりする？」
「そうです。ＳＧやってました。」
「おお～！即戦力ゲットだぜ！」
レイのテンションはダダ上がりだ。

「ちなみに男バスとは交流とかあるんですか？」
「う～んまだこれからだし分かんないけど、コートの関係で合同練習とかはやるんじゃないかな？」
そのとき、彼女がなぜか小さくガッツポーズをしているのが目に入った。

巻き込まれ王子

「オージ、オージ！」

「『オージ』って呼ぶなぁ～オレには『タイガ』っていうカッコイイ名前があるからそっちで呼べって言ってんだろが～！！！」

「わかったよ、オージ」

全然わかってねぇ。この天邪鬼ヤローは本木元気（もときゲンキ）。なんか親の離婚やらで途中で苗字が変わったせいで、読み方によっちゃ『もときモトキ』とかなりオモシロい名前になってしまう哀れなオレの友人Ａ。その腹いせなのか知らないが、人を変なあだ名で呼ぶのが得意技なようだ。

「で、人の名前連呼しといてなんだよ？」

「ねぇねぇ、かわいい子見つかった？」

「はぁ、なんだよそれ？オレは今バスケで忙しいの！」

「連れねぇな～。それにバスケ部ったってこの３日間走ってばっかなんだろ？」

「ばかっ、これからオレはコートで縦横無尽に活躍する日のためにだなぁ。」

「はいはいはい、悪かったよ。それより聞いてよ、オレもう恋しちゃった。」

「まじかよ。どんな奴だ？」

「７組の宇野紗彩（うのサアヤ）ちゃんていうんだ。これがまたスタイルよくて、めっちゃかわいいんだ。」

「へぇ～。」

『かわいい』と言われるとちょっと気になってくるのは悲しき男の性だな。

「決めた、オレ告白してくる！」

そういうと全力ダッシュで教室を飛び出してきた。
まったく気の早いやつだ。

3分後帰ってきた。

「どうだった？」
「ふられた～～」
「だろうな」
いきなりだしフラれるのは当然だろう。残念なことに別にゲンキはイケメンてわけじゃないし。

それより気になるのは
「なんて言ってフラれたんだ？」
「『ごめんムリ。』の一言」
容赦ねぇな～。一度その言動とギャップのある顔だけは拝んでおこう。

「ああもうオレはダメだ～～」
「そんな落ち込むなよ。名前通り元気出せって。」
「そういうこと言われると余計テンション下がるぜ～。あっ、そうだ！」

なんだ！？急に立ち上がって。

「オマエも誰かに告白して来いよ！」
「はぁ？」

「それでフラれて一緒の仲間になろうぜオイ！」
「イヤに決まってんだろがーー！！！」

クラス中に声が響いてしまい、告白せずとも十分に恥ずかしい思いをすることとなった。

「それでは学級委員長を決めたいと思います。誰かなりたい人いませんか？」

クラス内は変に静まり返っている。新学期になるたびに小学校のころから経験していることだが、いまだにこの空気に慣れたと思えることはない。

「じゃあ推薦で誰かいないか？」

先生強引すぎるよ。まだみんな知り合って数日なのにそれはムチャなんじゃないかな。

ま、あたしは関係ないから早く決まってくれさえすれば何でもいいんだけど。

そのとき一人の女子が言った。

「ヒメがいいと思います。」

このクラスであたしのことを『ヒメ』と呼ぶのは一人しかいない。

そう、犯人はレイだ。

「じゃあ小泉でいいか。」

センセイちょっと待てぇ～～い！

と言いたいところだがこんな時発言する勇気がない。

しかたないがこの流れだと決定みたいだった。

あたしが決意を固め始めかけたとき、今度は男子の声がした。
「男子はオージでいいと思いま～す。」

「ちょっと待てぇ～～い！」
あたしが考えたのと同じツッコミやっとる！

「おれは断固そういうメンドクサ…責任の重い仕事はバスケ部が忙しいのでできないであります！」

そうそう、部活との両立は大変だもんね…ってそれはあたしも一緒ではないか！
そういえばコイツバスケ部なのに小さいな、たぶんだけど１７０センチもないな。
…あれっ、こんなのと組まされたらただでさえ大きいアタシの身長が余計に目立ってしまう！

「すいません、あたしもバスケ部で忙しいのでお断りさせていただきます。」

「なんだ二人ともバスケ部なのか、それならちょうどいい。協力してがんばってくれ。」

なにが「ちょうどいい」だ。ヤバイヤバイ、話しがどんどん悪い方向に流されていってる！

「『姫（プリンセス）』と『王子（プリンス）』で『プリプリコンビ』だね」
さっきの『オージ』推しの男子が余計なこと言ってきた。

「てめぇ余計なあだ名つけてんじゃねぇよ！誰がこんなデカいだけでバスケやるようなバカ女とガッキューイインチョーなんてやって

られるか！」

ここでついにあたしもキレた。

「誰がバカ女よ。自分こそ、その身長の割にそのデカい態度どうにかしなさいよ！」

「身長のことは今関係ないじゃねぇか！」

「なによ、先にケチつけてきたのそっちじゃない！」

「オージ、やったれやったれ！」「ヒメー負けんなー！」

そこ、外野うるさい！っていうかいつの間にか『オージ』相手に二人で口げんかになっていた。

「うん、息もぴったりみたいだな。それじゃよろしくな『プリプリコンビ』」

先生がそういった時にはもう決定的だった。

筋トレ王子

放課後、部活の練習前に同じ一年の久保田一輝（くぼたカズキ）に愚痴っていた。

「っていうわけで見事その女バスのデカ女と学級委員ヤル羽目になっちまったんだ。」

「えっ、でも女子のバスケ部なんてウチの高校にないだろ？」

「それが今年部員集めて作るんだってさ」

「へぇ～、ちょっと楽しみぃ。」

「どこがだよ？コート狭くなったりしたらどうするんだよ。」

「だってだって仲良くなって付き合ったりとかできそうじゃん？」

コイツもオレと同じＳＦ（スモールフォワード）希望らしいけどぜってぇ負けたくねぇな。

いつものように１０ｋｍ走と筋トレを終わらせたおれ達に、今日は女子マネのコハル先輩からいつもと違う指示があった。

「一年生のみんなぁ、ボール持って外に出てきてくださ～い。」

よっしゃー、ようやくバスケ部らしい練習できる！なにせ今までずっとボールすら触らせてもらえなかったからな。しかもオレが一日遅れて行ってなかった日には、一年の実力を見るためということで紅白戦があったというのだから余計にフラストレーションがたまっていた。

「これからあなた達にはドリブルで１ｏｎ１で抜いてもらう練習をしてもらいます。ディフェンスになった人はそれを止める役目ね。」

「はい！」

「なお、待機中はずっとダムダムしてること！」

「はい！」

最初オレはオフェンスからだった。
待ってましたー！とばかりに思いっきりつっこんでいった。そしてディフェンスを華麗に抜き去った。

「うん、なかなかよろしい。」
コハル先輩からもお褒めの言葉をいただけたぜ！

続いてディフェンスだ。相手はカズキ。絶対止めてやる。
最初カズキはその場でゆっくりドリブルをしていた。

そこから一気にスピードを上げてオレの左を抜けて行った。

やられた。
見事なチェンジオブペースだった。

「はい、抜かれちゃったタイガくんは腕立て伏せ３０回ね。」
まじかよ、さっき筋トレで１００回こなしたばっかだっていうのに。

その後も何度かトライしたがオフェンスはともかくディフェンスはずたぼろだった。

けっきょく今日腕立てを合計２５０回やるハメになる。

ようやくバスケ部ができた姫

一週間の地道な勧誘活動の甲斐もあってか、ようやく5人の部員がそろった。5人というのはバスケをするのに必要な人数というだけでなく、新しく部として申請するための最低限の人数でもある。ともかくこれで部員の問題はオッケー。次は顧問だ。

「失礼しま～す！」

レイが迷いなく職員室に入っていき、あたしはその後ろについていく。

「誰か女子バスケ部の顧問になってほしいんですけどぉ。平塚先生どうにかなりません？」

まずは担任の平塚先生からだ。

「すまん、おれは今剣道部やってるんだ。」

あっさり断られた。

「そうですかぁ。じゃあ誰かやってくれる先生いませんか？」

職員室中に聞こえるように言った。いや、その声の大きさは迷惑だろ。

「オレがやろう！」

一人の男性教師が名乗りを上げた。

「やったー！よろしくお願いします！」

展開速いな、おい。

「3年8組担任の佐々木勝だ、よろしくな。バスケのことはよくわからんがその熱意に応えようと思ったまでだ。」

なんだかちょっとカッコイイこと言ってる。

ここで確認のためいちおう聞いてみる。

「でもそんな急なお願いなのに受けてもらっても大丈夫なんですか

？」

「問題ない！なんたってオレは女子が大好きだからな。」

前言撤回。こいつはくそやローだ。

でも顧問をやってくれるというのだから文句も言ってられない。実際レイはノリノリで手続きを進めている。

「というわけで今日からワタシ達5人で女子バスケット部をやっていくことになりました！まずは自己紹介だね。ワタシは塩見怜（しおみレイ）１４７センチ。ちっちゃくてもバスケへの愛は誰にも負けません！ポジションはＰＧ（ポイントガード）です。はい、じゃ次ヒメから」

「小泉陽愛（こいずみヒメ）です。身長は１８１センチです。初心者ですがよろしくお願いします。」

「須藤朱音（すどうアカネ）です。身長１６１センチでＳＧ（シューティングガード）やりたいと思ってます。」

勧誘の時に唯一話しができた子だ。アッシュの入ったオシャレなアシンメトリーの髪型が印象的だった。

「宇野紗彩（うのサアヤ）です。身長１７０センチ。中学の時のポジションはフォワードでした。」

さらりと伸びた黒髪がきれいだな。というかそれに負けないくらいキレイな顔をしている子だ。

「城ケ崎美鈴（じょうがさきミスズ）と申します。身長は１７２センチでございます。ポジションはＰＦ（パワーフォワード）を希望しております。」

なんだか丁寧な話し方する子だな。お上品そう。

「はい、全員終わったね。じゃあまずははりきってランニング行ってみよ～～」

ランニングはあたしだけがダントツで遅かった。そしてその後のメニューでも一人バテバテでこなしていくことになる。

計画王子

「あ～だりぃ～」
「だるいとか言わないの、それはこっちだって同じなんだからね。」
今は放課後。でもいるのは体育館でも屋外でもなく教室。
そしてここにいるのはオレとこのデカ女の二人だけ。残念ながら別に色気もなんにもないシチュエーション。

「小泉じゃぜんぜん燃えも萌えもしねぇ～」
「はぁ？なんか言った？」
「別にぃ。」
「なに。その感じ悪い態度！王地って日頃からいっつもそうよね」
「『オウジ』って呼ばれるのキライなんだよ！下の名前で『タイガ』って呼べよな。」
「じゃ、じゃあ平等にあたしのことも『ヒメ』って呼びなさいよね！」
なんだこれツンデレか？まぁいいや、『オウジ』って呼ばれなきゃなんでも。

「だいたいなんで遠足行くのに学級委員がイベント考えなきゃいけねぇんだよ。」
「ほんとよね～、そこだけは同意するわ。」

「ぐだぐだ言ってもしょうがないか。早く練習にも行きたいし、ちゃっちゃと考えて終わらそうぜ。」
「そうね。で、なんかない？」
「はぁ？考えるのオレかよ！？　そうだなぁ、バスケットボール２

個持ってって2組に分かれてドリブルリレーとかどうだ?」
「どんだけあんたバスケばかなのよ!!もうちょっとみんなが楽しめそうなこと考えなさいよね。」
「じゃあお前なんかいい案あるのかよ?」
「そうねぇ…」
といったまま10分間ずっと黙り続けていた。

「おいまだかよ。てかなんか言えよ。」
「一生懸命考えてたの!こんなのどうかしら、2組に分かれてバスケットボールのパス回し。最後はフラフープかなんかのリングにゴール。」
「けっきょくお前もバスケじゃねぇか。しかもパス回しって単純だな。これだから素人は!」
「うるさいわね!ドリブルだったら足場が悪いとうまくできない子もいるでしょ。その点、パスなら誰でも気軽にできるから楽しめそうじゃない?」
「そう言われればたしかに。」
「じゃあそれに決定でいいよね。」
「おう!」
「じゃあ先生への報告は任せたから。」
「なんでオレなんだよ?」
「最終的な案を出したのはあたしなんだから肉体労働くらいやりなさいよね。」

なんか理不尽さを感じないでもなかったが「パス回し」の案に賛成してしまった以上、あまり強くは言えなかった。

あとで先生のところに行くと、「さすがバスケ部同士の『プリプリ

コンビ』らしい発想だな。」と言われてしまった。

計画王子（後書き）

学級委員の2人はこんなふうに、ことあるたびに「活躍」させられるかもです。

汗水流してダムダムする姫

毎年部活ごとに体育館の使用割が決まっているため、新設である女バスは夏予選が明けるまでは当分体育館内での練習はなかった。そのためあたしらはコートは与えられず、古いボールを持ってもっぱら外で練習することになる。

「よし、ランニング終わり！」
「やっと終わったぁ。」
「ヒメ、そんなだらしない恰好しない！次の練習行くよ！」

監督もマネージャーもいないあたし達の練習はレイが全部考え、指示を出していた。

「じゃあ今から2対2でパス回しの練習始めるわね。ヒメはそこでドリブルの練習よ。」

ボールを使った練習の時は、初心者のあたしだけは別メニューで行われていた。

今日のあたしの個人メニューは「ダムダム５００回（左右で１００回）」だ。

ダムダムダムダム。

ポロッ

あっ

「ヒメ、なにやってんの！プラス１００回だかんね！」

「はい！」

自分の練習をこなしつつ、あたしの方にも目を光らせるなんてなんて視野が広いんだろう。

ＰＧっていうのはそういう能力が長けているのが重要らしいが、それだけでレイの選手としてのレベルの高さがわかる。

他のみんなにしてもパス一つとってもあたしがやるのと違ってなめらかだ。やっぱり経験者かどうかってデカいよなぁ、特にサアヤの手さばきがハンパなく速い。

それにしてもあたしの練習は単調だな。

ポロッ

「ヒメーー！」

負け犬王子

今日はとっても嬉しいことがある。

いつもは屋外がほとんどの練習であるが、今日はなんと、コートが使い放題なのだ！
その訳はセンパイ達が練習試合で他校に行っているからだった。

休日の朝ということもあって一番乗りしてきたオレは、一人で何度もドリブルしてレイアップシュートを決めまくっていた。

そのとき外で女子の声がした。うん？女子バレー部も今日練習なのか？
「やっぱ体育館の中はいいよね。」
「久しぶりのリングだぁ～」

5人いるうち知ってる顔が約2名。一人はチビで明るくてクラスでも目立ってる塩見怜。

そしてもう一人は、そう、デカ女こと小泉陽愛である。
とういことはこの集団はウワサの女バスか。まぁ今日は空いてるしあっち側のコートで練習するんだろ。

かまわず一人練習を続けていると徐々に他のやつらもやって来た。

「はい、みんな集合してくださ～い。」

コハル先輩が声をかけると男バスのみんなが集まる。

あれ、女バスの子たちも来るぞ？

「今日は男子も1年生しかいなくて人数も少ないので合同で練習を行いたいと思います！」

聞いてねぇ～～

男バスの面々はみんな驚いているがその後の反応はまちまちだった。特にカズキなんかは声に出して

「やったーー！！」なんて言うから若干ひかれていたが。

キソ練が終わった後、練習試合が組まれることになった。

へ、ちょろいぜ。なんたって相手は女子だ。しかも一人はトーシローのデカブツだし軽くヒネリつぶしてやるぜ！

「ディーフェンス！ディーフェンス！」

ベンチスタートだった。

試合は意外と拮抗していた。レイがいいパスを出すので他の3人（もちろんヒメ以外）でうまく点をとれている。そのヒメにしたって初心者の割にしっかり足は動いている。少なくともキソ練はがんばっているようだった。

「へえ、やるじゃん。」

ちょっと見直した。

途中コハル先輩から声をかけられた。
「タイガくん、出番だから準備して！」
「はい！」

ようやく来ましたよ、本打ちが！

「タイガ、油断するなよ」
そう言ったカズキと交代した。

オレはお前と違ってフェミニストじゃないから遠慮なんかしないよん♪

お、オレのマッチアップ相手は黒髪の似合うこの子か。かわいいというよりキレイ系だな。

「サアヤっ」
レイからサアヤチャンにボールが渡る。
行かせねぇよ！

クルッ

スピンムーブか！体をキレイに回転すると簡単に抜かれてしまった。

今度はこちらのオフェンスだ。ボールが回ってきた。
さっきのお返ししてやんよ。

クルッ

スッ

スティールされた？

その後もサアヤチャンを一回も抜くことはできなかった。

ホメられて伸びる姫

練習試合を終えたあたし達は男子より一足お先にあがりにした。なにせこっちは5人ぎりぎりでやっていたのだから当然である。

「よぉし、これからミスドで反省会をやりまーす！」

一人だけスタミナありあまってる輩がいた。

レイだ。いったいあの小さい体のどこにそんな力があるっていうのか。

「まず今日の得点クイーン、サアヤさん心境はいかがですか？」

「相手がしょぼすぎ。」

「うわぁ～きっついねぇ。でもＳＦはそれくらいだと頼もしいよ。」

「お次はアカネ。ほとんどコートで練習してなかったのによくあれだけ３ｐｔシュート決めてくれたね。」

「家の近くにゴールネットがあってリングコートで毎日シュート練習は欠かさずやってきたからね。」

「さすがぁ。澄ました顔して生粋のバスケットプレーヤーだね。」

「そしてミスズ。よくヒメのヘルプもこなしつつ相手のフォワード陣に負けなかったね。」

「いえ、私の家には専門のコーチがいていつも厳しく指導してくれていますからあれくらいなんともないですよ。」

そこで他のメンバーはあ然とした。「専門のコーチ」だと？
「前から思ってたけど、あんたの家って結構お金持ちでしょ？」
「いえ、そんなことないです。家にもバスケットコートは一面しかないし…」
いや、十分すぎるだろ。

「さて最後は」

最後に発表されるっていうだけで妙に緊張する。
それでなくたって、たくさん上からシュートを決められたし、攻撃なんて参加すらできていない。
内心何を言われるかドキドキである。

「ヒメ、よくやったよ。」
「レイほんとにそう思ってる？」

「そうですよ、ヒメさんのがんばりにはビックリしました。」
ミスズ優しいなぁ。

「やっぱ１８０越えがいると頼もしいよ。」
これはアカネ。嬉しいけどいちいち身長を強調するんじゃない！

「やっぱスポーツはホメて伸ばすのが一番だからね。でもさっき言ったことは決してお世辞じゃないよ。初心者なのによくがんばてくれたよ、ありがとう。」

涙腺がやばいかも。

「よし、これで身長も１９０センチには伸びたんじゃないか？」

「なってたまるかぁーー！」

常識的にありえないだろっていうツッコミと、オトメとしてはこれ以上身長が伸びてほしくないという願望からくる叫びだった。

弱音王子

昨日の合同練習はいつになく疲れたぜ。
そんなオレを休ます気遣いもなく、ゲンキが揚々とやってきた。

「なぁなぁオージ聞いてくれよ！さっき廊下で宇野紗彩ちゃん見たんだけどやっぱりかわいかったぁ。」
「ふられたのにまだそんな呑気なこと言ってんのかよ。」

今まで頭がボーっとしていたが、ここでオレは気づいた。
「うえっ、もしかしてお前が言ってた『宇野紗彩』って女バスの『サアヤ』のことか？」
「たぶんそんなにない名前だから同じ子だろうな。」
「見た目どんな子だ？」
「黒髪のロングで前髪はセンター分けでぇ、目はパッチリしてて鼻筋は通ってて唇は薄いんだよね。そんでもって手足がスラリとながいんだよなぁ～」
「やっぱしそうだ。」

「でも女バスなのかぁ。いっぺんプレーしてるとこも見てみたいな」
「やめろ～～思い出させるなぁ～～！」

「どうしたんだよまたそんな騒いで」

先日こっぴどくやられたことを説明した。

「まじかぁ～ますます魅力的に思えてきたぜ、サアヤちゃん。それにしても女子に負けるってお前やばくないか？」
オウジタイガに痛恨の一撃。

「うるせぇ、ほっとけ！」
この言葉をしぼり出すのに１０秒かかった。

追い打ちをかけるかのごとく、昼休みにコハル先輩に呼び出された。

「昨日の試合はボロボロでしたね。」
「はい。」
心がズキズキする。

さらに何を言われるのだろうとヒヤヒヤしていると、ボストンバックを渡された。

「なんですかこれ？」

「強豪校やプロの試合を集めたＤＶＤです。昨日の試合を見て確信しました。タイガくんはドリブルのスピードはかなりいいですが、フェイクなんかの小技がなさすぎです。要するに動きが単純すぎます。」
「はい。」
これ以外なんもいえねぇ

「これを見てディフェンスの動きを見て予測できるようになってください。それと同時にドリブラーの体の使い方も勉強してください。両方ができればドリブルだけでなく、ディフェンスの方の強化にもつながるハズです。」
「わかりました」
「それではごきげんよう」

この大量のＤＶＤは見るだけでも骨が折れそうだ。

初めて人前でプレーする姫

いよいよ地区予選の一回戦が始まろうとしていた。
あたしにとっては初の試合である。

「ヒメ大丈夫？」
レイが声をかけてくれる。
「おおお落ち着いてるわよ、なに言ってんの。」

「フフッ。ほんとヒメ見てると飽きないわぁ～」
「ちょっとアカネ、それどういう意味～？」
「どうもこうもそのままの意味よ？ビビりまくってんのが顔に出まくり。」
「バカにすんなぁ～」

「あらヒメさん緊張がほぐれてきたみたいで良かったですね。」
「え？」
気づくと妙なドキドキ感は収まっていた。もしかしてアカネそのためにわざと…

「あ～おもしろかった。」

チガウ、やっぱコイツはあたしで楽しんでるだけだった。

いよいよ試合が始まった。

ジャンプボールは一番身長の高いこのあたし。
幸い相手は１７０そこそこだったので競り勝つことはできた。

ただボールを送る先を間違えていきなり相手ボールにさせてしまった、

「どんまい、しっかりディフェンスよ。」

負けた。完敗だった。あたし以外は実力のある子たちがそろっているチームだったのに。あたしのところから点を取られまくったのだから、完全にあたし一人足を引っ張っていた。
5人ぴったりしかいないため交代もできず、あたしは後半足を動かすことすらできなかった。

とにかく何もできなかったという思いが強く残った。

試合が終わった後、みんなが落ち込んでいるあたしに向かって「ヒメがんばってたよ」とか、「これからまだまだあるじゃない」とか言われたのが余計に心苦しかった。

慰め王子

「あ～ねみぃ～～」
「オージ、どうしたん？昨日遅くまでゲームにでもはまってたん？」
「ちげぇよＤＶＤ見まくってたら気づいたら朝になってなたんだよ。」
「ＤＶＤって。オージ朝からいやらしい～～」
「ばかっ！オレが見てたのはバスケのＤＶＤ。コハル先輩に指示されてずっとドリブラーの動きとか研究してたの！」
「ふ～ん、なるほどねぇ。で、成果はあった？」
「まだ見始めて数日だよ、そんなすぐに結果が出りゃ苦労しねぇよ。」
「そりゃそうか、じゃあ引き続きがんばってくれたまえ。」
「はい閣下。ってなんでお前上から目線で行ってくれてんだよ～」
こんな感じで今日も平和に学校生活を送っていた。

そして放課後。授業中たっぷり睡眠はとったので元気満タンだ！
これで今日も部活にガンガン打ち込めるぞ！

と言いたいところだが、またしても「学級委員のお仕事」でヒメと居残ることになった。

「だからここはこうした方がいいよな。」
「うん、そうだね。」
「で次はここはこうしよう。」
「うん、そうだね。」

「おいヒメ、さっきからお前「うん、そうだね。」しか言ってないぞ！こっちは早く部活したいのにちゃんと仕事しろよな。」
「うん、そうだね。」

「だぁ～もうなんだってんだよ。」

オレはいらいらして思いっきりデコピンをかましてやった。

「痛っ！なにすんのよ！」
「そりゃこっちのセリフだよ！さっきからボーっとしたまんまで使い物になりゃしねぇ。」
「なによ、女子に向かってそのセリフ失礼じゃないの？」
「こんなときに男子も女子もあるか！いったいどうしたってんだよ。なんか悩み事でもあったのか？」
「べ、別になんにもないわよ！あんたにそんなこと聞かれる筋合いはないわ！」
「じゃあ、もっとシャキッとしろよな！じゃないと学級委員の仕事終わんないだろ！」
「ごめん。」

あれ、いつもと反応が違う？いつもだったらもうちょっと言い返してくるはずなのに。ほんとになにかあったのか？
とりあえず話題を変えようと思って聞いてみた。

「そういえばこの前の地区予選の試合どうだったんだよ？」
「うるさい！アンタに関係ないでしょ！！」

今度はキレてきた。ほんとなんなんだよ。

「もしかして派手に負けちゃったとか？」

「…うよ。」

「え？」

「そうだって言ってんのよ！あたしのせいでボロ負けだったのよ！」

やばい涙目になってる。

「ご、ごめん悪かったよ。」

「あたしもうバスケやってく自信ない。」

「そりゃ初心者で初めての試合だったんだもん、できなくて当然だ。」

「でもあたし、レイに身長高いからって期待されて入ったのに、試合でなんにもできなかった。」

「バスケは経験積んでナンボだぜ？いくらお前が身長高くて有利って言ったってそんな簡単には活躍できねぇよ。実際チームメイトも誰もお前を責めたりしてないだろ？」

「たしかに、それはそうだけど…」

「じゃあこれからがんばりゃいいじゃないか、お前もみんなもまだ一年なんだし一緒に成長していけば。」

「そうね。」

この日初めて笑顔を見せた。

「じゃ、すっきりしたとこで練習励むためにちゃっちゃっと仕事終わらせますか！」

「うん！」

学級委員の仕事を終えた後、急いで部活に向かった。
さっきまでの沈んだ気持ちから解放された反動か、なんだか心も体も軽くなった気分で今日は久しぶりに気持ちよく汗を流した気がする。

練習後、アカネに聞かれた。
「ヒメ、今日なにかいいことあった？」
「え？なによ急に。別に何もないわよ。」
「今日の練習はなんか動きよかったわよ。」
「べ、別にいつも通りだし。」
「いやアンタこの前の試合負けてからずっと落ち込んだままで、練習も気持ちが入ってなかったよ？」

「そうなのよ、クラスでもずっとふさぎこんじゃっててさ。バスケ誘ったあたしとしてはちょっと責任感じてたんだからね。でも放課後まで元気なかったし、もしかして変わったのはタイガくんと二人で居残ってたときぃ？」
レイがにやにやしながらこっちを見てくる。

「ち、違うわよ！自分でさっき気持ちを切り替えたの！」
「あらあら～その反応はますます怪しいですな～。」
「なんのこと言ってるっていうのよ！」

ここでミスズがにっこりして言った。
「それはずばり恋ですね♪」
「ちっが～～う、誰があんな生意気くそチビ男なんかを！」

「あ、もしかしてウワサの『プリプリコンビ』？」
「アカネ、その名前でもう一度呼んだら本気でキレるから。」
「お～コワイコワイ。」

「あたしはバスケマジメにやってくれればなんでもいいんだけど。」
「サアヤ～、あんたのそのクールなとこ大好きよ！」
「ただ自分より身長の低い男ってのは物好きよね、アンタも。」
くそっひとこと多いぞ、冷血女め。

「よ～しヒメも元気になったところで明日からメニュー増やすからね～。」

部長の鬼発言に、あたしは元気にならなきゃよかったと少し後悔した。

憧れ王子

優勝した。

我が翔泉高校は県予選を勝ち抜き、県内ナンバーワンになったのであった！

それを応援席から眺めていたオレも少なからず興奮を覚えた。

早くオレもコートの中でアレを味わいてぇ。

３年生が引退した後、キャプテンを任されたのはソーマ先輩だった。
元キャプテンであり、オレの一番の憧れであるシュースケ先輩曰く、
「高校からバスケを始めたお前だが、一番チームのことを見られている。」らしい。

やっぱりシュースケ先輩言うこともかっけぇー！！

こうして新チームとしてスタートしたオレ達だったが、週末にはさっそく練習試合が組まれた。
「とにかく試合をこなす」というのが我がバスケ部の伝統らしい。
と言っても２年前からの『伝統』らしいが。

「きょ、今日のスタメンを発表します。」
３年生のマネージャーが抜けて、この練習試合が初めてまともに指揮をとるというコハル先輩も緊張気味だ。

「ＰＧソーマくん、ＳＧリョウスケくん、ＳＦカズキくん、ＰＦジョーくん、Ｃイシちゃん」

カズキがスタメンかぁ、ちくしょー！

ちなみに2年生はソーマ先輩、ジョー先輩、イシちゃん先輩の３人だけだった。一年は全部で８人いる。

ここでスタメンの簡単な見た目を説明しておく。

ソーマさんはＰＧの割に高い身長１８１センチだ。長めの襟足がちょっとかっこいい。
ジョーさんは髭の生えている割に優しい顔立ちで身長は１８７センチ。
イシちゃん（この人だけはコーハイでも『ちゃん』づけオッケーになっている）は１９０センチだが、特筆すべきはなんといっても９０キロある超重量級の体格だ。

あと一年二人は、リョウスケは１７０センチでロン毛、カズキは１８５センチで髪が左寄り（アシンメトリーとかいうらしい）な変な髪形をしてる。

「新チームだからってびびってんじゃないぜ、それは相手も一緒なんだかんな。いくぜっ！」

「うっす！」
新キャプテンの一声とともにコートへ入っていった。

ジャンプボールはジョーさんだ。

あっ取られた。

しかも速攻で得点を決められてしまった。

「なにとられてやがんだよ、××ついてんのかオラァ」
この声の主はコハル先輩だ。

説明しよう。コハル先輩は試合中はその長い髪をポニーテールにすることで鬼のような性格と口調に変貌するのであった。

「よーし、一本行ってみようか。」
そういうのん気な発言とは裏腹に、ソーマさんから素早いパスが出される。
リョウスケが受け取ると、迷うことなくシュートを打った。

いきなり３ｐｔシュートだった。

リョウスケの一発で勢いづいたウチは、そのまま一気に流れをつかんで新チーム初勝利をおさめた。

ていうか早く試合でてぇ。

「それでは球技大会のメンバーを決めたいと思います。」

そう、来週は球技大会だ。何が嬉しいって今回は学級委員の仕事が司会だけで済むってことなんだよね！

部活の人は1チームに一人だけというルールがあるので、バスケはレイに任せるとして。

さぁてあたしは何にしようかなぁ…

「小泉さんバスケやってよぉ～」

「え、でもうちにはレイがいるし…」

「いやいやっぱバスケは身長でしょ」

みんな口をそろえてそう言う。

こいつらアホだな、人を見た目で判断するなんて。

レイもなんか言えばいいのに、澄ました顔で卓球の欄に自分の名前を書いている。

そして試合当日。

あれ、できる、できるぞ？

相手は初心者ばっかりだったから、身長の分と2か月分の練習で他の人より動けていた。

今までチームメイトや対戦相手が経験者ばっかだったしあんま分かんなかったけど、ちゃんと上手くなってるみたい。

ただしその自信は次の試合で無残にも打ち砕かれることになる。

次は7組、そうサアヤのいるクラスだ。

容赦なくドリブルで攻め込んでくる。っていうか他の子にもパス回してあげなよ、ホントとことんバスケには貪欲なんだから。

ということでボコボコにされましたとさ。

いちおう男子の方も応援に行くことになった。

さてウチのクラスのチビッ子バスケ部は健闘しているのか？

「おいそこ走れ！」

「違う、今のは逆だ。」

ダメだ、全然チームメイトを使いこなせてない。少なくともこいつにはＰＧの才能はないようだ。

ただ、ドリブルのキレは（ほぼ初心者の）あたしから見てもスゴイと思わせるほどのスピードだった。不覚にも一瞬かっこいいと思ってしまったことは誰にも言わないでおこう、またネタにされちゃかなわん。

コーンr王子

この前の決勝リーグの先輩の刺激を受けて、思い切ってコーンロウにしてみた。
よく黒人のＮＢＡプレーヤーとかがやってる、頭全体をブロックごとに何本かずつ三つ編みにしたものだ。
ただこれが大変なのなんなのって。
まずは手入れが大変だわ（頭がかゆくてしょうがない）、家族に猛反対されるわ（時すでに遅し）、街でヤンキーにからまれるわ（ホント怖かったぁ～）、とイイことなしである。
さらにコーンロウにした翌日学校に行くと、驚愕のあまりみんなが声を失っている中、一人だけ違う反応をしてきたやつがいた。
「アハハハハッ！なにそれ、ウケ狙い？」
「バカ、ちげぇよ、これはバスケットプレーヤーとして生きていく証（あかし）だよ！」
「ほんと意味わかんない！それで急に強くなったとでも思ってんの？」
「ばか、これからの練習でより気合い入れてやってくためだよ！」
「なにそれアッハハハ、それにしても何回見ても笑えるわよ。」
「うるせぇ！」
くっそぉ、人の本気をバカにしやがって！くそっまたしてもこのデカ女、腹立つわー！！
しかしこれで完全にあとには引けなくなった。これから何が何でもレギュラーとって活躍してやるっ！

意外な人にモテてしまった姫

タイガにコーンなんちゃらでおもいっきり笑わせてもらった日の放課後、あたしは違うクラスの女子に呼び出されていた。

さて、なにかしたかなと振り返ってみるものの、平凡極まりない生活を送るあたしとしてはなんの心あたりもない。

どきどきしながら指定された空き教室に向かった。

そこには一人の小さくてかわいらしい女の子がいた。身長はレイと同じくらいか？

「あの、あたしを呼んだのってあなた？」

「…はいそうです。」

顔をよく見るがやっぱり知らない子だ。

「…で、ご用件はなんでしょうか？」

「あの、好きです！」

一瞬固まってしまった。それから頭の中はこの「好き」に対するイロイロな意味を考えていた。

「あのどういう意味で…」

「すいません！小泉さんはそんな気ないのはわかりきってるんですけど、どうしても伝えたくて。あの、球技大会の時の小泉さんすっごくかっこよかったです。」

「あ、ありがとう。」

「ほ、ほんとにそれを伝えたかっただけで、別にそれからはなにも期待してないのでキニシナイでください。あ～もう自分でも変なこと言ってるなって分かってるんですけど。」
「はぁ。」
「とにかくわたしはバスケをしている小泉さんが好きです。陰ながらですけど応援してます。これからもがんばってください！」

そう言い残して去って行った。

なんか複雑な気持ちだった。たぶん彼女の方がもっと複雑な心境だったのだろうが。

とりあえずあの子も言ってくれたようにバスケがんばろう。そう心の中で改めて思った。

インテリ?王子

おれがせっかくはりきってコーンロウにしたのに、先週からテスト期間で練習は休みだった。

ちなみにオレは抜群に成績がいい。

数学Ａは８７点、数学?にいたっては９１点だ。どうだ驚いただろう!

他の教科?ナンデスカソレハ?

「あ~オージ英語赤点じゃんよ~!」

「ば、ばっか勝手に人の点数見んな!!しかもそれをデカい声で言うんじゃない!!」

「そこ、うるさい!しかも赤点を自慢するんじゃない!」

いやいやいやいや、自慢なんかいっさいしてませんけど!英語担当の鬼瓦先生は成績悪いヤツにはとことん厳しいことで有名だ。

それにしても赤っ恥かくわ、怒鳴られるわでいい迷惑だぜ。仕返しにゲンキの点数ものぞいてみた。

９８点だと!?

「ゲンキ、お前そんな頭よかったのか?」

「ふっふーん、どうだい見直したかい赤点オージくん。」

くっ。悔しくてなんにも言い返せない。

「あ~でも１００点とれたのになぁ。まさか「ｂａｓｋｅｔｂａｌ

l」の「b」を「d」と間違えるなんて凡ミスもいいとこだぜ。」
うざい。なにを言われても自慢にしか聞こえない。しかもなんだそのオレへの当てつけのような間違え方は。オレだけじゃなくバスケをバカにされてる気分だ。

ゴツン

急に頭を殴られた。いってぇな誰だよと振り返ってみると、そこには鬼瓦先生が立っていた。
「まったく赤点のくせにテスト直しもせんとくっちゃべるとはいい度胸だな。お前は今回の範囲のテキスト丸写し3回分を提出すること。わかったな？」

「…はい」

世の中って理不尽だと思わない？

英語の時間に叫ぶ姫

今日の英語の授業はテスト返しということで、テスト直しが終わったら各自で自習ということになった。
なんか赤点がどうとかで騒いでいる、文字通りバカがいるが気にすまい。

割と点数の良かったあたしはすぐにヒマになり、レイとおしゃべりしていた。

「この前の球技大会なんであたしに譲ったの？レイが出た方が絶対強かったのに。」

「そりゃあたしも出てみたかったけどさ。初心者ばっかを指揮するってのも楽しそうだったし。でもそれ以上にヒメに経験つんでほしかったから。」

「え、どういうこと？」
「初心者ばっかりとはいえ試合は試合でしょ。それに自分が一番バスケを知ってるという状況で、どういうふうに動けばいいかも体験してほしかったし。それと少しは自信もついたでしょ？」

「なるほどね、レイもいろいろ考えてくれてるんだ。」
「そうよ～「自分に自信がないとなにをやってもうまくならん」がうちの中学の先生の口癖だったから実践させてもらったわ♪ヒメの場合、自信モテただけじゃなくて他にも『モテた』ことがあったみたいだけどぉ。」
にやにや顔でこっちを見てくる。ホントこの子にはかなわんよ。

話題を変えようと思っていると、新学期のことを思い出した。
「…もしかして学級委員に推薦したのもそういうこと!?」
「あったりぃ、アンタ見るからに自信なさげだったし、人前にでも立ってもらって度胸付けてもらおうと思って。でもまさか『プリプリコンビ』なんて名物コンビが生まれるとは思ってなかったけど。ププッ」
「その名前で呼ぶなぁー!!」

「そこ、うるさいぞ!」
「すいません。」
鬼瓦先生の檄は女子相手でも容赦なしだ。

それにしてもなんであたしの方が怒られなきゃならんのだ。…たしかにうるさかったけれども。

補習王子

赤点だった人は補習を受けるというのがウチの高校のルールだった。
御多分に漏れず、オレもこうして英語の補習にやって来たわけである。
補習を受けるのはごく一部の生徒なので授業は他のクラスの人と合同になる。なんか転校生になったみたいで心細い。

そんな中、知っている顔を見つけた。
「よぉミノル。」
「お、タイガじゃねぇか、補習受けるなんてオマエバッカだな～」
「それはお前も一緒だろ！」
「そうだった。ハッハッハッ」
どんだけのん気なんだよコイツ。同じバスケ部として恥ずかしいぜ。
まぁこの状況だけでいえばオレも同類なんだけど。

バスケ部2人が集まれば当然のごとく（？）バスケの話題になっていた。
「しっかしこの前の練習試合でのリョウスケはすごかったよな。」
「ああ、点が欲しいとこでいつもきっちり決めてくるんだもん。」
「さすが1年で唯一最初からベンチメンバー入りしただけあるよな。」
「たしかに、前の大会でもあのレベルの中でも全然気後れしてなかったし。」
「はぁ～オレも早く試合でてぇなぁ～」
「タイガはせっかくドリブルでいいもん持ってんだからもっとフェイクとか勉強しろよ。」
「それコハル先輩にも言われた。だから今ＤＶＤで学習中だよ。そ

れよりお前のポジションは大変だよな。」
そうミノルはＰＦ、レギュラー確定のジョー先輩と同じだ。
「そうなんだよねぇ、この前なんか鬼バージョンのコハル先輩に「ジャンプバカ」って言われた。」
「ハハッ、当たってる当たってる♪」
「言っとくけどお前にはぜってぇ負けないかんな！」
「こっちこそ！」

「いつまでしゃべっとるんだ！」
「すいません！」
補習もまた鬼瓦先生だった。

それにしてもミノルはいいやつだ。オレの身長が低いのをバカにしている部員も多い中、こうやって対等に接してくれる。いつか一緒に試合でプレーしてぇな。

「王地、ボーっとしとるんじゃない！」
「すいません！」

「今から重大発表をします！」

突然レイから部員に向かって言い放った。

「これより部外恋愛禁止！」

一瞬みんなの思考が止まる。

「ごめんレイなにそれ？」

「恋愛」という言葉に真っ先に反応したのはアカネだった。

「文字通りよ。これから恋愛はしてもいいけど相手はバスケ部に限るってこと。これは男バスのマネージャーのコハルさんも了承済みだからね。」

やっぱ意味わかんねぇ～。ふつう「部活『内』恋愛禁止」ならたまに聞くけど。

「その『部活外恋愛禁止令』になんの意味があるのよ？」

「よくぞ聞いてくれました！これはバスケをしている者同士がお互いに刺激し合い、高め合うことを目的とするすんばらしい掟であるのです！えっへん。」

そう言って手を腰にあてているレイはどう見ても「前へならえ」の先頭の人にしか見えない。

「バスケをやっている人間としか恋愛をしてはいけない。他校相手でも認めるけどバスケの応援は禁物よ。ちなみにあたしはバスケ一

筋ですから。だからこれはみんなのための掟よ。」

「ちょ、ちょっと待ってよ、そんな急に言われても困るし。」
あたしだって女子高生だ。自由に恋愛くらいしてみたい。

「え～なになに、もしかして他の部活にもう好きな人いるの～？」
「別にそういうわけじゃないけど…」
あたしがなにか言いあぐねていると、

「へぇ～、おもしろそうな考えですことね。」
早くもミスズはノリノリだ。もう少し疑問とか持とうよ。

「まぁ男子部員はそこそこ目ぼしいのもいるし、アタシはかまわないけど。」
これはアカネだ。狙う気マンマンだな。

「こんなのサアヤは反対よね？」
最後の頼みの綱として聞いてみる。あっ、でも考えてみたらこの子恋愛とか興味なさそうだった。

「べ、別にアタシはそれならぜ、ぜんぜんかまわないけどっ」

あれっ？なんかいつもと違って乙女チックな反応！
「もしかしてすでにバスケ部に好きな人いるとかぁ？」

あのクールなサアヤがなんだかもじもじしている！
「じ、実は付き合ってるの。」

「え～～！！だれだれ？」

「…イシちゃん先輩」

「え～～～～！！！！！」

これには他の４人とも驚きだった。

イシちゃん先輩はお世辞にもカッコイイとは言えない。下手したらぽっちゃり系だ。それが女バス内どころか、学年単位でも１、２を争うかわいさのサアヤが付き合っているというのだからそりゃビックリするさ。

どうやらそのぽっちゃり加減がたまらなくいいそうだ。

今日あたしは人は見かけによらないことを学んだ。

品評会王子

今日の練習後、コハル先輩から「部活外恋愛禁止令」なるものが通告された。
ちなみにコハル先輩は、
「私はシュースケ先輩一筋ですから問題ありません。もうフラれましたけどね！！」
なんか完全に私情が見え隠れしているのは気のせいか？
そんなことよりみんなは我が事の方が大事らしく、そこから一気に勝手な「品定め」トークが始まる。

「ていうか何気に女バスってみんなレベル高いよな？」
「たしかに。オレはミスズちゃんがいいな。なにげに本物のお嬢様らしいぞ。」
「お上品さが湧き出てるもんなぁ。」
「レイちゃんもちっこくってかわいらしいよな。」
「でもあの子バスケ一筋で彼氏作らない主義らしいぜ。」
「まじかよ～～」
お前ら本気で誰かと付き合うつもりなのか？

「でもオレはやっぱサアヤちゃんだよなぁ」
「うんうん」
大多数がサアヤちゃん派だった。
あとでコイツラは絶望を味わうことになるのだが…

「異議あり！」
そう声を立てたのはカズキだった。

「オレはアカネちゃん一筋だ。誰にもジャマさせねぇ。あのギラギラした視線がたまらんぜ」
ああ、お好きにどうぞ。

「そういえば小泉もデカいけど、そこそこかわいいっちゃかわいいんだよな」
「おい、やめとけ。あの子はとっくにタイガのもんらしいぞ」
「ちょっと待てやーー！」

誰だそんなこと言い出したのは。そんな根も葉もないウワサは断固断ち切らねば！

「でも逆凸凹コンビってなんかおもしろそうだよな。」
「おもしろいかどうかで人の這った惚れたを決めんじゃねー！」

さてさてこの指令は誰か縁のあるヤツはいるのかいないのか…

猛アタックを目撃する姫

「部活外恋愛禁止令」がでてから、アカネの行動が急変した。

練習後は必ず、

「リョウスケく～ん、はいタオル。しっかり汗ふいてね♪」

「サンキュ」

「リョウスケく～ん、これクッキー作ってきたの。よかったら食べてね。」

「お、おうありがとう。」

とまぁこんな感じだった。

完全にロックオンしたようだ。

極めつけはこれだ。

「リョウスケくん、これアナタのために一生懸命編んだの。受け取ってくれる？」

「いいよ、これ作るの時間かかっただろ？いつもありがとな。」

「ううん、全然たいしたことないよ！それより受け取ってくれて嬉しい！」

あたしはつい気になって聞いてみた。

「最近完全にアカネお熱だよね。でもどうしてリョウスケくんなの？

「だってリョウスケくん。入部してからずっと活躍してるじゃん。同じシューターとしては憧れて当然でしょ。あと何気にオシャレでかっこいいしさ！」

最後の理由だけにやたらと気持ちがこもっていた気がするのは、気のせいだということにしておこう。

「決めた、今日リョウスケくんに告白するわ！」
「がんばってねアカネ！」
あの努力を見たら応援しないわけにはいかない。

練習中、アカネのシュートはいつにもまして良く入った。まさに愛の力はオソルベシ。

その日の練習後、
「リョウスケくん、後でちょっといいかな？」
「え？別に少しなら構わないけど。」
「やった♪じゃああたし先に体育館裏で待ってるから。」

そう言うとアカネは去っていき、リョウスケも体育館裏に消えていった。

火照り王子

サアヤちゃんがイシちゃん先輩とすでに付き合っていることを知ってしまった「彼女作りたい組」（元サアヤちゃん派）は他校の女子に試合でアピールするためだとかで異様に練習に燃えている。
これを知っててやったのだとしたら、コハル先輩もなかなか策士だ。

7月に入って体育館の気温も高くなり、自然とみんなの顔も赤くなっている。

ところで最近やたらとリョウスケにかまってくるアカネちゃんが今日ついに動いたようだ。体育館裏に呼び出したらしい。
当然みんなはその結果を気になって聞いてみる。
「おいリョウスケ、アカネちゃんとはどうなったんだよ?」
「ふった。」
「どうしてだよ、かわいいじゃんよ?」と周りが問い詰める中、
「オレ今バスケのことしか考えられないから。」だそうだ。
なんというかコイツもストイックなやつだ。

でもオレもちょっと言ってみたいセリフではあったりする。

ちなみにアカネちゃんのリョウスケへのもうアピール期間、長さにして一週間の間はカズキはインフルエンザで休んでいたので何も知らない。

「部活外恋愛禁止令」が出されてから初めて練習に参加したカズキは、練習後いきなり体育館の中で叫んだ。

「アカネちゃん好きです！つきあってください。」

体育館にいる誰もが一瞬固まる。男どもの方はやっべぇ、リョウスケのこと伝えてなかった！という焦りの気持ちも入っている。

本人の顔は真っ赤だ。これは暑さのせいではないだろう。なんだかこっちまで恥ずかしくなってきたぜ。

「いいよ！」

その沈黙を破ったのは、アカネちゃんのこの一言だった。

その思いもよらない発言にまたしばらく体育館は固まった。

もうすぐ夏休みがやってくる頃だ。

公開告白があったあとアカネは質問攻めだった。
「ビックリ、あんたつい昨日までリョウスケくんラブだったじゃないの。」
「カズキくんじゃ全然タイプ違うじゃん。」
「やっぱりフラれたあとで弱ってたから効いちゃったとか？」
というかこれらの質問事項はすべてアタシだ。ウチの部員は他人のそれには関心が薄いらしい。日頃はあんだけあたしとタイガのことはムリくりいじってくるクセに。なんか不公平だ。
「う～ん、ていうかリョウスケくんダメだったからカズキにしようと思ってたし、手間が省けたって感じぃ？」
こいつはとんでもない尻軽女だなオイ。せいぜいお幸せにどうぞ。
「さぁすっきりしたとこで夏休みの予定のお知らせです！」
相次ぐ二組のカップルのことなんかどこ吹く風でレイが言い放った。
夏休み期間の予定表が書かれているプリントが配られる。
けっこう練習がびっしりだ。
これを見てアカネがぼやく。
「え～これじゃカズキとデートできないじゃん！」
「はいそこ、『部活外恋愛禁止令』の原則を忘れない！」

こんなときに、何も言わずにちょっとさびしそうな顔をするだけなのはサアヤらしい。

まぁヒマ人のあたしにとっては予定詰まっててくれた方がありがたいんですがね。

「けっこう男バスとの練習時間被ってるんだね。」
「そりゃアタシら5人しかいないとせっかくコートがあっても練習できることが限られてくるからね。コハル先輩と話し合ってなんとか合わせてもらったわ。」

「男子の練習に合わせることになるからハードになるのは覚悟しておいてよね！」
「はい！」

「でもこの『お楽しみイベント』ってなってる日はなんですの？」
「さすがミスズ、よく気づいてくれました。でも内容は秘密よ♪」

けっきょく教えてくれんのかい！

スピン王子

夏休みに入ってすぐ紅白戦が行われた。
日頃のレギュラーメンバーAチーム対残りのBチームという組み合わせである。

ちなみにウチの部員は11人。

その唯一のスタメン落ちがオレだった。

「ディーフェンス、ディーフェンス！」
一人声を出す。

むなしくて泣きそうだぜ。

得点は当然というか、Aチームの優勢であった。

Bチームの監督として入っている鬼モードのコハル先輩の檄が飛ぶ。
「スタメン入りしたかったら死ぬ気でやれや！」

「オラ、ジャンプバカ！ボール取ったらすぐに出せ。」
「うっす！」
これはミノルだ。

後半から出場するようコハル先輩から指示があった。

待ってました！

オレのマッチアップはカズキ。

「出てきたばっかで悪いが、愛のパワーで無敵なオレは抜けねぇぞ？」

「そんなふざけたパワーには負けねぇよ。」

オレにボールが回ってきた。

ダムダムダム

クルッ

「なにっ？」

スピンムーブだ。

前にサアヤちゃんにこれで抜かれまくったのが悔しくて何度もＤＶＤを見て研究したし、何度も練習していた。

またボールが回ってきた。

もういっちょ。

クルッ

スッ

ちっ、スティールされちまった。
「2度目は通用しねぇぜ！」
ちなみに今完成している技はこれだけ。その後は、得意のスピード任せのドリブルと織り交ぜてなんとか対抗した。

一方ディフェンス。カズキはスタメン勝ち取ってるだけあって多彩な攻撃で攻めてきて抜かれまくった。
「タイガぁ、てめぇディフェンスの方なんにも勉強してこなかっただろ！」
「すいません！」
まったくコハル先輩の言う通りなのだった。

意外と押しに弱い姫

「これから本格的にセンターとして育てていくから覚悟しなさいよね！」
レイはそう言ってあたしを指差したのは昨日のこと。

ただいまミスズちゃんとおしくらまんじゅうの真っ最中である。
べ、別に練習中に遊んでるわけじゃないんだよ？これはスクリーンアウトと言ってリバウンドのポジション取りの際に重要らしい。リバウンドの際ゴールに近ければそれだけ有利だからだ。
しかしミスズちゃん、お上品な見た目からは想像もつかないほど『押し』が強いな。身長も体重もあたしの方が一回り上なはずなのに全然押しこめないよ～。

「ヒメさん、もっと体制を低くしないと力が入りませんことよ。」
「はい！」

ちなみに残りの3人は今日は男子との合同練習中。

練習後、タイガがなんかこっちにやってきた。
「見ててておもしろかったぜ。」
「なにがよ？」
「デカいだけが取り柄のお前が、ミスズちゃんに力負けしてひぃひぃ言ってるとこだよ。」
「なんですってぇえ～！」

「でもよくがんばってたぜ。」
「え？」
「リバウンドは大事だからな。じゃないとおれ達シュートする側の人間は遠慮なく打てなくなるし。これからもがんばれよ！」
「え、ああ、うん。」

いったいアイツはなにを言いたかったんだろう。そしてこの気持ちはいったいなんなんだろう？

夏祭り王子

練習は連日容赦なく続いた。時間もさることながら内容も十分に濃いバスケ生活を過ごしていた。

そしてようやく夏休み始まってから初めての休みの日、夏祭りをカズキに誘われた。

これでテンションアガらないワケがない。
だって「お祭り」ですよ、「お祭り」。いやっほ〜〜い

バッチリ浴衣に着替えて待ち合わせ場所に行くとフツーの私服のカズキが待っていた。やっべはりきりすぎちゃったのバレたかな?

「よっ」
「おう、やっぱ女子と待ち合わせすると絶対遅いんだよな〜」
「あ、アカネちゃん呼んだのか。」
そりゃそうだよな、念願の彼女とこんな日に一緒に行動しないわけがないよな。

「じゃあオレおじゃまむしじゃね?」
「そこらへんはご心配なく〜」

カズキはにやにやしている。なんだってんだよ。

しばらくしてアカネちゃんともう一人があらわれた。

髪を盛っているせいでいつも以上に高いその『全長』。

イヤな予感はしていたんだ。

あらわれたのは小泉ヒメだった。

「なんだよオマエかよ～」

「それはこっちのセリフよ。バスケ部の誰かが来るっていうからてっきり自分より身長高い子来ると思って、せっかくはりきって盛ってきたっていうのに」

「じゃあ早くそれ戻せよ。デカいのが目立つだろ。」

「相変わらず小さいわね。」

「どういう意味だよ？」

「２つの意味でよ。あっ、ついでにおバカさんでもあるからわかんないか。」

「んなにうぉ～～！」

「やっぱプリプリコンビさいこ～～」

「だろ～やっぱ一緒に来てもらって正解だったぜ！」

できたてほやほやカップルは人のケンカを見といて大爆笑である。

なんかもうイロイロ回る前にイロイロ疲れた。

最初は４人でお店を回っていたのだがいつの間にか、というか当然のごとくカズキとアカネちゃんは二人でどこかに行ってしまった。

となるとこっちも二人っきりである。

「しょうがない、たこ焼きでも食べよっ」

「「しょうがない」ってなんだよ。でもオレもちょうどたこやき食べたかったし別にいいけど。」

その後は射的屋。
「あんたＳＦなんだからちゃんと当てなさいよ。」
「こんな時にバスケ関係ないだろ！」
「なんでよ、ＳＦっていったらシュートとか入れてナンボのポジションでしょ？」
「オレはドリブル派なんだよ！」
「なにそれ意味分かんな～い。サアヤやカズキくんはなんでもこなせてるじゃない。」
「う、うるせぇ！」

なんだか今日はやられっぱなしだ。

「今日はそこそこ楽しかったわよっ」
「なんだよ「そこそこ」って」

「また明日ね～」
「ああまた明日」

べ、別にまた遊ぶわけじゃないからな。部活でまた顔合わすだけだっつうの！

夏の暑さに負けなかった姫

夏休みも残すところあとわずか。

思い返せば暑苦しいおしくらまんじゅうから始まり、きつ～い練習の数々。

お盆も過ぎて少し体育館の中も涼しいとは言わないまでも、蒸し風呂状態から少し解放されつつある今日この頃。

刻一刻とその日は迫ってきていた。

そう、『お楽しみイベント』。

これだけを心の支えにして今日まで夏休みの練習を頑張ってきたと言っても過言ではない。

ついにレイからソレについての発表があった。

「この夏の総仕上げに、練習試合を行います！」

そっちだったかーー！

てっきり娯楽系だと思って、浮かれちゃってたあたし。

これなら夏祭りの方がよっぽど楽しかったし　…で、でも、べつにアレもそこまで楽しかったわけじゃないけどねっ！

そんなわけで『お待ちかね』の練習試合スタート！

レイを起点として、サアヤとアカネが序盤からバンバンシュートを決めてきた。

それでもたまに外すことがある。そんな時はあたしの出番だ。この夏マスターしたスクリーンアウトで相手のCをゴール下の外側へ追いやる。そこをミスズががっちりとリバウンドを取ってくれるので、連続して攻撃が可能だった。

「今度はヒメさんにも見せ場を作って差し上げますわね。」

ミスズにそう言われて間もなく、そのときがやってきた。

相手のシュートが外れた。

ミスズは自分のマーク相手を抑え込んでいる。どうやらここはあたしが跳ばなきゃいけないみたいだ。

相手の指先があたしの手首の外側をかすった。

取った！

あたしがリバウンドを決めて、ボールを取ったのだ！

「ヒメ！」

すぐに声のした方に夢中でボールを投げた。

その声の主はレイだった。あっという間に一人でコートを駆け抜け速攻を決めてしまった。

これってアシストっていうのだろうか？初めて得点に絡めた気がして、まだ試合中なのに嬉しさがこみ上げてきた。

試合は６９－５１で勝った。

みんなに褒められた。

夏の成果は出ていたみたい。

やっぱり勝つっていいな。

本末転倒王子

夏休みの間コハル先輩からずっと言われてきたことなんだが、
「今からディフェンス力のアップは期待してませんから、その代りもう一つドリブルテクニックを身に付けてくるように」
と言われ、もっか家でＤＶＤ鑑賞中。

それにしても見るだけで疲れるんだよなぁ～、これ。やっぱりバスケは見るもんじゃなくてプレーするもんだよな！

なんて思っているとカズキから電話がかかってきた。
「今なにしてる？」
「バスケの勉強中だよ。言っとくけどこの前みたいに遊びの誘いなら残念だがお断りだぞ。オレは日々バスケのために生きてくことを決めたんだかんな。」
「それも大事だけどさ、オマエ夏休みの宿題って終わった？」

しまった～～

「この間はさてはオマエやってねぇな？」
「おっしゃるとおりでございます。」
「明日３１日は練習休みだろ？それでそんな哀れな子羊どもを集めて勉強会でもしようと思ってさ。」
「カズキくんナイスぅ！」
「じゃ明日１０時に学校の待ち合わせな」
「おう！」

次の日集まったのはカズキとミノルとアキヒトだった。

「なんだよミノルお前もかよ。」

「あったりめぇよ、宿題は前日まで残すのが男ってもんだぜ！」

こいつはバカか。でも状況はオレも一緒だから反論ができない。

４人で勉強をしていると３０分もすると、カズキとミノルは飽きたと言ってジュースを買いに出て行ってしまった。

残されたオレもなんだか集中力が切れてしまった。

今はアキヒトと２人っきりの状況。

カズキやミノルとは部活でもよくバカをやっていたりするが、アキヒトとはあまり話したことがなかった。なので少し緊張していた。

「なぁアキヒト、お前マジメそうだけどなんで宿題やってなかったんだ？」

「だって毎日のように練習だったじゃん？」

「オレが言えた義理じゃないが、それは他の部員も一緒じゃないか？」

「オレ実は練習の反省ノートとか書いてるんだ。で、書いてるうちにいろいろチームの構想とか考えてるとあっという間に時間なくなるんだよね。」

「さすがＰＧだな。チーム全体のこと考えてるなんてすげぇよ！やってることがやっぱ違うなぁ。」

「そんなことねぇよ。オレはソーマさんに追いつきたくて毎日必死だよ。」

オレがただただ感心しているとカズキとミノルが戻ってきた。

「お、なんかおもしろそうな話してんじゃん、聞かせてよ。」

そこからは４人でバスケ談義で大盛り上がりだった。

夏休み最後の日に楽しい思い出ができたのだが、けっきょくその日宿題が終わることはなかった。

人の恋に振りまわされた姫

夏も終わるとあっというまに新人戦がやってきた。

1回戦は森山高校とかいう無名高校。そこそこ伝統はあるらしいが、ウワサじゃ合コンに行ったり、とっかえひっかえカレシを作ったりして遊びほうけてるような、いわゆる弱小校だった。

「みんないい、こんなチャラチャラした部と競ってるようじゃこの先なんて目指せないからね！」

「はい！」

試合は一方的だった。

そして今回の得点女王はなんといってもサアヤだった。その好調を見抜いたレイはサアヤにボールを集めた。容赦なく切り込んでいき一人で何本も決めた。これには森山高校のメンバーもなすすべもなかった。

試合は78－23で圧勝だった。

相手が弱かったこともあり、ベンチメンバーのいないあたし達にとって致命的なスタミナ不足は問題なく解決した。

「サアヤ、今日は絶好調じゃない！」

「じ、実はイシちゃんに今日がんばったらご褒美してくれるって約束してたんだ。」

「え、なに、なにぃ？」
「キスしてくれるって…」
「ひゅ～おアツイこって！次の試合も頼むよ！」
「うん！」

こういう時のサアヤは顔がかわいいとかじゃなく、仕草とか内面から出る乙女チックなところが女のあたしでもきゅんきゅんさせてしまう。

2日後、2回戦が始まった。

序盤は24－36で劣勢だった。すかさずレイがタイムアウトを取った。
「ちょっと、サアヤ1回戦の勢いはどうしたっていうのよ！？まるで動きがなってないじゃない！」
「…ごめん。」
「いったい何があったっていうの？」
「昨日イシちゃんとケンカしちゃって…」
「その原因てなによ？」

レイの追撃は止まらない。
「…イシちゃんのプリン食べちゃったの」
「はぁ？」
「だってあんまりにもおいそうだったからつい…」

ああ、サアヤもなんだかんだでスイーツ好きの普通の女の子なんだな。っていうか今はそんなことに感心してる場合じゃない！

「レイ、アタシのこと思い切りぶって」
「それで気合い入るとでも言うの？」
「わからない。でも何かきっかけがないと、何も始まらない気がする。」

「わかった」

バシッ、バシッ、バシッ

容赦ない往復ビンタが体育館に響き渡る。

「よし、これで5人全員気持ち入ったこと思うし、絶対勝つわよ！」
「はい！」

しかし1回戦の相手とは違って実力派がそろったチームだった。序盤のリードが効いたこと、徹底的に走らせたことで後半疲れが見えて５１－７０で負けた。

1プレー王子

女子の試合はもう終わったようだったが、シード権を獲得している男子はここからだった。

まず緒戦はベスト8まで勝ちあがってきた江戸川学園。

「相手の予想スタメンを発表すします。ＰＧの工藤１７４センチ、ＳＧ服部１７７センチ、ＳＦ高木１８５センチ、ＰＦ毛利１８８センチ、Ｃ目黒１９１センチです。ＰＧを中心にして、とても統制のとれたバランスのいいチームだと言っていいです。」

「身長差に関しては五分といったところか。」

「どっちが先にゴール下を制することができるかがカギだな。」

「こっちもいつも通り、ＰＧソーマさん、ＳＧリョースケくん、ＳＦカズキくん、ＰＦジョーさん、Ｃイシちゃんで行きます。他のベンチメンバーも場合によってはどんどん投入していくから覚悟しておいてくださいね！」

「うっす！」

試合は序盤から苦しい展開になった。相手のＰＧである工藤がフリーになった選手を見つけるのが上手く、ディフェンスにできた穴をうまく突かれて得点を許してしまった。

点差は１２－２０まで広がっていた。

しかしここで黙ってないのがゴール下の二人だった。ジョーさんはシュートブロックに何度も飛び、ピンチを救った。イシちゃんは簡単にゴール下へ入らせず、オフェンスでは見事にダンクを決めた。

「よーし、ここ止めて一気に逆転すっぞ！」

そのソーマさんの一言はウソではなかった。さっきのお返しとばかりに、ディフェンスをかわしてフリーになったリョウスケにパスをする。

シュパッ

お得意の３ｐｔシュートが決まった。

次はカズキだった。パスをもらうと中へ切り込んでいく。しかしそこもベスト８。目黒と毛利がマークを付けてきた。この高さの差じゃ入らない。

誰もがそう思った瞬間だった。カズキは体を後ろに下げながらシュートを放った。

「ナイスだ、フェイダウェイシュート！」

コハル先輩も大興奮のプレーである。

そこで波に乗りかけていた翔泉高校だったが、次のプレーで一瞬戦意が奪われる。

服部が速攻からの３ｐｔシュート。

それでリズムを崩したのか、翔泉の攻撃では時間オーバーになってしまった。

ここで翔泉がタイムアウトをとった。

「せっかく流れをつかみかけたのに、こんなんじゃ全然ダメだ！タイガを使う。」

このコハル先輩の言葉には他の部員だけでなく、オレ自身も驚いた。

「なんだ、タイガびびってんのか？」

「い、い、いやそんなことないっすよ！」

「めっちゃ動揺してんじゃねぇか。」

「うるせぇカズキ、これは武者震いってやつだよ！」

「なんか違う気もするけど、とにかくコハルの期待に応えてくれよな！」

「うす！キャプテン！」

こうして公式戦デビューとなった。

「遠慮しなくていいからね！ガンガンつっこんでくのよ！」

「うっす！」

交代開始早々パスが回ってきた。マッチアップ相手はオレより２０センチ近くも身長が高い。でもそんなの言い訳にならねぇ。

だってオレはＳＦ（スモールフォワード）としてやってくって決めたんだから。

クロスオーバーステップで相手を左右に振る。
相手が一瞬右方向に体重をかけた！
それを見逃さず左方向から一気に抜きさく。そのままゴールへ一直線。

シュパッ

決まったぁー！！！
公式戦初ゴールだぜ！

その後はすぐに交代させられた。果たしてチームに貢献できるプレーができたかどうかは分からなかった。ただし、あの抜き去った瞬間とゴールが決まった瞬間の感触は忘れることができなかった。
そんなオレの活躍のおかげか（？）チームは７０－６５で勝利した。
そんな浮かれムードの部員とは対照的に
「こんなんじゃダメだ。」
ソーマ先輩が言ったこの言葉の意味を、オレは後で知ることになる。

新しい道が見えた姫

この前の試合の反省会をしていた。

「あの試合、サアヤのことを抜きにしてもかなわなかったのは事実だわ。

このチームの弱点てなにかわかる？」

アカネが迷わず言った。

「そりゃヒメでしょ。」

わかっちゃいるけどそんなはっきり言わんでも…

「そうよ、でもその初心者のヒメが一番可能性が大きいのもまた事実よ。」

「そうなの？」

あたしはレイの意外な言葉に驚く。

「そうですわよ。だって初心者のヒメさんにはまだまだ身に付けてもらいたい技術がたくさんあるんですもの。つまりヒメさんが強くなるってことは、イコールこのチーム全体が強くなるってことと同意なわけです。」

ミスズもそう言ってくれてるみたいだし、ホントになんだろう。

「なのでこれからヒメには新しい技をマスターしてもらおうと思っているの。」

「それって具体的になんなの？」

「シュートよ！」

「え、でもシュートできる人ならサアヤとアカネを筆頭に、他の４人で十分じゃないの？」

「わかってないわね。あなたにシュート力が全くないって相手にバレてないうちはいいわよ。でもそれを見抜かれたら最後、あなたを

マークする価値がないと思われる。そうなるとどうなると思う？」
「えっと、他の人へのマークがきつくなる？」
「その通りよ。今までの試合でも後半になってサアヤにダブルチームをつけられたことは何度もあったわ。あなたがシュートを身に付けることで、それを打ち崩すことができるのよ！」

なんだか自分にもできることがあると知って嬉しくなった。それと、シュートというのは実はずっと憧れていたプレーでもあったのだ。

「それじゃ早速今日からゴール下からのシュート練習やるわよ！」
「はい！」
「１日ノルマ３００本！！！」

えええええ～～

次はいよいよ決勝トーナメントだ。

いいようのない緊張感がひしひしと伝わってくる。

なんたって相手は夏にぎりぎりで勝ったとはいえ、優勝候補筆頭の猛将高校だからだ。

「センパイ達が抜けたからってこれで負けてたらシャレになんねぇぞ。気合い入れていっぞ！」

「うっす！」

しかしその気合いはまったく通じなかったことを知る。

前半だけで５０得点を許し、ハーフタイムに入った。そのときのスタメンは肉体的にも精神的にも相当疲労がたまっているようだった。

「このまま引き下がるわけにはいかねぇからな、タイガも準備しておくように！」

「はい！」

後半途中から交代してコートに入った瞬間、明らかにこれまでの試合なんかとは空気が違うのが感じられた。

そしてベンチから見てある程度分かっていたはずなのに、それでも

相手選手のレベルの高さにのまれてしまった。

結果はダブルスコア、しかも１００点とられての完敗だった。

その日の試合の後はいつもお調子者のソーマさんやカズキも何も言わず、ただコハル先輩の叱咤激励を受けていた。

続く残りの試合も猛将戦でのショックが大きかったのか、惨敗だった。

そして試合後にはさらにショックなことが続いた。

８人しかいない１年のうち、新人戦後３人がやめた。

なんだかんだ言って、な姫

「文化祭楽しみだよね☆」
「そうだな。」
「なんていうかいつもの学級委員の仕事も全然苦じゃないっていうかぁ～」
「そうだな。」
「もう企画考えてるだけでウキウキになれちゃうんだよね♪」
「そうだな。」

「…タイガってチビだよね。」
「そうだな。」

これはアレだ。いつぞやのお返しに、

ピンッ

「イッタ、なにすんだよてめぇ！」
「くらってるのに分からなかった?デコピンよ。そ・れ・に、なにしてんだよはこっちのセリフよ！こっちがなに言っても「そうだな。」の通り一遍等な返事しかしないくせに！」
「だからってデコピンするこたぁねぇだろ！オマエのムダにデカい手だから破壊力ありすぎだっつうの！」
「またそうやって人のコンプレックスに触れるとか、ホントデリカシーないわね。」
「さっきおまえもチビとか言ってたじゃねぇかよ。」
「そこだけはちゃんと聞いてたのね。だったらちゃんと返事しなさいよ。まぁそこだけ反応するってのもどうかと思うけど。

とにかく、文化祭の企画案まとめちゃいましょっ。」
「…ああ。」

「はぁ、今日はなんかもうあんたダメね。」
「ダメってなんだよ！」
「そのままの意味よ。…この前の試合でなんか壁にでもぶつかったの？」
「べ、別におまえに関係ないだろ！このおせっかい女！」

わかりやすっ。でも、これもいつぞやの借りもあるし聞いてやるか。

「そんなこと言わずに話してみたら？　初心者のあたしに具体的なアドバイスなんてできるはずもないけど、聞いてあげることくらいはできるわよ？」

「う～～」

悩んでる悩んでる

「…全然届かなかった。」

「やっぱ身長のこと？」
「自分が小さいことくらいイヤってほどわかってらぁ！　…ただ技術でもあれだけ一方的にやられたのがショックだったっていうか。あんなにも常識離れした動きができる人間がいるんだって、実際コートに立ってみて初めて肌で感じたら、急にコワくなったんだ。」
「いつも強気なあんたでもそんなことがあるのね。」
「決勝トーナメントの相手はドコも今までの相手とは別次元みたいだった。３年生のセンパイ達が優勝してたから、心のどこかでもっ

と簡単なものだと思ってたのかもしれない。」

「…それに仲間があれから3人も辞めちまった。」
「それでタイガ自身も続けようかどうか悩んでる？」
「それはない！オレは何があったってバスケは続けていきたい。いや続ける！」
「じゃあやることは一つじゃない？」
「ああ分かってるよ。練習して、練習して、それでも遠くても練習し抜いてやる！」
「そうそう、その意気その意気♪やっとタイガらしくなってきたじゃない」
「えへへ、そうかな。」
「そうよ、タイガから強気と元気をとったら何ものこらなんだから。」
「たしかにな、今日のとこはそういうことにしといてやるよ。　ありがとなヒメ。」
「きゅ、急になに言い出すのよ！べ、別にあたしはこのままだといつまでたっても学級委員の仕事が終わらないしぃ、あたしだってバスケの練習早くしたいもん。」
「はいはいわかってるよ。それじゃちゃっちゃっと終わらせますか。」
「うん。」

その後は文化祭の話が予想以上に盛りあがりすぎてしまい。7時過ぎまでかかった。タイガはコハル先輩に、あたしもレイにたっぷりしぼられたけど、たまにはこういうのもいいか。

衝撃王子

あの悪夢のような新人戦から一週間後、初めて部活でミーティングが開かれた。ちなみにここに残っている一年はオレとリョウスケ、カズキ、ミノル、そしてアキヒト。

そのメンバーを前にして、唐突にコハル先輩が言い放った。

「カズキくんをC（センター）へコンバートします！」

なんじゃそりゃ！？本人も聞かされてなかったらしく、口をあんぐりさせている。

「幸い身長も伸びて１９０センチ越えしてくれたみたいだし、カズキくんのセンスならこれから鍛えていけば十分に通用します。それになにより、今までのフォワード力を合わせ持ったセンター、つまりCF（センターフォワード）が誕生するのです！」

「だからこの前身長測られたのか」

カズキが今度はつぶやいている。

「１年後には晴れてC（センター）デビューしてもらうから覚悟しておいてよね！」

「え、でもそれじゃ今からじゃ夏の大会に間に合わないじゃないですか。大体Cにはイシちゃん先輩がいるじゃないっすか。」

ここでソーマ先輩が話し出した。

「コハルとおれ達２年の３人で話してたんだ。この大会に挑んでみて、オレらの代じゃ優勝は無理だろうって」

「そんなっ」

「だから次の代、お前たちにバトンを託すからそのための準備だと

思ってくれ。幸い残ってくれたメンバーはこれから中心になって活躍してほしいと思っていたヤツらばっかりだかんな。カズキだけじゃなく他のメンバーもそれを意識しながら練習に臨むように。」

「はい」、という返事を誰もすぐにはできなかった。

その緊迫を破るように、コハル先輩が言った。

「それとタイガくん。このチーム状況だとこれからアナタは今まで以上に重要な役目になってきます。なので今日から『シュート力向上特訓』を開始します！」

「ヒメいい、しっかり見とくのよ。」

シュパッ

「うんきれい。」
「当たり前じゃボケ！アタシがバスケ何年やってると思ってんのよ。はいアンタもやってみる。」
「はい。」

今こうして全体の練習後、レイと2人でシュート練習に励んでいる。

ガスッ

「だぁ～なんにもなってな～い！　まず手がチガウ！　左手は添えるだけ！」
「レイこわいよぉ～。」
「うだうだ文句言わない！」
「は～い。　え～っと左手は添えるだけっと。」

ガスッ

「うん、今のは外したけどフォームは良かったわよ。その調子その調子。」
「やった」
「はいそれくらいで喜ばない！もう一球いくよ。」

ガスッ

う～～うまくいかない～

シュパッ

あれっ、あたしもレイも打ってないはずなのにボールが跳んできたぞ??

後ろを振り向くとアカネの姿が。

「ごめんあまりに下手だから冷やかしに来た☆」

「「冷やかしに来た☆」じゃないわよ、あんたはさっさと帰ってカズキくんといちゃいちゃでもしてなさいよ!」

「だってカズキこの前の試合で負けたの相当悔しいらしくって、全然相手してくんないだもん。」

へこんでたのはあのバカだけじゃなかったんだ。

「じゃなくて、人のジャマしてんじゃないわよ!レイからもなんか言ってやって!」

「ちょうど良かったわ、アカネがお手本見せてちょうだい。ウチじゃアンタが一番シュートフォームきれいだしね。」

「えっ、ちょっと待ってアタシはただ冷やかしに来ただけであって…」

「やってくれるわ・よ・ね?」

「…はい。」

そう、この部ではキャプテン命令は絶対なのだ。レイが言い出した

わけではないがいつの間にかそれが当たり前になっている。

「目線はそらさない！」
「ボールの握り方がチガウ！」

『監督』が2人になった結果、ツッコミ（指導）も2倍になるのであった。

籠入れ王子

ダムダムダムダム

キュッ

シュパッ

コハル先輩から言われたシュート練習というのはドリブルでつっこんでそこからのジャンプシュート。いわゆるストップ&ジャンプの習得だった。

身長の低いオレが、わずかなチャンスの時間にシュートを決めるためには必須の技だ。でもなかなかうまくいかないんだよな。今のはたまたま入ったけど、まだほとんど外れることの方が多いし。って一人ぐちってもしょうがないってわかってるんだけどなぁ。

ダムダムダムダムダム

そんな考え事をしながら気づくと、延々とドリブルを続けてしまっていた。

「さっきからダムダムうるさいわね」

隣で練習していたのは女バスの巨神兵、ヒメ。

「はぁ？バスケはドリブルしてナンボだろ。それよりおまえのその地味なゴール下シュートの練習の方が見てて恥ずかしくなるぜ。」

「くぁ～むかつく！人が初心者なの知ってて平気でそういうこと言う？」
「おまえが先にケンカ売ってきたんだろ。…それとシュートするときもっと膝曲げたほうがいいぞ。」
「えっ？」
「さっきから見てると手だけで打ってんだよ。だからフォームが安定しないし全然入んないんだよ。」
「わ、わかってるわよそんなこと。今から直そうと思ってたとこ。」
「ぷぷっ。なんだよそのママに怒られたときの小学生みたいな答え。」
「うるっさいわね。教えるなら優しく教えなさいよ！」
「悪いけどオレも自分の練習で忙しいの。それにアドバイスできるのはそれくらいだよ。見たところ他の細かいところはチームメイトにアドバイスちゃんともらってるみたいだしな。あとは打って打って打ちまくって、その感覚を身に付けるしかないんだよ。」
「そ、そうなの？わかった、やってみる。」

最後のセリフはヒメに言っているようでいて、自分自身にも言い聞かせているみたいだった。

ダムダムダムダム

キュッ

ガスッ

あっ外した。

精進精進。

「はいそれじゃ文化祭の企画になにか提案ある人？」

この前タイガと話しても結局アイディアはちっとも湧いてこなかった。

こうなったらクラスのみんなに頼るっきゃない！そんなわけでクラスの前に立ってこうして仕切っているわけである。

すると誰かが言い出した。

「ていうかそれ、学級委員が原案出してくるって話じゃなかたっけ？」

「それはその…」

あたしがはっきり言えずにいると、タイガが助け舟（？）を出してきてくれた。

「い、イロイロあったんだよっ！」

「そ、そうよ学級委員だって他の仕事で忙しいの！」

「あらあら怪しげですなぁ～『プリプリコンビぃ』？」

ゲンキくんうぜぇ～～

「ホントホント、お2人でナニをしていらっしゃったのかしらぁ？」

くっそぉレイめ、この前部活遅刻した腹いせか？訳知り顔な雰囲気出して、もうっ！

「バカ言ってんじゃねぇよ！なんでこんなのと2人でいて楽しいワケないだろ！」

「な、なによそれ！まるであたしがつまんない女みたいじゃない！」

「だからそういうややこしいこと言うから誤解が広まるんだよ、考

えろよっ」
「それとこれとは別問題よ！　さっきの訂正しなさいよ！」
「だぁ～～めんどくせぇ、これだから女はぁ」

「アッ、ひらめいたっ！」

「急になによレイ？」

「2人で漫才しなよ！」

「はぁ？」「え？」

「いいじゃん！いいじゃん！もちろんコンビ名は『プリプリコンビ』で」
「ゲンキ！当たり前みたいにその名前使ってるけどオレァぜんっぜん認めてねぇからな！」
「そ、そうよ、あたしだって願い下げだわ。」

「おもしろそ～」「アタシも見てみたい。」「その調子でやれぇ、プリプリコンビ！」

あたし達当人の気持ちとは裏腹に、次第に盛り上がっていくクラス。

「そんなこと言われてもなにしゃべったらいいかとか分かんないよ。」
「そんなのいつもの感じでいいからさ、大まかな原稿はわたくしレイとゲンキくんこと『召使いコンビ』にまっかせなさい！」

「いいねレイレイ、それいただきっ。　そうですぞ姫君、われわれ『召使いコンビ』にすべてお任せあれっ」

「よし、決まりだな。」

そして最後にドヤ顔でシメようとする担任。

「「うっそーーん！！」」

漫才王子

この前のホームルームであれよあれよという間に決まった『プリプリコンビ』の漫才。しょーじき納得いかないことだらけだけれども、もう決まったんだからやるしかないっしょ。

でもその前にぼやくだけぼやかせてくれ。

『漫才』の雰囲気作りとか言って、教室の中はまるでおとぎの国の中のお城風アレンジ。加えてクラス中メイドやら執事の衣装揃えてるけど、オマエラ絶対ソレ着たかっただけだろ！まぁこんなことは文化祭じゃよくある話しらしいが。

ちなみにレイちゃんはメイド長という設定らしく、一人だけフリフリつきのカチューシャをつけている。いや正直似合っててかわいいけども！

…ゲンキはまぁあれだ、アイツの服もこだわりあるらしいが勝手にやっててくれって感じ。

それにしてもなんだよオレのこの衣装。

いかにも『王子様』って感じの、今にもベルサイユ宮殿のパーティーにでも行けそうなくらいの本格感！たしかに衣装係のみんなの努力は嬉しいけれども！ただ着てるコッチはメチャメチャはずかしいんですけど！

そして『お姫様』とのご対面。

え、え～っと、馬子にも衣装とはこのことだな。

「な、なによ。人のことじろじろ見てイヤラシイ。」

「ば、ばか！一瞬誰か分かんなくなるくらい、あんまりにも豪華な衣装の方に驚いてたんだよ！」

「うわ、サイテー。こういうときは真っ先に「とってもかわいいね」とか「キミに似合っててキレイだよ」とかの一言でもいってみなさいよ。」

「そんな気持ちわりぃこと言えるかよ！」

「あらごめんあそばせ。あなたのような卑しい心の持ち主には似合わぬ言葉でしたわね。オーホッホッホッ。」

コイツすっかり『女王様』気分になってやがる。

「はいはいそういうやり取りは本番までとっておいてねぇ～」

そう、もうすぐ公演の第一回目を迎える。

ヒメと2人舞台そでに行きスタンバイをする。

（召使いコンビ特製の）台本は擦り切れるほど読んだ。

これまでの練習のおかげで、コイツとの息もむかつくくらいにピッタリだ。

あとは落ち着くだけ。

えっと「人」という字を口に書いて手でつまむ。

あれっなんか違う気がする。

「くすっ。」

「ちょ、お前なに笑ってんだよ」

「あんたが謎のおまじないをしてるからでしょ。フツー「人」の字を手のひらに書いて飲み込むでしょ。」

「うるせぇ、ほっとけ！」

「でも安心した。」

「何がだよ？」

「あんたでも緊張するってこと。」

「わ、わりぃかよ。」

「べっつにぃ。」

「バスケの試合に比べたらこんなんへでもないね！」

「もうだいじょぶみたいね。じゃ、いくわよ」

「おう！」

ブーーー

〈それでは只今より、とある国の『お姫様（プリンセス）』と『王子様（プリンス）』、通称『プリプリコンビ』による漫才を始めたいと思います。〉

メイド長と食べ歩き姫

あたし達の高校の文化祭、翔泉祭は2日間行われる。

1日目は2時間ごとに『漫才披露』があったのでとても他を回る余裕もなく、休憩時間もひたすらタイガと一緒にレイとゲンキくんのダメだしをくらって終わった。

でも2日目は午前中に一回公演しただけで、あとは自由時間になっていたのでレイとゆっくりお店めぐりをすることにした。

「おなかすいたね、ドコ行こっか。」

「サアヤんとことかどう?たこ焼き屋やってるみたいよ。」

「よし、んじゃソコできまりぃ!」

行ってみると大行列だった。しかしあっという間にその行列も減っていき、あたし達の番が回ってきそうだ。

「あれ、サアヤ受付じゃないんだね。キレイだから絶対そうだと思ったのに。」

「あのミス無愛想にそれはムリっしょ?」

「ふふっ、それもそうかぁ。どこにいるんだろうね。見当たらないなぁ。」

「あ。サアヤだ。」

サアヤはお客さんに見えるところで一生懸命たこ焼きを焼いている。

クルッ　クルッ　クルッ　クルッ

それにしても手際のいい手さばきだ。生地をサァーっとまき、そこにタコ、天かすを放り込む。そして得意（？）のひっくり返し。一連の流れが美しくさえある。

「あれ、他にも見たことある顔がいるぞ」
「え、だれだれ？」

隣で同じようにたこ焼きをつっついているのはリョウスケくんだ。

クルッ　クルッ　クルッ　クルッ

リョウスケくんもサアヤと同じくらい器用に回している。手首の柔かさはさすが名シューターだ。

「ちょっとサアヤちゃん、リョウスケくん作りすぎだよぉ。パックに包むこっちの身にもなってよね。」
そのあまりの生産量に受け渡しの係りの子が悲鳴を上げている。

だがしかしどちらも返事がなく、黙々とたこ焼きを量産している。

意外とリョウスケくんも負けず嫌い？

あたし達もその消費に貢献すべくたこ焼きを購入し、話しかけることなくお店を後にした。

「なんか暑くなってきたね。」
「じゃあなんか涼しいものでもかっこみますか！」
「いらっしゃいっらっしゃい！」
ちょうどタイミングよく、なにやら威勢のいい声が聞こえてきた。
「お、ヒメちゃんとレイちゃんじゃないか。どうよ一杯かき氷でも。」
「お、わかってるぅ。今ちょうど食べたいと思ってたところなんだ。」
「だろぉ、うちのアキヒトすげぇんだぜ、今日は絶対アツくなるからかき氷がガンガンに売れるって予想したらこの通りズバリよ！」
「ちなみに配役考えたのも彼だったりする？」
「え、そうだけど？」
天才的だな。
「いらっしゃいませぇ。」
受け付けにはまたまた見知った顔。
「あ、ミスズだ。」
いつも見ている顔のハズなのにこの暑さの中なんだか妙に癒されるわぁ。男子だったら余計にそうだろうな。だってみんなかき氷なのにムリして1人で2つも3つも買ってるんだもの。ぜったい後でおなか壊すよ？
ウチのレイといい、PGってのはホントに頭のいいというか人を活

かすのがうまいよな。

「よし、最後のシメはあれよね。」
「そうあれあれ！漫才中もこれをずっと楽しみにしてたんだから♪」

なにってそりゃ、クレープですよ、クレープ。

え、食べ過ぎ？
いやいや女子にとってスイーツは別腹なのだ。

カズキくんが生地を器用に広げて、それを受け取ったアカネがトッピングをする。抜群のコンビネーションである。

素早く出来上がったクレープはアッツアツだった。
イロイロごちそうさまでした。

受賞王子

翔泉祭は実は3日目がある。それは後夜祭ともいうが、有志の生徒だけが体育館に集まり、前日までの疲れを吹き飛ばすかのように文字通り『お祭り騒ぎ』をするのである。

お菓子やジュースが置かれ、自由に飲み食いできてちょっとした立食パーティー状態。まぁそんなお上品な雰囲気では決してないが、とにかく盛り上がっていて楽しい。

〈皆さんご静粛に願います。〉

急にアナウンスが入った。

〈それではただいまより、クラス別企画の優秀賞を発表したいと思います。〉

〈それでは早速第3位。２－７『アッキーナの焼きとりーな』！〉

あ、ソーマさんのクラスだ。あそこの担任のアッキーナ先生かわいいもんな。あっこれは関係ないか。でもたしかにあの焼き鳥はおいしかったもんな。

〈続いて第2位は３－８『笹崎さんちの笹団子、佐々木先生ささっどうぞ』〉

なんだか「さ」がやたら多い名前だな。でも2位とってるんだから味は本物なんだろうな。

〈そして栄えある第1位は〉

会場がいったん静まり返る。

〈1－5『波乗りかき氷』です！〉

すげぇ、2，3年生を抑えての堂々の1位だった。

〈最後に特別賞の発表にまいります。〉

あれ、まだ賞が残ってたのか。でも正直そろそろ飽きてきたな。

〈1－2『プリプリコンビの優雅なお漫才』です！〉

え、まじで？

「やったじゃんオージ、特別賞だってぇ！やっぱりプリプリコンビは最強だな！！」

ゲンキは自分もかなり裏方としてがんばってくれたのにもかかわらず、オレとヒメだけの力でとったみたいな喜び方をしている。正直照れくさい反面、やっぱり嬉しくもあった。

放課後の部活で、1位をとったミノルやアキヒトよりもオレの方が騒がれてたときは、初めてプリプリコンビやっててよかったなって思った瞬間だった。いや別に喜んで組んでるつもりはまったくないけどね。

あっ、でもこれでそろそろプリプリコンビも解散したいな。

翔泉祭が終わってすぐの放課後、部活前の更衣室はまだまだ翔泉祭のことで盛り上がっていた。
そんな中、

「重要なお知らせがありますの。」

ミスズから珍しく、そう告げられた。
みんなこれには話を止めて注目である。

「わたくし殿方ができました。」

殿方？　殿→オトコ→彼氏

「ええ～～～」
これは詳しく事情聴取せねば！

「相手は誰なの？」
「もちろんバスケ部の方ですわ。」
「うちの男バスの誰か？」
「いえ、他校の方です。」
「どうやって知り合ったの？」
「新人戦の時にお見かけしていてプレーしているお姿がステキな方だなと思ってたら、今日の翔泉祭に来ていらしたの。そして昨日、お付き合いしてほしいと言われましたの。」

ひゅ～。両思いだってわけかい。
「はい、驚くのはそこまで！今日は男子と試合するよ！」

そんな殺生な！　まだまだ聞きたいことがあるっていうのに。

「え、それって2年生も入ってるの？」
「そうよ、あっちもオールメンバーで参加してもらうわ。」
「それだとかなりキツくない？」
「正直それは否めないのよね。そのため今日は混合（ミックス）チームでやることになってるから！」

（本日2度目の）「ええ～～」

チーム分けはAチームが男バス2年のソーマさん、ジョーさん、イシちゃんの3人とアカネとサアヤだ。そして残りがBチーム。

Bチームのリーダーは自然とレイということになっていた。
「いい、相手のインサイドはかなり強力よ。幸いこっちは人数も多いし体力気にせずガンガンぶつかっていきなさいよね。」
「はい！」「うっす！」
こっちのスタメンはレイ、リョウスケくん、カズキくん、ミスズにあたしだった。

正直言ってこの組み合わせはかなりきつかった。特にアタシのところ。センター対決を言い渡されたのはいいけど、相手は男子の中でも超重量級のイシちゃん。

まずはBチームからの攻撃。
レイからパスを受け取ったリョウスケくんが3ptを放つも惜しくも外れる。

よし、ここはリバウンド。あたしの出番だ！

しかしイシちゃんはびくともしない。だって９０キロだよ?９０キロ!あたしといくつ違うと思って!
まぁ、あたしの体重がバレるから具体的な数字は言わないけれども。
当然のようにイシちゃんにリバウンドを取られ、攻守交代(ターンオーバー)。

ソーマさんのフリーの選手を見つけて出すパスは脅威だ。
あっという間にサアヤにボールが渡り、シュート態勢に入った。

今度はサアヤのシュートがリングに嫌われ落ちてくる。

もしかしてまたぁ?

よし、今度は負けないと踏ん張ってみたものの、焼け石に水だ。
イシちゃんにスクリーンアウトをかけられてビクともしない。

すると横からさっとジャンプしボールをかすめとった人物がいた。

カズキくんだった。そういえばカズキくんてＳＦのはずだけど身長も１９０くらいあるし、リバウンドもこなせるんだな。プレーの幅が多くてすごいな。誰かさんに爪の垢でも飲ませてやりたいな。

「ヒメちゃんやるねぇ、ぼく今の自由に動けなかったよぉ。」
「あ、ありがとうございます。」
やったイシちゃんにほめられちゃった。

「ヒメ、今度当たり負けたらはったおすわよ!」

レイさん、それはムチャってもんですぜ。

けっきょく、レイが試合中ずっと走り回って相手をかき乱してくれたことと、カズキくんのインサイドでのフォローもあり、スコアは１４－２０となんとかくらいついていた。

またスタメン落ちかよ、つくづく縁がないな。

ちなみにコハル先輩はBチームの監督として指揮や交代の指示を出しているが、女子も混ざっているためか、髪は縛らず『通常バージョン』のようだ。

ようやく前半カズキと交代で出番が回ってきた。

レイちゃんからボールが回ってくるとすかさずドリブルで切り込む。

サアヤちゃんを抜いた。よっしゃ！

しかしヘルプですぐにイシちゃんが前に現れた。

そのときだった。

フリーでつったてるヤツがいる。

そこにパスを出す。

シュパッ

「ナイス、ヒメ！特訓の成果出てんじゃん！」

「てへっ」

「お、これがウワサのプリプリコンビですか、バスケのコンビネーションも絶好調でありますな。」

「うるせぇミノル！」
ただ今回に関しては悪い気はしなかった。

ここで大幅にメンバーチェンジし、アキヒト、リョウスケ、オレ、ミノル、カズキの、純粋な男バス1年メンバーになった。

これからの翔泉男バス部を担っていく上で、これが重要なマッチアップであることは十分にわかっていた。

ソーマさんからのボールだ。オレは未だに、この人のパスを出す方向が全く読めない。これで県のベスト3にはかなわないというのだから、相手高校のレベルの底が知れない。

ソーマさんがちらりとサアヤちゃんの方を向いた。すかさずオレはしっかりマークにつく。

しかしボールがやってこない。

やられた、アカネちゃんの手にボールがある。気づくとすぐにシュート態勢に入った。
しかしリョウスケが反応していたようだ。ボールに指先だけがかろうじて当たる。

ガスッ

「リバウンド！」

ゴール下で8本の手がひしめき合う。

そこから抜け出したのは、なんとミノルだった。

「よーし、こっから一本とっていこうか。」

「バカ、ミノルそれはフツーPGのアキヒトのセリフだろ?」

「いいよ、ミノルの方が気合いが入るからな。でもボールは返してくれ。」

アキヒトはコート全体を目線だけで素早く状況把握する。

そして見つけた。パスを通すための穴。

アキヒトのパスコースはカンペキだった。カズキもそれをしっかり受け取ってシュートを打とうとする。

しかしイシちゃんの壁は崩せず、力負けして仰向けに転ぶ羽目になったのであった。

リョウスケやオレも積極的にシュートを狙っていくのだったが、その度にジョー先輩のシュートブロックで防がれてしまった。

その後は一方的な試合展開が続き、終わってみれば５０－７２という大差で負けた。

聖なる夜の予定を勝手に決められてる姫

今年もあの季節がやってくる。

街中にイルミネーションが咲き乱れ、カップルが増殖しだす。そしてもう、あたしのところにはサンタはやってこない、ただ苦痛なだけのイベント。

そうクリスマス。

この前のミスズに彼氏発覚で、いよいよ部活内の一人身はあたしとレイだけになってしまった。

かと言って今さら誰か一緒に過ごしてくれる男の子が都合よく見つかるはずもなく。

だいたい高校生にもなって家族で仲良くクリスマスパーティーってのも、なんだか気恥ずかしいし。

そうなると頼れるのは一人。

「レイ～、あんたクリスマスどうするの～？」

「実はもう予定入ってるんだよねぇ～」

え、ちょっと待ってレイまで？　あたしはどうすりゃいいの～？

「そ、そ、それって相手誰なのよ？」

「もう何度もゲンキくんに誘われちゃっててさ、一緒にクリスマス会することにしたんだ。」

「ちょっと、『部活外恋愛禁止』じゃなかったの？」

「なによ、大げさな。ただの『クリスマス会』だって言ってんでしょ。それにタイガくんとヒメの参加もすでに決定事項だからね。４人で楽しく過ごしましょ♪」

やった！と、内心ガッツポーズをとるのとは裏腹にここは悟られないようにしないとな。何となくその方がいいと、あたしのカンがそう言っている。

「うんそれは別にかまわないけど…」

「でもま、アンタとタイガくんが『イイ感じ』になる分にはいっこうにかまわないけどね～」

「それはずぅえっったいにありえなーーい！」

「あっ、プレゼント交換あるからちゃんと用意しといてよね。」

「え、それは一緒に買いに行ってくれないの？」

「それじゃ楽しみが半減しちゃうでしょ？」

「まぁそっかぁ」

「あと、包み紙の大きさが『手のひらサイズ』が条件らしいわよ？」

「うんわかった、がんばってみる！」

こうして今年は別の意味で悩めるクリスマスになりそうだ。

おそろい王子

いつの間にやら『召使いコンビ』の間で決まっていた４人での『クリスマス会』。

やばい、待ち合わせ時間の３０分以上も前に来てしまった。
これではめちゃくちゃ張り切ってるみたいデハナイカ。

集まってきたのは私服で着飾った女子２人（プラス野郎が１人）。
レイちゃんはサンタのコスプレだ。ヤバいかわいすぎる！
ヒメはさすがにコスプレではないが、でも普段の制服や部活姿とは違う雰囲気で調子狂うな。

いつも話しているようなメンバーなのに、いつもとはなんだか違う気持ち。あれっこれってもしかして合コンとかいうやつ？って見当違いな勘違いをしてしまうほど、意識すればするほどなんだか緊張してくる。

パーティーはレイちゃんの家で開かれた。レイちゃんのお母さんお手製のチキンはめちゃめちゃ上手かった。
もちろん手作りのロールケーキも用意してくれていた。わざわざサンタの砂糖漬けまでのっけてくれてる。これで会費はタダっていうのは申し訳ないな。

その後にはゲンキのアホ企画が待っていた。と言ってもトランプの大富豪で大貧民になったらモノマネ披露というありきたりなものだったが、これがけっこうおもしろかった。

「じゃあ最後にプレゼント交換しようぜぃ！！」
酒も飲んでないのにゲンキのテンションはいつにも増して高い。
「全員目をつぶって、プレゼントを手渡しで交換し合ってください☆」
なんだか今日一番のドキドキだ。
「ストップ！さぁ中身を開いて☆」
中身を見た瞬間、オレは思わずつぶやいてしまった。
「かっけぇ。」
オレンジ色のリストバンドだった。
おんなじようにすぐさま「かわいい」という声を上げた人がいた。
ヒメだった。手にはピンク色のリストバンドが握られている。
あ、オレが選んだヤツだ。
「おお！オージとヒメちゃんの、おそろいじゃん！レイちゃんどっちかあげた？」
「いやぁ、アタシもさすがにクリスマスプレゼントでもバスケのことは考えてなかったなぁ」
「ということは『両想い』ってことですなぁ」
ゲンキのにやにやがいつにも増してうぜぇ～
「うるせぇ、オシャレでも全然イケルと思って買ったんだよ。わり

いかよ。」
「そ、そうよこんなのただの偶然だわ。」
しかしゲンキとレイちゃんのにやにやは止まらない。
「オレはちょうど新しいリストバンド欲しいって思ってたんだよね。ありがとさん。」
「こっちこそ、なんかこういうのわざわざ自分で買うほどでもないとか思ってたしぃ、ホント助かったわ、ゲンキくん、レイ、クリスマス会開いてくれてありがとね。」
「まぁそういうことにしておきますか。」
「そうですね、『メイド長』。それにしてもオレンジオージの『オジオジ』と、ピンクだから『ピーチヒメ』か。なかなかいい感じジャン♪」
こうして聖なる夜に愛ではなく、また2つ、余計なあだ名が生まれたのであった。

リバウンド地獄の姫

クリスマスの浮かれムードも２４日でキレイに終わり、翌日からはまたバスケ漬けの日々が始まろうとしていた。

「やっぱヒメのリバウンドはダメね。」

その一言が、この冬合宿のレイからの第一声だった。

全体練習が終わった後はひたすらリバウンドの練習だった。

なんとあのイシちゃんからもいろいろ教わった。マッチアップした時はただ力任せのパワープレーヤーだと思ってたけど、実際教えてもらったらスクリーンアウトのときの体の入れ方や、ジャンプのタイミングなど、多くのことを学ばせてもらった。

しかしゴール下ってのはハードだ。男女のＰＦとＣ組がそろって、ゴール下シュートからの流れでリバウンドの練習をするのだが、なにせ当たりがめちゃめちゃ激しい。あたしはミスズとペアになって、イシちゃん、ジョーさん、カズキくん、ミノルくんと張り合うことになるのだが、それでも吹っ飛ばされることなんてざらだ。

生傷の絶えない日々が続いた。

正直くじけそうになったこともあった。

しかしカズキくんはあたしの何倍も激しくしごかれていた。あんなにフォワードとしては活躍しているのにそれでも足りないものはあるみたいだ。それだけ、ポジションが変わるということは大変なん

だと思った。

ミスズだってあたしより一回り小さいし、男子相手だとそれ以上に体格差があるのに全然気持ちで負けていない。

「わたくしこう見えて負けず嫌いですの。」

その言葉のとおり、練習では一歩もひかず何度もぶつかっていた。

なによりジョーさんに言われた言葉があたしの中では響いていた。

「いくら名シューターでも半分ははずす。それを最後にリングに押しこめるか、逆に阻止できるか、それを握っているのがリバウンダーだ。つまりオレ達のせめぎ合いがそのまま勝敗を握っているともいえる。」

その言葉の意味、重みはあたしでも分かった。

「リバウンドを制する者はゲームを制する。」　まさにその通りなのだと。

決して口数の多くないジョーさんとイシちゃんだったが、そのプレーから気構えとか役割の重要性を学ばせてもらった。

もちろんシュート練習もかかさずやった。なにせ合宿中なので時間は腐るほどある。

「シュート練習なんてたいして疲れないでしょ。」

というキャプテンの鬼命令により、延々とシュート回数を重ねるのであった。

3対3王子

年末の1週間は合宿でみっちりしごかれる毎日だった。

ようやく大晦日と元日は『帰省』が許され、こたつの中でまったりのんびり紅白やらお笑い番組やらを見て過ごした。

そして1月2日。

再び学校に集合をかけられる男女バスケ部の面々。

年が明けてもしごきが休まることはなく、むしろよりいっそう激しくなっている気さえした。

この冬合宿では個人練習だけではなく、積極的に3ｏｎ3が展開されることになった。

まずＰＧであるソーマさん、アキヒト、レイちゃんのいずれかがチームに入り、ＳＧ、ＳＦが2人ずつ入る。

これをいろんな組み合わせで１０分間でメンバー交代、それを３０分2セットで行うのだった。

正直言って人数が少ない分、ボールが回ってくる回数が多いので体力の消費量がハンパない。

この極限の疲労感の中でいかに自分の持ち味を発揮できるかが試されるのだった。

ここで個人練習でかなりサマになってきた、ストップ&ジャンプシュートを披露したいところだ。がしかし、当然マークがあるのでそう簡単には打たせてくれない。

「タイガ、特訓の成果さっさと見せてみろ！」
「あい！」
鬼バージョンのコハル先輩はもう女子相手でも容赦なかった。
「アカネ、こんぐらいでへばってシュート外すようならＳＧやめちまえ！」
「いえ、決めます！」

「アキヒト、パスばっか出してないで自分からドリブルで切り込んでかないと他のヤツがマーク崩せないだろうが！」
「はい、がんばります！」

この特訓にはもう一つの意味合いがあるそうだ。それは『対応力』。どのポジションの選手もともに、どんな選手と組んでも呼吸を合わせられるような視野の広さと臨機応変の能力を身に付けるという狙いがあるらしいのだ。

こうしてバスケに明け暮れている間に、あっという間に新学期を迎えることとなった。

2月13日に悩む姫

女子にとって悩ましい時期がやってきた。

「もう～、どうしよ～どうしよ～」
「なにようるさいわね～どうしたっていうのよ？」
「だってレイ、明日はバレンタインだよ？」
「うん知ってるよ。それがどうかした？」
「誰にあげればいいのよ～～」
「誰ってヒメには『王子様（タイガくん）』がいるじゃない」
「はぁ？それは１００パーありえない！ずぇったいそれだけはイヤ！」
「じゃあイベントスルーしちゃえばいいじゃん。」
「それは女の子としてどうかなって思うのよね。」
「そういうとこホント乙女だよね～」

「ねぇ、レイはどうするの？やっぱりゲンキくんにあげるの？」
「まさか。アタシはちゃんと『お世話になった人』にあげるつもりだよ。」
「え、だれよだれよ。」
「そんなの決まってるじゃない。」
「もう、もったいぶらないで教えてよ～。」

「男バスのみんなよ。」

「え、なんで？」
「考えてもみなさいよ。５人しかいないウチらがゲーム形式の練習とかできてるのって男子のおかげなんだからね。これはチョコの１つや２つはあげるわよ。」

「そっか、そうよね。ねぇ、それあたしも一緒に手伝っていい？」
「もちろんいいわよ。あ、でもタイガくんの分だけハート型にするんだったら、それはみんなと別のとこで渡してよね。」
「そんなもん作るか――――！！！」

苦甘王子

練習が終わった後、コハル先輩がみんなを集めた。手に持っているのは大きな包み。それはもしや？

「今日はバレンタインということでみんなに手作りで作ってきました☆去年はちょっと形だけ失敗しちゃったんですけど、今年は見た目も味もバッチリです。」

チョコレートだぁ。バレンタイン万歳！！！

たしかにかわいくラッピングされた中にはハート型のチョコがいくつも入っていておいしそうだ。

でもなぜか、ソーマさんとジョーさんはもらったチョコをこっそりイシちゃんに渡している。もしかして二人とも甘いもの苦手なのか？

その行動の意味はチョコを口にした瞬間知ることになる。

一瞬、これまでの辛い練習とか、大敗を喫したあの決勝トーナメントの思い出がよみがえってきた。そして口からナニカがでそうになるのを必死でこらえた。

「おいしいですか？」

「うん、今年もまいう～」

イシちゃん先輩ツワモノ過ぎです…

オレも含めた1年連中はなんとか1個だけは胃に流し込んで、あと

はバックにしまいこんだ。

「あの、もし良かったらなんですけど。」
あれ、レイちゃんとヒメじゃないか。どうしたんだろ。
「アタシ達もいちおうチョコレート作ってきたんですけど食べてもらえますか?コハル先輩の後でホント余計かもしれないですけど。」

今の惨劇をはた目からではわからないので、本気でそう言っているようだ。
「そんなことないよ、喜んで食べさせてもらうよ!」
すかさずソーマさんがそう答える。ズリィ、さてはコハル先輩の『アレ』を知っていたな!?

もちろんオレ達もいただきましたよ。たぶん普段だったらそこそこウマイなってレベルのおいしさだったんだけど、今のオレには高級フランス料理店のデザートでも食べてるような幸せなひとときを過ごした。

この時ほど女バスっていいなって思ったことはなかった。

今年の春はどこに行こうか姫

季節はもう春はなりかけていたことのこと。

「遠征に行くわよ！」

突然、レイから告げられた。

「ちょっとあたし達には早すぎるんじゃない？」

「ヒメ、そんな弱気なことじゃ。次入ってくるコーハイにスタメン取られちゃうぞ？」

うっ、あたしが気にしているところを的確についてくるっ。

「おもしろそうですわね。楽しみです。」

ミスズ、あんたはなんでそんなにポジティブシンキングなのよ。

「アタシは大賛成だよ。思いっきり暴れまわってやろうじゃないの！」

アカネは超強気だ。バレンタインでカズキくんといいことでもあったのだろう。

「強い相手とやれるならどこでもいい。」

サアヤさん、いつも通りなストイックな意見ありがとうございます。

「よし全員一致で決定ね。来週新潟に行くからよろしく！」

いや、『全員』ではないですけど！でもこれも強くなるため。あたしだって負けない！

「今日はよろしくお願いします！」

「いえ、こちらこそドンと胸を借りるつもりでかかってきてくださいね！」

「さっきの自信過剰なのはＰＧの千夏よ。発言に負けず劣らずの名プレーヤーだから要注意ね。」

あたし達は軽くウォーミングアップをした後、作戦会議に入った。

「ちなみに今日のスタメンは日程の関係で、相手も全員が一年生よ。それでも手強い相手だっていうのは覚悟しておいてね！

まずあそこで淡々とシュート練習をこなしているのがＳＧの秋穂よ。正確なシュートは練習を見てるだけでも伝わってくるわね。

次にＳＦの時雨よ。気弱な性格しているのとは対照的に、ガンガンドリブルで切り込んでくるから要注意ね。

ＰＦ春海はかわいい顔してスクリーンアウトの鬼だからミスズはポジション取り負けないように気を付けてね。

そしてＣの冬美。彼女はリバウンド、シュートブロックともに一流よ。ヒメ、かなり厳しいと思うけど気持ちで負けちゃだめよ。」

「わ、わかった。でもそれにしてもなんで他県の選手の情報そんなに詳しいの？」

「千夏とは中学時代の親友でね、彼女の引っ越しが決まった時にバスケでの再戦を誓い合った仲なの。相手は強豪だけど今回たまたまスケジュールの関係で空いたから、こうして試合をさせてもらえるようになったわけ。とにかく、今日の試合はなんとしてでも勝つわよ！」

「はい！」

序盤からレイと千夏ちゃんとのデッドヒートが繰り広げられた。い

つもはアシストに徹するレイが今回は、１ｏｍ１の勝負を挑んだり、積極的にゴールを狙いだしたのだ。

その結果は序盤こそほぼ互角に見えたが、後半ベンチ要因のいないウチは勢いが失速し、一方的な試合展開になりつつあった。

あたしはというと冬美ちゃんに完敗した。身長ではあたしの方が高かったのに、オフェンス、ディフェンスともに完全に封じられてしまった。

「「来年の春もどこに行こうか」っていうのはこれで決定ね。」

そうレイが言っている時は、いつも以上に悔しそうな顔をしていた。

お悩み王子

「タイガ、練習終わったらちょっと付き合えよ。」
そう言ってきたのはミノルだった。

「ああ。いいけどなに？」
「それはヒ・ミ・ツ」

うぜぇ、こういうのはスパッと言ってくれた方がどれだけ楽なことか…

そんで練習後、
「明日は何の日か知ってる？」
「さぁ？」
「３日１４日だぜ？」
「それが何か？」
「オマエもとことん、にぶちんだなぁ。この前のバレンタインでのお返しに決まってんじゃんか。」
「ああ、そう言えばそんなこともあったかも！」
「よく言うよ。チョコもらって一番テンションあがってたのお前だろ？」
「…そうだったかも。」
「とういうわけでオレたち３人でプレゼント買にいくというキャプテン命令が出たのである！」
「え、３人てもう一人は？」

「あの～オレ、ずっと前から隣にいたんだけど…」

「アキヒトほんとゴメン！ミノルの暑苦しいテンションで全然気づかなった。」
「こらタイガ、アキヒトの影が薄いなんて言っちゃダメだろうが！」
「んなこと一言も言ってねぇよ！」
「タイガくんヒドイです。」

えっ、悪いのオレ？そしてなぜに敬語？
「ほんとタイガってデリカシーとかねぇよな～。」
「ミノル、オマエに言われたかねぇよ！」
「そんなにボクって影が薄いですか？」
「そ、そんなことないって！アキヒトからはオーラがビンビン出てるよ！」
この子普段はしっかり者なのに意外とさびしがり屋なのか？
「タイガくんてもっと気配りの出来る、いい人だと思ったんですけどねぇ。」
ああ、なんかスネテらっしゃる。
「だからオレはだなぁ～」
「いいんだ、どうせタイガくんには今のボクの姿も見えていないんですよ。」
もうだめだ、ナニ言っても通用しないみたいだから心の中でぼやいてみる。

「まぁいいです。とりあえずお店行きましょう。」
スネると敬語になるのか、アキヒトってば影がうす…キャラが薄いと思ってたら意外な一面を発見だ。

さぁ気を取り直してお返し選びだ。

「へぇ～どのお菓子もおいしそうだなぁ～。」
「おいミノル、オマエが食べたいもの探すコーナーじゃないんだぞ？」
「わ、わかってるよ、ただ感想を素直に述べただけであってだなぁ…」
「あ、これとかいいんじゃない？」

そう言ってアキヒトが手に取ったのは、クッキーの形もラッピングも女の子向けなかわいいデザインのものだった。

「よし、それでけってーぃ！」
「え、ちょっと簡単に決まりすぎじゃない！？」
「アキヒト、心配するな、オマエのバスケセンスの良さは部内の誰よりも認めてるよ！」
「そうかなぁ。でもこれとバスケとは関係ないんじゃ…　でもわかった！それならこれにしよう。」

こうして『お買いもの』はほぼアキヒト一人の力によって決められたのであった。

3月14日にドギマギする姫

この前の遠征試合でボッコボコにやられて正直落ち込んでいた。

ああ～どうしよう、あたしゃやっぱダメダメだぁ、あんなに実力差みせつけられたら心折れるっつうの！

なんかイイことないかなぁ～

そんなある日の朝のできごと。

「はいコレ。」

そう無造作に渡されたのはかわいくラッピングされた包み。

渡してきたのはオウジタイガ。

「なによコレ？」

「この前のお返しだよ。」

「ああ、そういえば。」

「か、勘違いすんなよ？　これは男バス全員分のお礼なんだからな。そのお菓子選んだのもオレじゃねぇし。ちゃんとレイちゃんにも後で渡すんだからな。ただソーマさんがキャプテン命令で「オマエが同じクラスなんだから渡せ」っていうから仕方なくだなぁ」

「わかってるわよ。どうもありがとね。」

「そ、それは男バスのミンナの前で言ってくれ！」

「あれ～オジオジがピーチヒメにプレゼントしてるぅ～」
うわっ最悪のタイミングであの男(ゲンキくん)が現れた。

「ゲンキこれは違うんだよ、オレはバスケ部の代表として、」
「いやいやミナまで言わんでもよろしい。ワタクシには全部分かっておりまする。それが『王子様』から『お姫様』への愛の贈り物だということくらい！」
「だから違うって言ってんだろ！」
「そうよ、ただの義理チョコバレンタインの『お返し』なの！」

「なんだなんだ？」
「おっ、またプリプリコンビがなんかやってるのか？」
だんだんと人がクラスの集まり始めて注目されるあたし達。こうなってくるとあたしは恥ずかしくて何も言えない。

その後もタイガはゲンキくんや周りのみんなに説明していたけど、その間あたしはもらった包みをなぜか握りしめたままだった。

進級王子

今日からオレも2年生だ。なんかそれだけで気がひきしまるよな。

「オージ～～」

って、またコイツと同じクラスかよっ

「なんだよゲンキ」

「いや、呼んでみただけ～」

「ふざけんな。『オージ』って新しいクラスで呼ばれるようになったらお前のせいだからな！」

「ちょっとっちょっとぉ、クリスマスのときの『オジオジ』は封印してやってるんだからありがたく思いなよ。」

当たり前だ！そんなふざけた名前で呼ばれてたまるか。しかし今年もクラスに「オージ」が普及しないように尽力するのは大変そうだぜ。

この苗字のせいで下の名前の「タイガ」って呼ばせたがってる、ただの馴れ馴れしいヤツって思われないようにもしなきゃいけないから一苦労だ。

ちなみに他に同じクラスになったバスケ部メンバーはカズキ、ミノル、リョウスケ、アキヒト、それに女子はレイちゃん、アカネちゃん、サアヤちゃん、ミスズちゃん。

そしてもう当然のごとくいるのが、そう小泉ヒメ。（つまり同期は全員集合ってわけだ。）

「またあんたぁ？」
「そりゃこっちのセリフだよ！」
「もうムダに絡んでこないでよね。」
「オレがいつ自分から絡んだっつうんだよ！？」
「まぁまぁお二人さん、朝からおアツイこって」
「そんなんじゃねぇ！」「ばっかじゃないの！？」

こうしてオレの2年生としての新学期はスタートした。

あれよあれよでなっちゃう姫

教室の中はざわざわしている。

新しく担任となった先生が入ってきた。みんな着席。

「はい今から学級委員その他もろもろの役員決めたいと思います。」

するとすかざずゲンキくんが発言する。

「あ、学級委員はオージとヒメでいいと思います！」

ちょっとゲンキくんナニ言っちゃってくれてんの？

「あ、オレ知ってる。去年のクラスでおまえら2人『プリプリコンビ』って言われてたんだろ？」

「そうそう、文化祭なんか2人で漫才までやってたし。」

「アタシもそれみたぁ。チョーおもしろかったよぉ。」

「プリプリコンビかぁ、それ先生も見たかったな」

おいおい話の流れがよからぬ方向に進んでいますぜ。

「じゃあプリプリコンビでいいと思う人！」

えっちょっと待って先生それはさすがに急すぎやしませんか？

「は～い」

クラス替え初日なのに、なにこの団結力！？

「それじゃ学級委員はオージとヒメに決定な。」

「先生異議あり！」

「なんだオージ？」

「『オージ』って呼ばれるのキライなんで下の名前で『タイガ』って呼んでください！」

そっちかい！

かと言ってこの空気の中自分で発言する勇気があるはずもなく…

こうして今年も、アイツとコンビを組まされるハメになったのだった。

センパイ王子

ついにこのときがやってきた。人から『センパイ』と呼ばれるその日が！

部活の練習前に集まった一年生にソーマ先輩が声をかける。

「じゃあ一年生、軽く自己紹介してもらおうか。」

「畑山瑛二（はたけやまエイジ）って言います！身長は１８５センチです！中学の時もずっとやってたんでＳＦやらしてください！」

うん、髪も短く、なかなかの好青年だ。

続いては長身の割に細身の彼だ。

「楢橋彰（ならはしアキラ）です。身長は１９５あってＣ希望です。体の強さなら誰にも負けません。」

いやその細そうな体で言われても説得力ないよ…

「伊藤誠（いとうマコト）。１７４センチ。とりあえずはＰＧ狙ってますけどシュートも結構いけます。」

おっ、おとなしそうな顔してなかなか強気なこと言う子だなぁ。

そして最後はコイツ。鋭い目つきと、しなやかな髪が威圧感を放っている。

「平林勝久（ひらばやしカツヒサ）。身長は１８８。ＳＦ希望っす。」

随分、無愛想なヤツだな。ていうかコイツもＳＦ希望？しかも二人ともかなり身長高いし…　せっかくカズキがＣにコンバートしてくれたってのに、まだまだオレのスタメンへの道は険しそうな予感がするぜ。
まぁこれでビビってたらオトコがすたるってもんだ。ドンとこいよ、１年ども！

「ウチは人数も少ないしキミらも即戦力になることもあるだろう。だから１週間体力トレーニングこなしたら、その後はドンドン２、３年のメニューに混ざってもらうつもりだからよろしく！」

「うっす！」

なかなか気の抜けない新学期が始まったようだった。

放課後体育館で練習していると1年生らしい子達が顔をのぞかせていた。
「キミたち女バスの入部希望者？」
「はい！」

ついに『センパイ』になるのかぁ、いやぁなんだか嬉し恥ずかしだな。

集まったのは3人だった。

「3人とも経験者？」
「はい！」
「じゃあ軽くアップしたら、せっかくだから3on3でもやりますか。」
思い立ったら即実践。展開が早いというか、レイらしいな。

メンバーを入れ替えながら30分ほどゲームをすると、レイが思い出したように言った。
「あ、自己紹介してなかったね。」

遅っ！

ここでようやく、新2年生のあたし達の名前とポジションなんかを話し出した。

「次は1年生の番よ。」

まずは背も髪もロングな彼女。

「南野雫(みなみのシズク)っす。あっヒメさんて何センチっすか？」

「…181センチだけど。」

「自分身長は178センチっす。ポジションはC希望なんで3センチの差くらい技術で軽く埋めて、ヒメさんにはシックスマンになってもらおうと思います！」

い、言ってくれるじゃないの、1年の小娘が。受けて立ってやろうじゃないの。

続いてはセンター分けの髪と、切れ長の目が特徴的な子だ。

「初めまして、優木藍華(ゆうきアイカ)と言います。身長は172センチです。中学の時のポジションはPFをやっていました。」

礼儀正しい子だな。うん、やっぱりコーハイってのはこうでなくっちゃ。

最後はちっちゃくてツインテールで、まだまだ中学生みたいなきらきらの目をした女の子。

「朝影陽奈(あさかげヒナ)、ポジションはSF希望です。155センチですが、デカいだけの人には負けません！とりあえずヒメさんからスタメン奪いたいと思います。」

マジか、またもやあたしを補欠にしようと企む輩が一人。

そこでレイがつっこむ。

「ちょっと待って、それはポジションとかの関係からしてイロイロおかしいでしょ」

「さっきの練習とか見てて、ぶっちゃけゴール下はミスズさんがいれば十分だと思うんです。あたしはスピードバスケにカタルシスを感じるんですよね。あたし、きっとレイさんの速いパスにもきっと対応してみせます！」

「ふぅ～ん、それはおもしろそうね。まぁキャプテンはアタシだから、使えるとおもったらその起用もなくはないわね。」

ええ～レイさんそれはないでしょぉ。でも実力によってはいたしかたないか…いやいやそんな弱気でどうするヒメ！負けるなヒメ！

声に出さず、一人心の中で自分を励ますのであった。

浮かれ王子

実は男バスの顧問の先生だった歴史の木島先生は、今年で定年退職だったのだ。
さて、これで新しい顧問を見つけなければならないという問題が発生したのだが、これはあっさり解決した。

「今年から翔泉高校に転任してきました、黒谷美幸（くろたにミユキ）です。今日から男子の顧問になったんだけど、あと女子の練習も一緒に監督することになったから。両方とも初日からバンバン指導していくからよろしくね☆」

そう言って現れたのは見た目は３０歳前後でけっこうキレイな先生だった。

全員ウッキウキである。
「やった、念願の顧問だー！」
「しかも『お飾り』じゃなく監督やってくれるっていうんだからサイコーだぜ。」
「これで美人だし言うことなしだな！」
「カズキ、そんなこと言ってるとアカネちゃんに怒られるぞ？」
「だいじょぶだって。それに、彼女がいるとかは関係ないのだよ。それはそれ、これはこれだよお子様タイガくん♪」
「誰がお子様だー！」

そうやって浮かれていた男子諸君は練習１日目でその認識の甘さを痛感する。

「ほらー、そこ手ぇ抜いてないでもっと走る！」
「だぁ～どうしてそこでシュート外すかなぁ、罰として腕立て３０回。」

絵にかいたようなスパルタ特訓が開始された。

今までの練習もきつかったが、監督初日ということもあって黒谷先生のテンションはマックスで加減というものを知らなかった。

けっきょく、部員全員が心身ともに追い込まれた一日となった。

練習が終わって黒谷先生が帰った後、コハル先輩がボソッと言った。
「これで監督の後継者問題は無事に解決しました。これで安心して次世代にバトンを託せます。」
仮にも顧問の先生をそんな上から目線で片付けますか…
コハル先輩、オレが思ってたよりだいぶ肝っ玉の強い女の子らしい。

でもこの言葉の中には、自分たちの代では全国出場できないんだという悔しさと哀愁もこめられていたような気がした。

鬼のしごきに負けない姫

黒谷先生のスパルタ特訓は女子に対してもそれは変わらなかった。まだバスケ歴1年のあたしにも当然のごとく容赦はない。

3on3では何度もサアヤやヒナにドライブで何度も切り込まれてしまった。

「ヒメ、あんた抜かれ過ぎよ。Cなのに全然ゴール下守れてないじゃないの！」

そしてシズクとのゴール下争いではことごとく負けていた。

「なにやってんの、自分より身長の低い相手に簡単にリバウンド取られていいと思ってるの？あんたこの1年なにやってたの？」

最後の言葉はずしりと効いた。

自分では一生懸命この1年がんばってきたつもりだったのに、それをあっさりと否定されたようで悔しかった。自分の今までの努力を簡単に流されたようではらが立った。そしてなにより、それが真実だと分かっていたから何も言い返せなかったのが余計にみじめだった。

だがその夜は泣かなかったし、落ち込みもしなかった。それは今まで散々経験してきたことだったし、今さら何も失うものなんてないっていう開き直りだったのかもしれない。だからなのか知らないが、次の日の練習も罵声を浴びながらも練習をこなしていけたのであっ

た。

スネ王子

「めっし♪めっし♪三度のメシよりうまいめっし♪」

この、謎の歌を歌ってるのはミノル。

そう、今は昼休みだからアイツほどじゃないにしてもみんなウキウキ気分なのだ。

「リョ～スケく～ん、今日はどんなお肉が入っているのかな～？」

「言っとくけどミノル、オレの弁当にどんなもんが入っていようと、オマエの腹にはおさまらねえよ。」

「うわ～相変わらずキッツ～イつっこみですな。」

2年の新クラスになると自然と、こうして男バスでメシを一緒に食うという流れになっていた。

ちなみにカズキとアカネちゃんは2人で毎日ラブラブランチだ。

いつもはバカ話ばっかなのだが、監督も入って気持ちも引き締まったのか、今日の話題はバスケのこと。

「なあ猛将の強さハンパなかったよな～。」

「ホントだよ、どうすりゃ倒せるのか全然ビジョンがわかねぇ。」

「うわっ、ドリブルバカのタイガさんが『ビジョン』とか言ってますぜぇ。」

「うるせぇジャンプバカ！」

「でもその気持ちわかるぜ。オレはシュースケ先輩の代が中心のチームとも戦ってたけど、はっきり言ってあれ以上だった。この部活

には足りないものが多すぎる。」
「たとえば？」
「絶対的司令塔の不在とかな。」

「くっそ！」
「わりぃアキヒト、別にお前のこと責めてるわけじゃないんだ。」
「うん、分かってるよ。でも高校から初めてバスケやったソーマさんを超えられない今のオレじゃ、チームになんの力にもなれないのが事実だよ。」
アキヒトが悪態つくのも悔しそうにするのもこの時初めて見た。

「そういえばずっと気になってたんだけどさぁ。オレの年の離れたバスケ部だった兄ちゃんがいるんだけど、兄ちゃんが言うにはここいらじゃずっと精機高校が絶対王者だったって聞いたけど。」

「それが猛将は、去年監督が変わってから強くなったらしい。選手を活かすのが異様に上手いから、選手が最大限に個性発揮してるしな。あれを倒したシュースケ先輩たちはホントすごいの一言だよ。一緒にプレーしてるときは気づかなかったくらいにな。」

「あと、去年3位だった高校も夏の大会と違ったよな？　たしか彩色学芸高校だったっけ？」

「あ、それウチの姉ちゃん行ってるとこだ。元々ベスト8ぐらいの実力はあったらしいんだけど、なんかそっちは3年前に監督変わってから急に強くなりだしたらしいよ。」
「ふ～ん、監督ってやっぱ大事なんかもな。」

ここでミノルの発言で話はそれていく。

「ていうかタイガ姉ちゃんいいんのかよ～いいなぁ～。オレなんて兄ちゃんだから小っちゃいころからパシられたりとかばっかだよ～。」
「ふ～ん。」
「交換しない？」
「いみわかんね～。それに姉ちゃんっつっても結局いじめてくんだぞ？」
「まじかよ～。女兄弟憧れあったのにな。」
「まぁ今その幻想が崩れて良かったな♪」

「そういえばリョウスケって兄弟とかいんの？」
「オレ？2コ下の弟一人だけど。」
「お、もしかして翔泉バスケ部に入ってきたりする？」
「さぁ、それはわかんねえなぁ～あんま話ししないし。」
「ぜったい来てくれるように推薦しとけよな！」
「なんでだよ？」
「だってソックリかどうか見てみたいんだもん♪」

あれ、会話に参加してない子が約1名。

あっ忘れてた…
「えっと、アキヒトは兄弟いる？」
「…一人っ子ですけどどうかしました？」

さすがのミノルも言葉が出てこないでいると、
「いいですよ、どうせボクは兄弟もいないようなつまらない人間ですから。」

そのあと、普段取り乱さないリョウスケも含めての3人でアキヒトをなだめるのに昼休みの残り全部を使ってしまったが、しょうがないか。

コーハイを陰で支える姫

今年も夏の地区予選が始まった。

「せっかく補欠メンバーもできたんだし、体力とか気にせずに全力でぶつかっていっていいからね！」

「はい！」

黒谷先生からスタメン発表を告げる

「今日のスタメンはレイ、アカネ、サアヤ、ミスズ、シズクでいくわよ！」

「はい！」

って、あたしは補欠か～～！

まあ1年がんばったとはいえ、中学までみっちりバスケしてた人にはそう簡単には勝てないか。

でも悔しい～！！

しかし試合が始まると自分がちょっと自信過剰になっていたことに気付く。

レイはインサイドのシズクにボールを積極的にボールを集め、ゴール下から確実にゴールを量産していた。

ディフェンスの際にもシズクの動きは絶好調だった。相手がシュート態勢に入るとありえないくらいの反射神経で跳びついて、シュートブロックを決めていた。

しかしかなり攻防ともにムチャな動きばかりするのでスキが多くなっているのも事実だった。でもそこはミスズがうまくカバーしてその穴を埋めていた。力技だけじゃなく、こういう細かいこともできるところはさすがというしかない。

シズク投入によるチーム力の大幅なパワーアップにより（言ってて切なくなるなぁ）、４０－２１で大きくリードして前半を折り返した。

「うん、思った以上に大きくリードできたみたいね。それにしてもシズクいい動きするわね。」
「あざーす！」
「よし、後半からヒメと交代よ。」
「えっ、なんでっすか！？」
「だってあんたバテバテじゃないの。」
「そんなことないっすよ、まだまだ全然いけます。」
「自分の疲れに気付けてないなんて3流プレーヤーもいいとこね。」
「うっ。」
黒谷先生キッツー

「それとミスズもかなりフォローで疲れてるみたいだからアイカに代わってもらいましょ。」
「はい。わかりましたわ。」
「そう、こうやって素直に認めることも大事なのよ、シズク。お分かり？」
「…はい。」

黒谷先生となにか約束でもしたのか、後半になってもレイはあたしとアイカにボールを入れて、徹底的にインサイド勝負に持ち込み、その期待に応えられたかどうかわからないが見事に勝った。

続く2回戦。

「今日はレイ、アカネ、サアヤ、ミスズ、そしてヒナでいくわ。」
またしても補欠…

ていうかこのポジションの偏ったメンバーで大丈夫なんだろうか？
そんなあたしの疑問をアカネが代弁してくれた。
「あの、ほんとにこのメンバーでやるんですか？」
「えっだっておもしろそうじゃん？」

この人はどこまで本気なんだろう。

ヒナは自分でスピードバスケを自負するだけあってドリブルのスピードもかなりあるし、パスを出すタイミングもかなり速い。

それと異様に燃えている人がもう1人。

サアヤだ。前の試合であまり活躍できなかったうっぷんを晴らすように、ヒナとダブルSFとして見事な連携を見せて得点を稼ぎまくっていた。

しかしこれで大変なのはミスズである。サアヤはともかくヒナはけ

っこうシュートを外すのでリバウンド勝負を一人で何度もさせられた。

「派手でかなりおもしろかったけど、さすがにミスズも限界ね。後半からヒナも抜いてヒメとアイカ入れるからよろしく。」
「はい！」

「あたしまだ全然イケますよ！？」
「ヒナ、あんたもバカ？どんどんスピード落ちてくるわシュート入んなくなるわ、自覚ないっていうの？」
この一言で完全にヒナは黙りこくってしまった。

さらにここで不服そうな顔をしてシズクが抗議する。
「あの、ヒメさんじゃなくてアタイじゃだめなんすか？」
「あんたみたいなめちゃくちゃプレーに大事な後半任せられないわよ！」
「…はい。」

後半はアイカと一緒にインサイドを手堅く守り、前半のリードもきいたのもあって勝つことができた。

この2試合を通して思った。

よかった、あたしもまだまだ全然やっていけるみたいだ。

汗と涙の王子

ダムダムダム

キュッ

シュパッ

「イエー、まずは2ポイント～」

「そんなのすぐに取り返してやりますよ！」

ここ、翔泉高校の体育館では来たる地区予選に向けて、『ＳＦスタメン争奪戦』なるものが繰り広げられていた。

その方法とはずばり、エイジ、カツヒサ、オレによる『１ｏｎ１』総当たり戦。

選抜方法はスコアだけでなく、その様子を黒谷先生やコハル先輩がチェックし、今度の試合のスタメンを決めるというものであった。

こちとら念願のスタメンがかかってんだ。そうやすやすと負けるわけにはいかねえな。

さて、１年生君のお手並み拝見といこうか。

エイジはなかなかプレーの幅も広いしボールハンドリングの技術は認めるが、それじゃオレは抜けねぇよ？まだまだ『中学レベル』っ

てのがプレーににじみ出てんなぁ。青い青い。なんたってオレはこの１年で一流選手のドリブルを何度もＤＶＤで研究し尽くしてきて、そレに対するディフェンスも日々実践してるんだからね。

カツヒサはドリブルの突破力はなかなか目を見張るものがあるが、それだけだな。なんか昔のオレを見ているようだぜ。動きが単調すぎて手に取るように分かるっつうの！

「っしゃあーーー！！！」

見事オレが優勝した。スコアもエイジ相手に１８－１２、カツヒサに至っては２２－１０だし、これは文句なしだろ！

「よし、次のＳＦのスタメンはカズキで行くか。」
「そうですね。」

えっ？

ちょっと待ってよ、お姉さん方…

それはあんまりじゃないですか…

こうしてオレの１年間の思いがつまった努力と純情を兵器で…じゃない、平気で踏みにじった魔女２人であった。

3回戦の相手はお茶の時女子高校というところらしい。なんでも創部2年目だというから、ウチと一緒じゃないか。

勝手なイメージだが、さぞかしお目の高いお嬢様方がそろっているんだろう。そんなところに負けるわけにはいかない。

会場に入ると、黒谷先生が相手選手を堂々と指を指しながら説明しだした。

ちなみにお茶女高校のみなさんはというと、仲良くお紅茶を飲んでいらっしゃる!?

「まずはPGのユイ。ほんわかしたちょっとゆるめな子だけど、試合に入った時の集中力は相当なものよ。」

あれ、雰囲気がちょっとあたしのイメージしたのと違う？　でもほんとだ、先生の言うとおりなんか動きがふわふわしてるよ～。

「続いてSGのミオ。はずかしがり屋だけどシュートの時は冷静沈着に決めてくるわ。」

いや、「はずかしがり屋」の情報はいらんでしょ。

「それからPFのムギ。見た目がおっとりしてるからって油断しちゃダメよ?」

でも一人お嬢様オーラが出てる子がいた。どうやらこっちも生粋のお嬢様、ミスズの相手になるようだ。

「そしてCのりっちゃん。そんなに大きくはないけど強敵よ！ヒメとシズクは覚悟しておいてね。」
「あの、あだ名で紹介されてもテンションていうか、士気が下がるんですけど…」
「だって資料にそう書いてあるんだもん。」
さいですか。

「それとSFのあずにゃん。一年生ながらエースをつとめているわ。」
え、なににゃんだって？もういいや、とりあえずがんばろ！

「それじゃいくわよ！」
「はい！」

負けた。
ボロ負けだった。
普段は騒がしい面々だが、試合が終わったあと誰も口をひらかなかった。

これからまた戦うことになる、そんな予感だけがした。

肩慣らし王子

「ディーフェンス！ディーフェンス！」
何回なってもスタマン落ちってくやしい！！
もうこれは恒例行事になりつつあるな。

試合はオレの出番が必要ないほど（？）、一方的な試合展開となっていた。相手はたしかにベスト８にあがってきただけはある実力校であるが、それでも攻守ともにウチが圧倒していた。

３年生は特に最後の大会とあってその意気込みは尋常じゃなかった。ソーマさんはこの日も冷静に、的確に、そして素早く味方にパスを送る。

またもやジョーさんのシュートブロックが華麗に決まる。

そしてイシちゃんの豪快なダンクでリングがきしむ音が会場に響き渡る。

前半はスタメンだけの活躍で２０点差まで差が広がっていた。

「後半アンタ達出すけど、これで点差縮められるようだったら家までランニングだからね！」
コハル先輩のプレッシャーもいつも以上に絶好調みたいだ。

「うす！」

とは言ったものの、一年も含めての総入れ替えに若干の不安もなくはない。それを見透かされたのかどうかわからないが、ミノルがこちらの顔をにやにやしながらのぞいてきた。
「おいタイガ、新人戦ときみたく緊張してんじゃねぇぞ？」
「うっせぇミノル！言っとくがオレはとっくに臨戦態勢入ってってからな！！」
「ほえ～成長しましたな～。」
「あ、疑ってんだろテメェ！　っていうかマコト、アキラ、お前らこそ高校の初試合でテンパったりしてねぇだろうな！？」
「タイガさんほどじゃないっすよ。」
「オレもっす。」

言ってくれるじゃないか、まぁ頼もしい限りではあるが。

実際試合が始まってみると、我ながらその言葉にウソはない結果を出せたと思う。
アキヒトからのパスを受けた連係プレーはハマり、ＳＦらしく何度もシュートを決めた。
今回はしっかりディフェンスも機能できていたと思う。

さらに終盤ではカツヒサとエイジも投入し、フォワード力を高めてさらに得点を引き離しにかかった。

ピーー

後半でさらに１０点差をつけて、試合は圧勝に終わった。
とは言っても、前半で勝負がついていて相手チームの士気が下がっていた感も否めないが。

とにもかくにも、なんとか罰ゲームのランニングを免れたオレ達は、清々しい勝利の余韻に浸っていた。

「浮かれてるんじゃないぞ！」

そんな1、2年の気持ちに気づているのか、試合後のミーティングではソーマさんはいつになく厳しい声を出していた。

そうだ、これからが本番だ。3年生を中心として決死の、しかし絶望的な戦いが始まる。

男子はいよいよ決勝トーナメントに進出だ。黒谷先生の提案で、あたし達はそれを応援しに行くことになった。

あまりにもあっさり負けてしまって気持ちの整理のつかないあたし達の気分転換でもあるそうだ。

しかし当日になってみるとその悔しさもなんのその。なんだかみんな浮かれて遠足気分。レイがみんなのお菓子チェックを始めた。

「アイカ、それなぁに？」

「塩キャラメルクッキーです。」

「おいしそ、１枚も～らい。シズクあんたやたら荷物多いわね。」

「そうっすか？」

「なに入ってんのかなぁ～？」

カール、じゃがりこ、かっぱえびせん、カラムーチョ、とんがりコーンってアメリカ人か！

どんだけスナック好きなのよ。

「どれどれミスズは？」

「わたくしはたいしたものじゃないんですけど。」

いやいやいやいや、あなた見たこともない高級そうな包みを手にしているんですけど。

「さすが格が違うわぁ～。あとでちょうだいね。」

「もちろんですわ。」

そう言ってる間にも、サアヤは一心不乱に食べてる。なにをって、ピノ、パピコ、アイスの実、爽、そしてガリガリ君…

どんだけ「冷たい女」なのよあんた。見てるこっちが寒くなるわ！

「ねぇアカネはお菓子なに持ってきた？」
「ん～とね、つぶつぶいちごポッキーとぉ、ハイチュウイチゴヨーグルト、きのこの山いちごショコラ、あとはアポロ。」
いちごばっかりやんけ！

「そういうレイは？」
「あたしゃミルクチョコレートとミルククッキーとミルキー！！」
「…別にそれ食べても背は伸びないと思うよ？」
「そんなんじゃないし！ただ好きなだけだもん！！」
なんかレイちょっとかわいいっ

「気が合いますね、レイさんあたしも同じです！」
ヒナ、おまえもか。

「そういやヒメは？」
「え、あたしはのり巻きせんべえと酢昆布。」
「なにそれ、おばあちゃん？」
「色気なさすぎぃ～あははは」
「ほっとけ！言っときますけどどっちもめっちゃおいしいんだからね！」
「はいは～い」

最初はどこか楽しげな雰囲気もあったあたし達も、試合を始まるとそれが一変した。

まずそのプレーの激しさに圧倒されてしまった。

ドリブルであっという間にコートを駆け上がったあと、激しいゴール下での攻防からの華麗なシュート合戦が繰り広げられている。

これが全国をかけた戦いってやつか。

翔泉高校も3年生をはじめ全員がこれまでにないくらい、いいプレーしていた。もちろん前からすごいとは思ってたけど、改めてウチの男バスの強さを知った。

あたし達も少しでもその力になれるように必死に声を出して応援していた。

しかし健闘むなしく結果は3戦全敗。

最後の試合が見終わった後は、みんな口数少なかった。

「すごかったね。」

「うん。」

そう言ったきり全員がまた黙る。その沈黙の中誰かがつぶやいた。

「遠いな…」

あんなに強かったセンパイはもういない。

男女の違いはあれど、改めて高校バスケの厳しさを感じた。
それは男バスの前途多難な道を示しているようにも感じられた。

頼りになるセンパイはもういない。

タイガたちうまくやっていけるのかな？

あたし達もたくさんお世話になったなぁ。

あたし達が引退した時にはこんな風に思ってもらえるようになるのであろうか。

そんな、いろいろなことを考えさせられる数日間だった。

寄せ書き王子

試合の終わった次の日の送別会で、オレ達2年から引退する3年生にメッセージを書いた色紙を渡した。

「おまえら…」

そう言ったきり、ソーマさんは言葉が出てこない。ジョーさんは表情が固まったままで、イシちゃんは男泣きを始めている。

「あっ、もう一回返してください。今から読み上げますから。」

「アキヒトせんぱいへ　あの天才的なボールさばきにいつもびっくりして動けませんでした！　ミノル」

「ふっ、なんだよそれ。」

うわっ出鼻からムードぶちこわしな内容ブっこみやがって！

「ソーマせんぱいへ　そのノリのいいとこ大好きでした。練習中でもいつもオレらを楽しませてくれてありがとうございました。タイガ」

「おまえも十分おもしろかったよ。」

「ソーマせんぱいへ　あの試合で不意を突いたパスで相手を出し抜いたあれ、サイコーでした。　カズキ」

「ありがとよ。」

「ソーマせんぱいへ　いつもメッチャいいパスくれるのに、オレが全然シュート決めれなくてすんませんでした！　リョウスケ」

「そんなことねぇよ。良く決めてくれてたよ。」

「ソーマせんぱいへ　プレーでもポイントガードとしての見本を見せてもらいました。今までも、そしてこれからもずっと尊敬してます。アキヒト、うっ」

感極まってアキヒトはソーマさんに抱きついた。

「おまえが先に泣くなよ～～」

「うっ、ぐっ、すいません。。」

「え～続きまして、ジョーせんぱいへ　センパイとコンビ組んで攻めてるときチョーやりやすかったっす！　カズキ」

「ジョーせんぱいへ　あの強烈なシュートブロックに何度助けられたかわかんないっす、すごかったです。　リョウスケ」

「ジョーせんぱいへ　いつも縁の下でチームを支えてくれていてかっこよかったです。　アキヒト」

「ジョーせんぱいへ　ぶっきらぼうに見えて時折優しくしてくれるの、オレ知ってます。　タイガ」

「ジョーせんぱいへ　絶対オレ、ジョーさん超えるパワーフォワードになってみせます！　ミノル」

ジョー先輩は下唇をかんでずっと黙ったまま、色紙を受け取った。

「イシちゃんせんぱいへ　まったりしたオーラは部の雰囲気を癒してくれてました。　アキヒト」

「イシちゃんせんぱいへ　その大きな体はゴール下は心強かったです。　リョウスケ」

「イシちゃんせんぱいへ　センターの手本となるプレー勉強させ

てもらいました　カズキ」
「イシちゃんせんぱいへ　ありえない食べっぷりにはいつも驚かされてました！　ミノル」
「イシちゃんせんぱいへ　あの最後の試合での豪快なダンクはたぶんずっと忘れることはないと思います。　タイガ」

オレがそう言い終わったあと、イシちゃんのアツイ抱擁、もとい全力タックルが飛んできて死にそうだった。

「それとコハルせんぱい。」
「は、はい！？」
「コハルせんぱいへ　厳しい指導とかわいい笑顔でいつもオレたちを優しく包み込んでくれてありがとうございました。　リョウスケ」
「え、ええ～もしかしてわたしの分まであるんですか？」
「当たり前じゃないっすか。せんぱいも『センパイ』なんですから。」
「ううっ、そんなこと言ったら泣いちゃうですぅ。」

ちなみにコハル先輩はソーマさんの分が読まれてるときから一人で大号泣している。

「じゃあ次はタイガだな。よろしく！」
途中で流れが切れたからやりづらいな

「コハルせんぱいへ　ＤＶＤいつも見てます。オレ、コハル先輩のおかげでスゲェ成長できたと思います。ほんとに心の底から感謝

してます。　タイガ」
「タイガくん…」
「コハルせんぱいへ　　オレ、センターにコンバートしてもらって今すげえやりがい感じてます。絶対このご恩はプレーでお返しします。　カズキ」
カズキ気合い入ってんなぁ。
「コハルせんぱいへ　　いつもオレのことジャンプバカって叱ってくれてありがとうございます！　ミノル」
オマエ最後までバカまるだしじゃねぇか。
「コハルせんぱいへ　　自分に自信のなかったオレがここまで来れたのもコハル先輩のおかげです。今までありがとうございました。　アキヒト」
最後はアキヒトがきれいにシメてくれたな。

この後黒谷先生もちで派手に焼肉パーティーをして、それを最後に３年生の４人は部活を去った。

新部員追加でテレる姫

「新しい部員を紹介する」

黒谷先生がそういって現れたのはあたしより少し背の低そうな人影。
だいたい１７５センチくらいか？
またあたしのスタメンへの道が遠ざかってしまうではないか。

肩まで伸びた明るい色の茶髪はキレイで、光を反射してキラキラしている。髪が傷みやすくてショートにしかできないあたしからしたらなんてウラヤマシイ。それにしてもなんでこんな中途半端な時期に入部？まぁ細かいことは気にせず、ここは温かく迎えてあげなくちゃ。

「では自己紹介よろしく。」
「は～い！まだまだぴちぴちの１５才、菊池真佐美（きくちマサミ）です。よろしくでぃーす☆」

ノリ軽っ！

ちょっと一緒にやってく自信なくなってきたかも。
あたしテンション高い子って苦手なんだよなぁ～

「え～男の子ということで皆もいろいろと最初は戸惑うこともあると思うけど、せっかくのマネージャーなんだから優しく迎えてあげるように。」

「は～い」

ふ～ん、マネージャーなのか、ちょっと新鮮だな…

「って男!?」

「ナニ言ってんのよヒメ。見りゃわかるじゃない。」

「だって男バスに女子マネはよくあるパターンだけど、逆はありえないでしょ?」

「偏見だよそれは。せっかく入ってきてくれたんだから大事にしないと。」

「いやムリムリムリ!全然頭がついていかない!」

いや、落ち着いて見てみりゃオトコ以外のなにものでもないよね。あたしがはなっから女の子の新入部員だと思い込んでたからどえらい勘違いをしてしまっていただけで

「ヒメさんておもしろいっすね、好きになっちゃいました☆」

「へ?」

「良かったじゃん、ヒメ念願の彼氏ゲットできて。でもマネージャー独り占めしないでよ?」

「うっさいアカネ!そ、それに別に今のは告白ってわけじゃないし!」

「ひど～いヒメさん!オレの精いっぱいの愛の告白をそんな風にスルーするなんて。」

「え、本気なの?」

「当たり前じゃないっすか。ってホントは前からヒメさん見かけてて、それでイイなって思ってたんすよ。それで女バスのマネやってみようかなって思ったんす。」

「いやだってあたしキミより身長高いんだよ?」

「そんなん全然関係ないっす。愛があればそんなん簡単に乗り越えられますから!」

「ひゅ〜ひゅ〜おアツイこって」
「ヒナ、せんぱいからかうんじゃない！」
「これは浮気ですな、さっそくタイガくんに報告せねば。」
「レイ、なんにも報告することなんてな〜い！それになぜに「タイガに」なのよ！」
「あ、そうだマサミくん言い忘れてたけどヒメにはタイガくんていう男バスに許婚（いいなずけ）がいるのよ。でもがんばって！応援するから！」
「何もかもちっがーーう！　黒谷先生〜なにか言ってやってくださいよぉ〜」
「まぁ部員の這った惚れたにかかわるつもりはないけど、ほどほどにしな。いやぁ、それにしてもタイガとそんな関係だったとは意外だな。もてもてのヒメさんは早く結論出して、精々早く三角関係解消しなさいよ？」

もうだめだ。誰もフォローどころかどんどん推し進める気マンマンだ。

「さて自己紹介も終わったことだし、練習始めますか。」
いや肝心の自己紹介は名前くらいしか分かってないと思いますけど？あとはどうしようもなく軽いオトコだってことくらいか。

その日、あたしは気が動転しまくってパスはとりこぼすは、シュートはリングにかすりもしないわ、挙句の果てにはリバウンド取りにいって顔面でボールキャッチするわ、散々な練習日となった。

バトン王子

3年生の送別会があった次の日に、残されたオレ達1、2年はミーティングに召集されていた。

「昨日までよく戦ったわ、ご苦労様。でもね、あなた達はその余韻に浸っている暇はないの！」

第一声から黒谷先生はかなりキツめなコメントが飛び出した。

「今までのチームに何が足りなかったかわかる？」

誰もすぐには返事はできなかった。これでも、やれるだけのことは精いっぱいやってきたつもりだったからだ。

「それは『経験』よ。」

黒谷先生はそう言って一人一人の顔をじっと見つめる。目が合った時、「やっぱキレイだな」とか不謹慎なこと考えてたけどすぐに気持ちをきりかえた。

「バスケットに限らずスポーツは生まれ持った才能だけでなく、練習や試合で積み重ねられた経験がものをいうものなの。それは中学までの蓄積はもちろんのこと、高校で積み上げてきた一日一日が大事であることは言わずもがな。はっきり言って、これまでのチームで一番の不幸は3年生が3人しかいなかったことだわ。特にソーマくんはあれほどのセンスを持っていてたし、もし中学からバスケを始めていればもっと実力のあるプレーヤーに成長していたのにと思うと、残念としか言いいようがないわね。」

改めてそういう風に分析されると、3年生たちの無念が伝わってくるようだった。

「ソーマくんやコハルちゃん達もそれを痛感して、あなた達に『夢』を託したっていうのも聞いたわ。アタシはそれを聞いて、そしてあなた達のプレーを見て確信した。この一年、全員がバスケにすべてを捧げる覚悟があれば不可能じゃない！」

「それって、ほんとですか？」

「こんなとこでウソついてどうすんのよ？　ただ、ホントにみんなその覚悟はある？」

「はい！」

すぐに返事をしたのは2年の面々だけだった。

「言っとくけど2年生の5人でも十分じゃないんだからね。今はまだピンと来ないかもしれないけど、1年生にも同じ気持ちがあるのかしら？」

「はい、おれバスケのために翔泉高校来ましたから！」

「言うね～マコト～！」

「すいません、つい感動して泣いてしまってました。オレもやります！」

「よく言った、エイジ！」

「正直3年生の思いとかは半分くらいしか分かってないっすけど、

でもどうせやるなら全国目指したいっす！」
「オレもそんな感じっす。」
「うん、それでいいと思うよ。アキラ、カツヒサ」
「じゃあ早速、その第一歩となる練習始めましょっか」
「うっす！」

意外と乙女心な姫

男子の方はセンパイが抜けて新チームとなり、ここ最近はハードな練習をこなしている。はたから見ていてもひとりひとりがモチベーションも高く、目的意識を持ってバスケをしているのがわかる。それに比べて、どうも真剣ムードに欠けているのがわが女バス。ここ一週間は黒木先生が男子の方につきっきりっていうのもあるけど、このたるんでる雰囲気の原因の８割はコイツのせい。

「チィース！今日も張り切ってバスケっていきまっしょ～～」

そう、地区予選が終わって急に湧いて出てきた新入部員、とういか新マネージャーのマサミ。１００歩ゆずって「オトコ」ってことは許すとして、あのノリの軽さぐらいはどうにかならんものか。なんだよ「バスケって」て。

「ねぇレイ、やっぱマサミくんクビにしない？」
「なによヒメ、珍しく過激な冗談言うじゃない。」
「違うわよ、あたしは本気！！なんか彼が来てからイマイチ部の雰囲気にマジメさが足りないっていうか、集中しにくいのよね。」
「う～ん」

とか言ってるそばからキャッキャキャッキャした声が聞こえてくる。

「マサミくん、いつも元気だねっ。ヒナもとっても元気出るぅ～」
「あざ～す！もうどんどんテンションアゲアゲでいくよ～～」
「そんなことよりさ、アタイのシュートどうよ？」
「もうサイコーだよシズクちゃん！」

なんだかしれないが、一年のうち２人までもがそれに対してまんざ

らでもない様子なのだ。
いくら部の中に急に男子が入ってきたからと言って、ちょっと色気づきすぎやしないか？

これが残りの2割だ。

「ね、あの2人かなり様子がおかしくない？」
「あの二人はミョーにヒメにライバル意識をしてるからあんな告白まがいのことされて嫉妬してるだけよ。「あんなデカいだけの女のどこがいいのよ、アタシの方がよっぽどカワイイじゃない」ってね。そういうことだからキニシナイキニシナイ。」
「う～ん、そうなのかなぁ。…ってデカいだけウンヌンのあたりはちょっと気になるけど。」
「むしろマサミくん入ってきてからのほうがその「目」を気にしていい動きしてるわよ、あの子たち。勝手に動き悪くなってるのは告白されて浮かれちゃってるヒメくらいじゃない。」
「あたしは別に浮かれてなんかな～～い！」
「じゃあ問題ないじゃないの。さっ無駄話は終わり！練習始めるよっ」
「は、は～い」

そっか、あたしひとりが意識しすぎなだけか。なんだかうまくはぐらかされただけのような気もするけど。

「ヒメさ～んお疲れっす。はいタオル。」
「あ、ありがと。」
まぁ少なくともマネージャー業はしっかりこなしてくれてるわけだからいいか。要するにあたしの気が抜けているだけなんだから、気持ち切り替えてがんばるぞっ。

よしっ、気合い入れ一発目のシュートッッ！

ガスッ

「ヒ～メ～」

どうやら気持ちの切り替えにはまだまだ時間がかかるようだ。

勘違い王子（前書き）

今日ついに、１００００ＰＶいきました！

今まで読んでいただいている方ありがとうございます。これからも更新がんばっていきたいと思います。

勘違い王子

今日は久しぶりに学級委員のお仕事で居残り。というか2年になってからは初なのだが、なにぶんパートナーが『アレ』なもんでこれっぽっちも新鮮味がない。しかし2人ともボーっとしたまま、手は動いていない。ほんとはさっさと片づけて部活に行きたいのに、担任の先生がいないと進まない内容なのだ。しかもよりによって今日は職員会議だとかで先生は遅れている。まったくあの先生のテキトーさにはハラが立つ。

しゃあないからヒメ相手にムダ話でもして時間つぶすか。

「そういえば昨日見かけたんだけどさ、部員増えたみたいじゃん、なんていうのあの女の子？」

「入部してから１０日以上たつのに今頃気づいたの？マサミくん。言っとくけど男の子だよ。」

「マジか、オトコかよ！？全然気づかんかったぁ。」

「ば、ばっかじゃないの！？どう見たって男じゃない。どんだけ人を見る目がないの！？あんたの目は節穴ねっ。」

「まぁそんなにじっくり見てたわけじゃないからな。そういえばそんな気もするかも。」

なんだか知らないが、しょっぱなからヒメはケンカモードだ。ホントはこっちもキレかけたが、まぁオレもそろそろ大人にならないとなって思って話はテキトーに合わせておいた。それにしてもほんと女って意味わかんねぇ。

「でもなんで女バスに男マネ？あ、わかった。もしかして女バスの中に好きな子いるとか？誰誰？教えろよ。」

「そ、それは…知らないわよっ、そんなこと！」

「ふ～ん。ま、ほんとに好きな子がいたとしても恋愛事にニブそう

なオマエにわかるほどそいつもバカじゃないか。」
「失礼ね、いっときますけどマサミくんはあたしのこと…。やっぱなんでもない。」

「「あたしのこと」？あっわかった。オマエが男だと間違われたんだ。マサミってやつの考えはこうだ。ある日女バスの練習をちらりとのぞくと女子に混ざってデカい男子が突っ立ってる。「なんだよ、女バスにもうすでに男子いるじゃん。」それで安心して入部してきた。どうだ、当たりだろ？」
「まったく毎度毎度失礼なヤツね、違うわよ。そんな勘違いするバカはあんたぐらいだっつうの！それにアイツは女子の中でも男一人でも平気なくらいずぶとくて、しかもただの女好きのチャラ男なのよっ！」
「そんな必死にならなくてもいいじゃねえか。」
ヤバい、だんだんムカついてきた。しかしここでキレちゃだめだ。センパイもいなくなったし、オレは部活だろうがクラス内であろうが頼れる人間になるって決めたんだ。

しかしオレの決死の覚悟も、次の言葉で崩壊する。

「ちょっとだまっててくれる！？ヒトが一生懸命忘れようとしてることズカズカ聞いてきてなんなのよ、もう！教室にいるときくらい違うこと考えさせてよね。だからあんたと2人っきりなんてイヤなのよ！」
「ふざけんなよ、さっきから意味不明にキレまくって。お前は活火山か！しゃべるたびイチイチ噴火して、こっちこそいい迷惑だ！」
「またそうやってあたしを山なんかに例えてバカにして！言っときますけどあたしってけっこうモテるんですからね！！」
「うそつけ！マサミってやつに男だと間違われたばっかじゃないか。」

「それはあんたの勝手な妄想の中でしょ！？それに、その当のマサミくんにまさに出会った時に告白されたんだから！」
「うぇ！？」

さすがにこの予想外な事実には一瞬戸惑ったが、このくらいでオレの怒りの火山は止まらない。
「へ、へぇ～。あんなオトコだかオンナだか分かんないやつならむしろお前にお似合いかもな！」
「言っときますけどカレ１７５センチあるのよ。バスケットプレイヤーなのに１７０もないかわいそうなどっかの坊やよりも、心も体もずっと男らしいわよっ！」
「どうだかなっ。ふつうバスケのマネージャーやりたいなら男子の方にはいれっつうの！なんだよソイツ、女子に囲まれても平気なようなナヨナヨしてるやつなんかに男らしさで負ける気がしないねっ！」
「なんかモテない言い訳みたいでかわいそっ。たぶん心も体も豆粒みたいなあんたのせいでいつまでもマネージャーの女の子が入ってきてくれないのよ。」
「そ、そんなわけないだろ！と、とにかくそんな女男と仲良くしてんじゃねぇぞ！」
「はっは～ん、図星だから急に話題変えようとしてるでしょ。」
「ばかっ、ちがうっつうの！そういう男はろくでもないって相場は決まってんだから、オレはわざわざ忠告してやってんだよ。勘違いすんなっ。」
「はいは～い、とりあえずあんたがヤキモチやくほどあたしにホレてるってことはよ～く分かりましたよ～～」
「だ～か～ら～」
「テレるなってぇ、大好きな女の子を独り占めしたいのは恋する男の子のサガなのだから☆」

ダメだ、途中から完全にやられっぱなしで言葉が出てこない。

「もう入っていいか？」

オレが黙っていると突然声がした。なんか声が低いのでこれはヒメじゃない。もちろんオレでもない。

「わるいな言い出しっぺの先生が遅れちまって。それにしても驚いたなぁ、仲がいいとは思ってたけど、おまえらホントに付き合っていたとは。いやぁ、イチャイチャしてるとこジャマして重ね重ねスマンスマン。」

「先生いつからそこにイラッシャイマシタ？」

「えっ？タイガが小泉に、「おれ以外の男を見るんじゃない」的なことを言ってたあたりだが。」

忘れてたー！そうだ、元はと言えばこの担任が遅れてくるからこんなことになったんだ。しかも会話を聞きだしたタイミングが最悪っ。やっべ、なんか勘違いしてるし…

「用件はすぐに済ますから、その後は二人っきりの教室でどうぞご自由にな。」

「先生違うんです。今のは恒例の漫才みたいなものでして、ねぇタイガ？」

「そ、そうそう先生。ホントおれらそういうんじゃなくてタダの親友っていうか。」

「わかったわかった、クラスのみんなには黙っておいてやるよ。今日の出来事はオレとおまえら二人の秘密にしといてやるからな。」

けっきょく、「おれって分かる『大人』だろ?」顔の先生のニヤニヤは止めることはできず、その後学級委員2人は顔を真っ赤にしながらさっさと仕事を終わらすことに集中した。

気になっちゃった姫

ピ――

「今日の練習は終了でぇ～す☆」

このチャラい声にもだいぶ慣れてきたのかな。いつも練習の最後には４対４のミニゲームをするのだがけど、今日は久しぶりに自分のプレーができた気がする。学級委員で遅れて時間短かった分、体力有り余ってたからかな？

そんな違いをよく見てくれているのが、われらがキャプテン。

「ヒメ～、ようやくセンターのエースらしい動き出来てたじゃない！」

「やっぱりそうかなぁ？自分でも動きがキレキレだったのわかるのよね。」

「自分でその違いがわかるようになれば一人前ね。でもま、マサミくんのこと気にしてなきゃ今のヒメの実力ならこのくらいがフツーだと思うんだけどねぇ～。さては本命のダンナ様になんか言われたとかぁ？？」

「ち、違うっつうの！」

まぁ「ダンナ様」かどうかはともかく、アイツになんか言われたのは事実であるが。やだっ、思い出したらまた顔が赤くなってきた。

「わっかりやすぅ～やっぱりヒメにはタイガくんの方がお似合いみたいっ。こりゃ修学旅行が楽しみだっ」

「ちょっ、レイ同じ班だからってなんか企んでふたりっきりとかにさせないでよ！？」

「なになに、それは「旅行中は２人だけにさせてくれ」っていうことと受け取りますがぁ？」

「わぁヒメちゃんダイターン！」
「付き合ってるアタシとカズキでもそんなことはっきり言えないよお。」
そろいもそろってウザいことこのうえない。どうしてあたしの周りの人間はこうもヒトノハナシを逆に逆にとらえようとしたがるのかっ！

「ナニはなしてんすかぁセンパイたちぃ？オレも混ぜくださいよぉ☆」
「いやぁこればっかりはマサミくんには秘密なんだなぁ～」
「そうそう、1年は1年同士で仲良くしてなよぉ～」
「うっわぁ、つめたいなぁお姉さんたち～。まぁ別にいいんだけどね～。ヒナタちゃ～ん、シズクちゃ～ん、アイカちゃ～んマックいこ～」

「いいよ～」「おぅ！」「…」

こういうの聞いてると、この前の告白はどこまで本気だったのかわからないな。ま、別にその方がいいんだけど。
それよりも気になるのはアイカだ。マサミくんのテンションについていけないって気持ちはよく分かるのだが、さすがに無視はひどくないか？

「ねぇ、アイカってマサミくんのこと嫌いなのかな？」
「う～んどうだろ。でも他の二人が仲良くし過ぎなのは置いといて、たしかに一回もしゃべってるとこ見てないっていうのは異常かも。」
「ちょっとアイカに話し聞いてみようかな。」
「え～それは気にしすぎじゃない？ヒメっておせっかいだよね～」
「あんたたちにはわからないかもしれないけど、新しい人が入っちゃうと簡単にはなじめない子もいるのよ？」

「それって実は告白で動揺してたジブンのこと言ってるんじゃないのぉ？」
「ニヤニヤするなぁー！決めた、あたし今日アイカと2人で帰るから！」
「お好きにどうぞ～！」

というわけでアイカと2人で帰宅途中。

部活に関係ない話をしているときはいつも通り楽しそうにおしゃべりしていたのだが、マサミくんの話題が出ると急に黙ってしまった。
「やっぱりああいう子苦手だった？実はあたしもなんだよねぇ～。なんか告白のことはヌキにしても、なんかあのかるぅ～いフンイキがどうも合わないっていうかさぁ。まぁでも話してみると意外といいヤツだよ？あの子もあれで部を盛り上げようとがんばってるってうのかなぁ。とにかく今度マックでも一緒に行ってみたらいいじゃない。」
「…あの、違うんです。」
「へ？」
「実はアタシ、うまく男の子と話せないんです。」
「え、それって他の男子でもそうってこと？」
「はい…」

あたしなんかやっちゃったかな。そういえば男バスの誰かと話しているの見たことないかも。女バスの中だとみんなに混じってフツーにしゃべってるから気づかなかったな。
「でもどうして？あっわかった。「オトコなんてミンナ野蛮よ！」とかって感じ？」
「そ、それは…」
「ご、ごめん余計なお世話だったねっ。そういうこともあるよね。

いちおうマサミくんには嫌ってるわけじゃなくて、ただシャイなだけって伝えとくから。でもアイカもあいさつと返事くらいはしてあげなさいよ?」

「がんばってみます。」

そう言ったアイカの笑顔はかわいかった。この子をこんな笑顔にしてあげられる男子が、いつか現れてくれるといいなって思った。

「ありがとうございます。実はいままで誰にも言わずにちょっと苦しかったのもあるんです。ヒメさんに聞いてもらって少し楽になりました。」

「そう?そう言ってもらえるとあたしも嬉しいかも。それじゃ、明日も練習がんばるためにおいしいたい焼きさんでも寄ってきますか。あたしおいしいお店知ってるんだぁ。」

「はい!」

災難王子

男マネが入って浮かれているらしい女バスはどうか知らないが、バスケ一筋に燃える男バスは新チームになって初めて練習試合が組まれた。

ほんとなら両手を上げて喜ぶところだが、ここで問題発生。

それはリョースケの発言から発覚した。

「先生、オレその日学校で科学館行くの決まってるから出れないっすよ。」

「え、なにその行事？あたし知らないよ？」

「先生は文系クラスの副担任だからじゃないっすか？理系の2年は全員行きますよ？」

「たしかアンタ達全員同じクラスだったよね。ってことは5人ともいないってこと？」

「いや、ウチのクラスだけ文理混じってるんすよ。ちなみにオレも理系っす。」

ミノルまで？というか2年メンバーで一番数学ができないミノルが理系だったということに驚いた。

「あ、それオレも応募したんで行ってきます。」

「ちょっと待ってマコトも？」

「先生どうするんすかぁ。」

「いや、だいじょぶっしょ6人いるし。なんとかなるって！」

黒谷先生たのむよ～

先生も忙しい中コーチしてくれてるからあまりはっきりと文句を言えないといのもツラいが、こういう時にマネージャーの不在が悔やまれる。

べ、別にそれでも『マサミくん』はうらやましくはないけど。

当日6人で相手校に乗り込むことになった。

ちなみに新キャプテンはリョースケに決まったのだが、新チームお披露目の日に不在というこのグダグダぶり。

さらにここで第2の問題発生。

試合前のアップ中、どうもカツヒサの動きが悪い。先生はカツヒサを呼んで額に手を当てると目つきが変わった。

「アンタひどい熱じゃない!? いくら無口だからってこういうことはちゃんと言いなさいよ!」

「いやだってオレがいないと5人になるし、試合になんねぇし。」

「さすがにこの熱じゃできないわよ! というわけで今から病院行ってくるからあとはよろしく、アキヒト!」

「え、なんでオレに「よろしく」なんすか?」

「今からアンタ副キャプテンだから。」

「ええ〜〜」

そう言い残し、先生はカツヒサを担いで去って行った。

残されたのはわずか5人。しかも監督なし。

「と、とりあえず。スタメンを言うね。」

「いや、今ここにいるヤツ全員だろ。」

アキヒト相当テンパってるな。

「うっ。じゃなくてポジション発表する。問題なのはリョースケ以外にいないSGだけど、割とボール運びなんかもできるエイジにやってもらおうと思う。あとはPGはオレ。SFタイガ、PFカズキ、Cアキラでいく。」

何気にカズキもＰＦはやったことないが、この際そんなことは言ってられない。

そんな状態で試合は始まった。技術的にも精神的にも要であるリョウスケがいないことが大きく、序盤からディフェンスは大崩れであった。それでもカズキを中心としてインサイドから得点を重ね、なんとか食らいついていく。

前半終わって、４７－３２

しかも後半はベンチのメンバーのいないこっちがキツくなってくるのは目に見えている。あげく向こうのキャプテンから

「あの～なんか今日ベストメンバーでもないようですし、もうやめますか？」

なんて言われる始末。

「いえ、やります。続けさせてください！」

そう言い切ったのはアキヒトであった。早くも副キャプテンとしての自覚が出てきたのか？

その決意ははったりではなかったらしく、後半からはアキヒトの指示が飛び、むしろ前半よりもディフェンスが機能し始めていた。

「ようやく相手の得点が止まってきたな。これから反撃行くよ！頼んだからねタイガ！」

「おう！」

正直言って今は走ってるだけでもキツイのだが、そんなこと言ってられない。だって本番じゃこのチームの何倍もの格上を倒さなきゃいけないんだから。

アキヒトが３Ｐラインまで一気にドリブルで運ぶとカズキにパス。

すかさず相手もゴール下でプレッシャーをかけてくる。

しかしカズキは一瞬オレのマークが外れているのを見逃さなかった。

よしっ。

ドリブルで空いているエリアにつっこんでいく。前にはディフェンスが迫る。オレは素早くその場で止まってシュートした。

オレの前に突っ立ったままのディフェンスの頭上を通り越してリングに吸い込まれていく。

「っしゃあ！」

その後も最後まで善戦するも、一歩及ばず負けてしまった。しかし体力が限界の中やりきった経験は決して無駄ではなかったと思う。

ただ、もう2度目は勘弁してくれ。

出発前にも一苦労な姫

いよいよ来週に迫ってきた修学旅行関係のことで毎日の授業はほとんど埋まっていた。
そして今日はその中でも、とっても大事な取り決めがあるのである。
「じゃあ今から修学旅行中の自由時間の班決めをするから、各自3人組を作ってくれ。」
「は～い！」
そう言われると同時に、クラス中がいつもの仲良しメンバー同士で寄り集まっていく。
あたしはみんなの勢いにのまれて一瞬固まってしまっていた。早いトコロはもう3人組確定してドコに行くかで盛り上がっている。
やばい、完全に出遅れてしまったぁ～～
「ヒ～メ、一緒に組もっ」
「レイ～～」
「ちょ、ちょっと、息ができない…」
「ご、ごめん！」
「もう、抱き着かなくてもいいじゃん。あやうくアンタの起伏のない胸の中で窒息死するところだったんだから！」
この際ぺちゃぱいをバカにされたことなど気にならない。
「やっぱ持つべきものは親友だぁ！！」
「おおげさねまったく。で、もう一人誰にしよっか。」
「もう誰でもいいよ～レイにまかせる～」
「ホッとしすぎでしょアンタ。まぁフツーに考えたら女バスの誰かってことになるけど…」
周りを見渡すと、クラスの中でも飛びぬけてキャーキャーうるさい

一団が目についた。このクラスで一番目立ちたがり屋のギャル集団、通称「ギャルキュア」だ。わりと校則を守っている子が多いウチの学校の中で、金髪ありカレシ複数ありへそピアスありの5人組だ。

その中にアカネが混じっていた。たぶんあそこで3人×2で組む魂胆だろう。

「なんかあの中だとアシンメトリーヘアーのアカネが清楚に見えちゃうね。」

「そうね…」

気を取り直してまた物色していると、こんどは逆にほんわかした空間を見つけた。そこにはミスズと、彼女に負けず劣らず優しい雰囲気の2人組、「文芸部シスターズ」である。

ちなみに彼女2人はそれぞれテニス部とソフトバレー部でレギュラーとして目下活躍中であるが、その知的なメガネ姿でいつも2人で談笑をしている風貌から、誰ともともなくそう呼ばれている。

せっかく人数ぴったりのグループができあがってるのにジャマしたら悪いので声をかけるのをあきらめた。

「ていうかみんな女バス以外にも友達いるんだね。」

「いやそれくらい当たり前でしょ。ヒメが女バス5人っていう状況に甘えすぎ。言っときますけど、アタシだって他にも候補になる子くらいいたんだからね?」

「はい、レイ様にはいたく感謝しております。」

そんな時、起死回生の天使のような声がかけられた。

「ヒメちゃ〜ん一緒のグループにならない?」

「え、あたしでいいの?」

「うんあたし達2人しかいなくて困ってたんだよね。」

「えっ…でもあたしらも2人だからムリだわ、ごめんね。」
せっかくのチャンスだったが彼女たちの方も別れる気はなかったらしく、断念した。

その後も声をかけてくれる子はいたが（ちなみに全部レイの友達）、人数が合わなかったりあたしが全然話したこともない子達だったりで決まらずにいた。
「やっぱこういうのって難しいね。あと残るはサアヤくらいだけど、見当たらないなぁ…」
「そうだねぇ。でもあの子かわいいから今頃ひっぱりだこになってるかもよ?」
「それもそっかぁ。そうするといまだに机で一人座ってるような子を誘うしかないかなぁ。まぁアタシは誰とでも仲良くできる自信はあるけど。」
「あたしもこの機会に新しい友だち作ろっかな。あれ、でもそんな子いないよね?ていうか他のとこは3人組できてるみたいよ?ウチのクラスの女子は18人だから余るはずないんだけど今日誰か休んでたっけ?」
「いや今日は全員出席してたはずだよ。おかしいな~。ってうわぁ!!」
何気なく窓の外を振り返ったレイは急に大声を出した。

あたし達は今までクラスの隅の方から見渡していたのでてっきり全員が見えていたと思ったが、実はすぐ後ろにもう一つ席があったのだ。

そしてそこに座っていたのは…

「サアヤ!」
「どうしたの、一人でそんなとこ座って。」

「そうだよ友達のとこ行ってグループ作んないと。」
「だってあたし友達いないし。」

沈黙。

「そ、そっかぁ～。じゃあアタシたちと一緒に組もうよ！ちょうど一人足りなかったとこだし。」
「そ、そうね、友だちいない同士仲良くしよっか！」
「あんた達誘われてたの見てたから」

再び沈黙。

「も、もうそんなこと言わないで同じ部活の仲間同士仲良くしましょっ。」
「そ、そうよ！改めてよろしくねっ☆」

そのあと必死でなだめすかしてなんとかクラスで最後の3人組となったのであった。

「よし、全員出発時間間に合ったようだな。」
「は～い」
「お前たちパスポートは持ってきたかぁ？」
「は～い」

聞いて驚くことなかれ

なんと我が翔泉高校の修学旅行先とはずばり、アメリカなのである！！！

「これから飛行機に乗るわけだが、その前に手荷物検査と身体チェックがある。金属製のモノを持ってる人は事前に出しておくように。」

先生そのセリフ、学校で１０回は聞いたっつうの。今さらそんなの引っかかるやつなんていねえよ。

ピッピーー

ん、なんだこの音？

なんかゴッツイおっさんがわらわらと出てきたぞ？

あっそうか、誰かが金属検査でひっかっかったのか。バカだなぁ、誰だ誰だ？

ってオレぇ!?

いやいや何も怪しいものなんか持ってませんけど!?

「Ｈｅｙ!Ｙｏｕ　□●☆%♪＊△」

やべぇ、ナニ言ってんのか全然わかんねえ!なんだよ、ポケットの中身出せっていってのんか?なんにも入ってないっつうの!

あれっ?

なんだこの固い感触。

え〜〜なんでバターナイフが入ってんだよ?

今日の朝飯の時に間違えてそのまま持ってきちゃった??　いやありえないありえない!大体今日の朝飯はゴハンに味噌汁に納豆っていうザ・日本食だったし!

「って、ちょ、ちょっとドコ連れてくんだよ?」

ちっ、ゴツイおっさん達がオレをどっか取調室的なとこへ連れてこうとしてやがるっ

「だからオレのじゃないっつうの」

いや、そんな言い訳が通用する相手じゃないな。っていうかバターナイフじゃたいして悪いことできないし！

「ノーノー！イッツバターナイフ！！」

パンに塗る動作を繰り返し、身振り手振りで必死でただのバターナイフであることを説明する。

ふ～ようやく分かってくれたみたいだぜ。バターナイフは没収されたけど別にいいだろ。

しかしこの珍事、犯罪の臭いがするな。犯人はいったい『どうやって』オレのポケットに入れたんだ？いや、それより問題なのは『誰か』だ。

犯人は意外と速くに見つかった。ほとんどのやつがあきれ顔の中、大爆笑しているヤツが約１名。

ミ～ノ～ル～め～～

「お返しじゃボケェ！！！」

オレの渾身のドロップキックは見事にミノルに的中し、見事に復讐を果たすことができた。

そのせいで、さっきのおっさん連中にまた連行されたのだが後悔はしていない。

サイトシーイング姫

「うわぁスゴイ、みんな英語で話してるぅ～」
「見てあそこ、ゴリマッチョの黒人と金髪美人のカップルだぁ！」
「あんた達バカね、アメリカなんだから当たり前じゃない。一緒に歩いてると恥ずかしいからもう少し離れててくれる？　あっ、ジョニーデップ似の超絶イケメンはっけーん！え、えっとエクスクーズミー！！」
「アカネ、あんたが一番恥ずかしいよ。。」
「アイムジャパニーズビューチフルガール！　えっなんか言った？なによ、そろいもそろって暗い顔してぇ。せっかくの海外旅行なんだからさぁ、そんなおとなしくしてないで楽しみましょうよ！あっ今度はブルースウィルス系のシブいおじさまよっ☆」
「よし、後始末はヒメに任せたっ」
「ちょっレイ、どこ行くのよっ。もう！」

「ふ～。アカネ、せっかくの旅行なんだから景色とか見ようよ。」
「景色なんか見たって1ドルの得もないっつうの！」
「イケメン見てても結局お金にはならないと思うけど。むしろ訴えられたらマイナスだし。アメリカって裁判王国とかって言うし気を付けないと。」
「バカね、言葉のあやよ！しかもなに裁判とか。あんたデカいくせに細かいこと気にしすぎなのよ」
カッチーン！小泉ヒメ、マジでキレる5秒前。

「そんなこと言わずにさ。ほら、ニューヨークってこんな高くてオシャレなビルがいっぱい並んでるんだよ？」
「ビルなんて東京とか大阪にでも行ったときに腐るほど見れるじゃない！！でも白人イケメンは海外旅行中の今しか見れないのよ！？」

田舎育ちのあたしにはビルも十分貴重なんだけどな。これはよっぽど目を引くものを見つけないとダメだなこりゃ。

「あっ、自由の女神見えてきたよ！うわ、こんなに大きいんだぁ。ほらあの左手の方。アカネも見たらビックリすると思うよ？」

「そうね、アンタにとっては何かを見上げるってことは珍しいかもね。」

キレちゃダメだキレちゃダメだキレちゃダメだキレちゃダメだ

「あっでも自由の女神も近づいたらヒメより小っちゃかったりして。」

小泉ヒメのＡＴフィールド崩壊。

「さっきからおとなしく聞いてりゃ好き放題言ってくれおって！」

「ど、どうしたのよ急に？」

「だまれこの不揃いヘアー娘！」

「は？もしかしてアタシのアシンメトリーヘアーｄｉｓってんのそれ！？」

「そうに決まってんでしょうが！今すぐ長い方むしりとったろか！！」

「アンタみたいなもっさい女には分からないでしょうけど、これが最新のオシャレだっつうの！ていうか人の外見バカにするとかサイテー。」

「どの口が言っとるんじゃボケぇ！さっきから散々自分が言ったことはもう忘れてんのかっつうんだよ。異国に来てどんだけ浮かれとるんやっちゅうねん！」

「えっ？えっ？」

「さっきから吐いた暴言のことについて今すぐ謝らんかいっつってるんじゃぁ！！！」

「ご、ごめん、なんか言い過ぎたみたい。反省する。」

「分かればええねん。」

「ヒメさっきから何大声出してんの!?クラスのみんなだけじゃなくて周りのアメリカ人もドン引きしてるよ?」
「だからそれはこの女が悪いんじゃ。」
「なにそのキャラ、そんなヒメ今まで見たことないぃ…」
「こんなのいつも通りのあたしじゃあ!　…ってあれ?」

怒りも収まってようやく素に戻ったあたしは、さっきまでの一連の流れを瞬時に振り返る。

振り返るとともに顔が熱くなってくる。

とてもじゃないけど今は顔なんてあげられないよぉ。

結局その後は一度もニューヨークの街を眺めなかった。

どうやら舞い上がっておかしくなったのはあたしの方だったみたいだ。

反省したアカネとレイが隣で一生懸命街の様子を話してくれているのだが、一向に耳に入らなかった。

見え張り王子

今日は待ちに待った自由時間の日だ！ミノルとアキヒトと一緒に自由の国アメリカを満喫するぜ！

しかし実はこの3人だけではない。誰が決めたか知らないが、女子とも合同なのである。

「ってまた例によっておまえか、どうして毎回そうやってオレと一緒にいたがるわけ？」

「はぁ？くじ引きだからしょうがないでしょうが！言っときますけどあたしの方がアンタの１００倍飽きてるんですけど！」

「オレはその１００倍だね！」

「あたしはその１００倍だっつってんでしょ！」

「もう旅行先でまでイチャつかないの、お２人さん☆」

「イチャついてなんかな～い！！」

そんなこんなで6人で観光しているとなにかを見つけたのか、ミノルが急に走り出した。

「さすが本場アメリカだな。こんな街中にバスケのリングがあるぜ！」

「おっいいねぇ、体動かしたくてしょうがなかったんだよね。しかもこんなこともあろうかとボールもってきてるんだなぁこれが。これはやるっきゃないな！」

「ちょ、ちょっとタイガ、ミノルまずいよぉ」

「ナニ言ってんだよアキヒト、ほんとはおまえもやりたいって顔してるぜ！」

「そうだぞ、そんなんじゃ副キャプテン失格だぞ！」

「アタシもやりた～い！」

「いいねぇレイちゃん、そうこなくっちゃ！」
ちなみにサアヤちゃんは荷物を降ろしていち早く臨戦態勢である。

「ほら、ヒメも来いよ。」
「え～勝手にやっちゃまずいんじゃない？」
「ダイジョブだって。さては久しぶりにオレら男子とやるっていうんでびびってんだろ？」
「そ、そんなわけないじゃない！いいわよ、相手してやろうじゃないの。」
ちょろいなぁ。

そんなわけで修学旅行先で急きょ３ｏｎ３が始まった。

オレがシュートに行こうとしたときサアヤちゃんにブロックされてしまい、ボールはゴールとは逆方向に転がって行った。

「おーい、タイガ早くボール取ってこいよぉ。」
「わぁってるよ！　あっ」
顔を上げるとそこにはボールを持った黒人の外国人が立っている。
というか今はおれらが外国人か。

「わりぃ、ボール取ってくれないか」
って日本語で言っても通じるわけないか。とりあえずボールを指差して、パスしてくれというジェスチャーをする。
しかしその黒人は指先で「来いよ」と合図した後、おもむろにドリブルをしてこっちにつっこんできた。

へっ、なんだコイツもバスケットマンか。日本人なめるなよ、ゼッテー止めてやる！

えっ？

気づいた時にはオレの左側を通り過ぎて、ソイツはそのままゴールに向かっていた。あわてて追いかけようと振り向くと、同じように驚いて突っ立っている他の５人を華麗にかわし、そのままボールをリングにたたきつけた。

しばらく呆然としていると後ろから笑い声とともに英語が聞こえてきた。さっきの黒人とは別に、白人２人がこっちを見ている。

「やべえ全然わからねぇ。アキヒトなんて言ってんだ？」

「う～んたぶんだけど、『なんだ日本人なんてこんなもんか、へたくそはさっさとどいてろよ。』って感じのこと言ってる。」

するとさっきの黒人があとの２人に近づいてなにやら話している。それからこっちを見て言った。

「『３ｏｎ３でやろうぜ。せっかくだから相手してやるよ。その代りに負けたらそこの女の子達とデートさせろ』だって。」

「上等じゃねぇかやってやるよ！　…って伝えてくれ。」

「タイガなんかかっこわる。」

「うるせぇ！」

こうしておれ達は急きょ３ｏｎ３の国際試合をすることになった。

ぜってぇまけねぇ

ど、どうしよ～

タイガたち絶対勝ち目なんかないじゃん。さっきダンクした黒人がうまいのはもちろんだけど、あとの2人もなんか雰囲気あるし片方なんか2mありそうだもん。

「タイガ達だいじょうぶかな？」

「わかんない。でもとりあえず応援しなきゃ！」

先攻は外国人チームみたいだ。一番小さい金髪の彼（といっても180はありそうだけど）がガードみたいだ。自分からドライブで切り込んでいってうまくディフェンスを崩している。2m巨人は当然のごとくセンターで、あたしだったらあの威圧感だけで止めようとする気力すら持てそうにないな。

どうやらあの黒人はフォワードらしく、彼にボールを集中して攻めてきている。それにしてもパスを受けてからドリブルにむかうまでがすごくなめらかだ。正直そのプレーをずっと見ていたいと思わせるくらいだ。

「あ、タイガまた抜かれた。」

ガシャッ！

リングがもう古いのか、ダンクを決めると体育館よりも大きな音が鳴り響く。なんだかそれが一層強そうに感じさせられる。それに比べてこっちでダンクできるのは180後半のミノルくんぐらいかな。でも2m巨人が相手だとシュートするのも一苦労みたいだ。

「うわぁまた決められた。かろうじて勝負になってるのはアキヒトくんぐらいだけど、彼は点取り屋ってわけじゃないし厳しいかも。これじゃ勝ち目ないなぁ、そろそろデートどこに行くか考えなきゃ。アタシはあの金髪くんがいいな、ちょっとイケメンだし。」

「もう何言ってんのレイ！こんなニューヨークのど真ん中でどこの誰ともわからない外人となんて怖くて歩けないよ！」

「アタシが代わりに相手してくる。」

「サアヤも落ち着いて！さすがにアレの相手は厳しいよ。ここはアイツらを信じるしかないよ。」

でもあのアメリカ人３人、デカいだけじゃなくて小技もうまいんだよな。うわっ、２ｍ巨人がスクリーンかけてタイガふっとばされてる。

ドガシャッ！！

…やっぱダメかもしれない。

枕投げ王子

あの黒人の名前なんって言ったっけ、忘れちまった。結局オレは一回も点決めれなかったし。くそっ、フォワードとしてまだまだ実力が足りなすぎる！最近は実力ついてきたかなって思ってただけに余計へこむわ。しかも「デートは冗談だよ。キミたちを本気にさせるためだけさ。」とか完全にバカにされてたんじゃねぇか！でも実際本気だったとしたら責任とれなかったわけでもあるんだけど。しかもあん時勢いでアンナコト言っちまったし…　うわ、思い出しただけで頭ん中ワ――ってなる！！もういっそオレを誰か穴に埋めてくれっ

「くらえ！」
「ぶへぇっ。ってぇなにすんだよミノル！」
「なにって決まってんじゃんか、修学旅行の夜っつったらまくら投げっしょ。」
「今そんな気分じゃないんだよ！アイツらにボロ負けしたおかげではらわた煮えくり返ってるんだ。静かにしててくれ！」
「もうそんなこと今考えてもしょうがないじゃんか。帰ったらまた死ぬ気で練習する。とにかく今は楽しもうぜ。」
「ほんとオマエはのん気だよなぁ。ったく、うらやましいぼほっ」
「タイガ、まくらはドコから飛んでくるか分からないんだぜ？」
「リョウスケ、なんでここにいんだよ？」
「部屋のヤツら女子んとこ遊びに行っちゃってヒマなんだよ。ということでオレも混ぜてくれぃ」
「オマエも行ったらいいじゃないか。」
「オレはバカ騒ぎがしたいの！ってわけで負のオーラ出しまくってるタイガには罰として集中砲火の計だ。ミノル隊員、アキヒト隊員、部長命令で攻撃を許可する！」

「アイアイサー！」
「職権乱用だろうがテメェ―！！！」

もうこうなったらやけくそだ、徹底的にまくら投げ込んだる！

「くらぇべへっ、げほっ。ちょ、ちょまって、３対１はヒキョーだろ！」
「問答無用！」
「ちっ、今日はふんだりけったりだな。だいたい、なんでアメリカ滞在の最終日が『旅館』なんだよ！昨日まではふかふかのベッドルームだったつうのに！」
「そんな細かいこと言ってるから今日も一人だけ無得点なんだよ、へたれフォワードが！」
「くやしかったらまずはオレらに枕ぶつけてみろよ、なんだ、シュートも外れりゃまくら投げも当たらないってか？？」
「もうあったまきた！お前らがそうくるなら容赦しねぇぞ！？　く～ら～え～！！！」
「オイバカっ、ふとんは投げんじゃねえよ！」
「うるせぇ！」

バキッ！

リョウスケ達がとっさによけたのでオレが投げたふとんはその後方へ飛んでいく。そしてそこにあったのはふすま、だったモノ。そう、ほんの数秒前までは『部屋のしきり』という役割をはたしていたモノ。

そのあと先生たちの部屋で正座させながら４人仲良く説教をくらったのはいうまでもない。

「明日でもうアメリカとおさらばか～。」
「なんかあっとういう間だったですわね」
「そういえば後輩になんにもお土産買ってなくない？」
「ホントだ、自分たちの分は行く先々で探してたんだけどね～。まぁ空港でテキトーにそれっぽいお菓子とか買っとけば大丈夫っしょ。」
「もう、レイセンパイヒド～イ。でも実際そうするしかないよね。アハハ」

イロイロあったアメリカ旅行も明日で終わり。今はレイ、サアヤ、ミスズの女バスメンバーで部屋でのんびりまったり雑談中というわけだ。
ちなみにアカネは別の部屋でお楽しみの最中だ。あっ、変な意味じゃなくてね、たぶん…

「あーもうサイテー！！！」
ウワサをすれば、当人が真っ赤な顔して登場した。
「ど、どうしたのよアカネ」
「アイツ絶対呪い殺してやるっ！レイ、帰ったら二度と男バスと練習なんかやめましょ！いえそれくらいじゃ気が済まないわ。あたし達へのセクハラ疑惑でもなんでもでっち上げて廃部にしてやる！」
「ちょ、ちょっとまず落ち着いて。なにがあったのか順番に説明しなさいよ。」
「これが落ち着いてなんかいられるかっつうの！カズキのやつが浮気したのよ！？」
「うそっアンタ達付き合ってから2人ずっとラブラブだったじゃない！？」

「アタシだって信じられないわよっ！でも見ちゃったんだもん。」
「何を？」
「浮気現場に決まってるじゃない！！アタシの目の前で他の女とキスしてやがったのよアイツ！ふざけんじゃないわよ、元はと言えばあっちから急に告白してきたクセに生意気に浮気なんて…これだからオトコって生き物は！」

アカネの方だってリョウスケくんにフラれた後に彼氏候補の2番目だったとか言ってソッコーで切り替えた、ってことはこの際言わないでおこう。「そんな昔のこと覚えてないし！」とか逆切れされるのがオチだ。

「あー今思い出しただけでもムカついてきた！！　ちょっと！気晴らしにアンタらの恋バナでも聞かせなさいよ！」
「そ、そうね、それがいいわ。ねえサアヤ、最近イシちゃんセンパイとはどうなの？デートとかドコ行ったりしてんの？」
「別れた。」
「へっ？」

サアヤ様は今なんとおっしゃられた？
「へぇ～『ワカレタ』ってお店に行ったんだ。タノシソウダネ～」
「ちがう！彼が部活引退してから会ってない。」
「それって部活終わってヒマができちゃったから他の女の子に目が行っちゃったとかぁ？」
「そんなんじゃない！彼がアタシのバスケジャマしないようにって言われてフラれた。どっかのバカと一緒にしないで！」

やめて～、この流れだと『バカ』はカズキくんにしか聞こえないよ～。ってあたしの質問もまずかったんだけど。

でもここでくじけちゃダメよヒメ！こうなったら話題転換。とういわけで最後の砦、ミスズに頼るしかない！

「ミスズは例の他校の殿方とはどうなってるの？ほら、付き合ったって報告しか受けてないしぃ、今までどんなおつきあいされてたかくわしく聞きたいなぁ～なんて」

「あら、それならわたくし達とっくにお別れいたしましたわ。」

うっそ～ん、ミスズまで！？しかもこの子もすでにご機嫌ナナメ？

「それは一体全体どうしてでありますか？」

うわぁあたしテンパってどんどんナゾな口調になってますよぉ。しかも誰もツッコミもしてくれないのが余計にツラい。

「それは触れないでいただけます？」

え～～まさかのタブー！？ふだん温厚なミスズがムスーっとしてるよ。今彼女の周りにセリフを入れるとしたら「プンスカプンスカ」って感じだな。なんかかわいいっ、って言っとる場合かー！！どうしよう、このピンチをどうやって切り抜ければいいんだ～～

よりによってなんで誰もうまくいってないんだ！？しかもレイはとっとと会話から逃げてマンガ読んでるし。こういう時はいつだってあたしが話しの進行役、というか一身にとばっちりをくらう役。あたしは爆弾処理班じゃないっつうの！

「なんなのよもー！辛気臭い話ばっっっかり！！！こうなったらヒメ、アンタ今からタイガくんとこ行って告ってきなさい！」

「はい！？」

「あんたら見てるとイライラすんのよね。クラスでも部活でも一度からむと止まんないし。しかもヒメなんて明らかにキャラ変わるじゃん。いい加減くっつきなさいよ！」

「だからぁ何度も言ってるけどあたしはアイツのことなんとも思っ

ちゃいないっていないのよ？」
「ごちゃごちゃ言ってないで今すぐ王子のとこへ行ってこーい！」
「人の恋路に首を突っ込む暇があったらご自分こそ行動してはどうですの？」
「早く行けトンマ」

いつの間にかミスズとサアヤまで『そっち側』の人間に！？今日のあたしはどれだけの地雷を踏んでるっていうのよ～

「まぁまぁ皆さん落ち着いて。」

え、レイさん今さら助け舟？？いえ、この際いままでの態度なんて言ってられないわ！この窮地を乗り切るためだったらなんでも大歓迎よっ

「このマンガおもしろいわよ。主人公の女の子はすごくカワイイんだけどもうこれがカワイソウなくらい男運がなくって笑えるの！付き合う人付き合う人にいろんな理由をつけられてはフラれていく、って物語なんだけど。読む？」

その言葉を聞くと3人はあっという間にレイからマンガをふんだくった。とんでもなく不幸なストーリーに惹かれたのか、仲良く3人で読みふけっている。

「ふぅ、助かったわレイ、あなたはあたしにとっての自由の女神よ。」
「ありがとう。これもキャプテンの務めかしらね。それにしても『部活外恋愛禁止令』なんて失敗だったかしら。もうメンドクサイか

らいっそ自由恋愛にしちゃおっかな～」
「本気でその方がいいかもね。」
「ま、それはまた後で考えておくわ。それはさておき、実際どうなのよ？」
「「どうなのよ？」ってなにが？」
「タイガくんよ、タ・イ・ガ・く・ん。アカネじゃないけど、修学旅行って正直告白する絶好のタイミングだと思うんだけど？」
「もう、何言ってんのよ！あんなの一度もイイなんて思ったことなんてないっつうの！！」
「でも今日の３ｏｎ３の時、アタシはちょっとドキっとしちゃったかも。勝負のあとにいきなり「オレのこと好きなだけ殴っていいから、その代わりコイツラに手を出すのは勘弁してくれ！」って言うんだもん。しかも日本語だから相手に通じてないのにね。そういうとこが彼らしいっちゃ、らしいけど。ねぇ、タイガくんかっこいいとか思っちゃった？」
「それはまぁちょっとは…」
「ほらやっぱりね！いい加減素直になりなよ？高校生活だってもう半分終わちゃってるんだし。」
「だからそれはあのセリフに対してってだけで！」
「そんな大声出したらあの３人に聞こえちゃうよ？でも、また追い込まれて『告白させられに行く』ってつもりなら止めないけどね～♪」

その日、アカネ達が例のマンガの感想で盛り上がる声が止んだ後も、あたしはなかなか寝付けなかった。

帰ってきた王子

やっぱ部活の練習用Tシャツ着ると『帰ってきた』って感じするよな。旅行中はイロイロあったけどとりあえず今日からまたバスケに集中しよ。

「あれ、カズキ、その胸の傷どうしたんだ？まさかアカネちゃん襲おうとしてひっかかれたとか？？」

「ち、ちげーよバーカ！！これは飼い猫にひっかかれただけだっつうの！」

「ふうん、そうなのか。」

「センパーイ、おかえりなさい！待ってましたよ～～」

「おう、どうしたんだエイジ！？あっお土産か？悪いけどオレはおまえらの分買忘れちまったんだけど。」

「そんなんどうだっていいっすよ！帰ってきてくれただけで幸せっす。」

「なんだよ、そういう風に喜ばれると逆に気持ち悪いんだけど。」

「別にどう思われたってかまわないっす！とりあえず皆さんお帰りなさいっ！」

「お、おう…」

なんでエイジはぼろぼろ泣いてるんだ？そんなにオレ達がいなかったのが寂しかったのか？？

「あっセンパイ方おかえりなさいっす…　あっ」

「ちょ、ちょっとどうしたアキラ！なんで急にオレに倒れてきてんだよ？バカっ抱き付くんじゃねえよ！！」

「なんだなんだ？いつから男バスはＢＬ部になったんだ？」

「いや、これには深〜いワケがあるんですよ。」
「おうマコト、これがどういうことかオレ達に説明してくれっ」
「いや、ちょっとオレもダメージでかくて。正直あんま思い出したくないっす。」
「そ、そうなのか。そういえばカツヒサが見当たらないみたいだけど、どうした?」
「風邪です。」
「またかよ!偉そうな態度してる割に意外とアイツ体弱いな。」
「いや今回ばっかりはアイツを責めないであげてください。」
「どういうことだ?」
「実はセンパイ達がいなかったこの一週間、『いつもと同じメニュー』をこなしてたんすよ」
「いつも通りなら問題ないじゃねえか。」
「1年は男女合わせて7人ですよ?」
「それくらい知ってるっつうの!いいからそうなってる原因をサッサと言えよ!」
「2メンドリブルとか全員でローテーションしてくメニューあるじゃないっすか、アレも『いつも通り』なんすよ?」
「さっぱり話しが見えないんだけど?」
「えっと、つまり、うっ」
まじかよ、マコト吐きそうみたいじゃねえか。いったい1年はそろいもそろってどうしたっつうんだよ?

「もしかしてさぁ」
「うん、なにか分かったのかリョウスケ?」
「いやまさかとは思うんだけど、『いつも通り』ってことは2メンとか休みなしで延々と7人でやってたってことか?」
「はい…」
「マジかよ」
「そんな全員おかしくなるくらいだったら少しは加減しろよ!おま

えらバカか!?」

「誰がバカだって?」

あれ、なんで男バスの部室で女の声がするんだ?

あっもしかして…

「練習させたのは私だよ。なんか文句あんのかい?」

「いえ、なにもありません黒谷先生サマ!」

「せっかく2年がいない環境だったしたまには1年にもノビノビとコート使わせてあげないとね〜」

ヤバイ、口元は吊り上ってて満面の笑顔なのに目だけが笑ってない。

「ほら、ウチって男女とも人数少ないからさ、体力だけはありすぎて困ることないじゃん?こういう時におもいっきり動いておかないとね☆」

「その通りです。さすが先生。」

「ありがとさん☆でも1年生はこの一週間みっちり走らせたからさすがにバテテんのよね〜だから今日くらいは休ませてあげようと思うんだけど、どう思うリョウスケキャプテン?」

「とってもスバラシイ判断だと思います。」

「やっぱりそう思う?それじゃ2年生だけの部活にけって〜い♪というわけで1年生は今すぐかえっていいよ〜」

「はい!」

1年生達の入部してから一番の「はい!」を聞いたぜ。

「さて、みんな分かってると思うけど、」

ごくっ

「アンタラ私のこと忘れるくらい心も体もなまってるみたいだから今日は徹底的にしごいてあ・げ・る♪」

「う、うっす…」

次の日、2年生も1年生と似たような状態に陥ったのは言うまでもない。

仲良くみんなで眠り姫

はぁ、今日は疲れたぁ～。修学旅行から帰ってきた日だっていうのに、いきなりハードな練習が始まったんだもん。しかも一週間のブランクがあるにもかかわらず、むしろ旅行前よりもハードなメニューになっていたのは気のせいだろうか。黒谷先生が練習中、ずっと満面の笑みでしごいている様子はなんだかゾッとするものがあったな。なにかイイことでもあったのだろうか？それとも逆にアレは機嫌が悪かったのか。

まぁそんなことどうでもいいや、今はただ眠ろう…

「おはよう、昨日はキツかったね」
「ほんとほんと、アタシ全然寝足りないんだけど。」
「あたしもぉ～。ふぁ～」

今日は一日、やたらとバスケ部の面々が授業中に居眠りを注意されるのが続いた。先生たちは「お前たちまだ旅行気分が抜けきってないのか？」なんて言うけれど、それはほんとの理由を知らないからだ。

そしてついに爆発する先生が現れた。それは5時間目のこと。お昼ご飯を食べたあたし達は一層深い眠りにつくのであった…

バシッ！

「いったぁ！」

「「いったぁ」じゃない！なんじゃその態度は！！起きんかぁ！」
まわりを見渡すと、バスケ部のみんなは同じく頭をはたかれた様子だった。タイガなんか頭抑えた恰好のまま寝ちゃってるよぉ。
「おまえらバスケ部はそろいもそろってワシのことなめとんのか！廊下へ立っとれ！！」

その日、生まれて初めて廊下に立たされるという経験をしたのだが、あまり記憶がない。だって寝てたし。

「ふぅ、ようやく眠気が飛んできたかも。」
「アタシも。それよりなんかクラスメイトの視線が痛いんだけど…」
「あんだけ居眠り注意で授業の妨害されりゃあねぇ。×１０だからそりゃイライラするよね、途中でもうあきらめちゃった先生もいたくらいだし。ほら、もうさっさと『仲間』だけの部活に行っちゃお。」
「さんせ～い」

「よし、今日も張り切って部活やりまっしょう！！」
「先生ゲンキですね。」
「なによ、そういうアンタ達はみんな沈んだ顔してどうしたの。バスケが楽しみじゃないの？」
「いやそりゃ楽しみなんですけど…」
「だったらそんな辛気臭い顔してないで、まずはコートラン行ってみよー」
まったく誰のせいでこんな顔になってると思ってるんだ。

次の日はさすがに一日爆睡ということはなかったが、この『バスケ

部眠りの乱』はしばらく続くのであった。

3×3王子

毎日の怒涛の練習に明け暮れていたら、夏休みは目前に迫っていた。
夏休み前に配られた練習の予定表には3日練習するごとに1日休みがある。
「なんだ意外に休み多いじゃん！」
「先生こんな練習の日程で大丈夫なんすか？」
「あんた達のん気だねえ。夏休みが終わった時にも同じセリフを言えたら褒めてやるよ。」
そう言った先生はまた楽しそうな、しかし段々彼女の性格を知り始めたオレ達にとっては悪魔の微笑みにしか見えないキレイな顔をして言った。

夏休み中は意図的なのか知らないが、女子とは練習時間がほとんどかぶっていなかった。そのため黒谷先生はずっと付きっきりである。
軽く全員でアップを済ませると、
「３ｏｎ３をやってもらう！」
そう言って黒谷先生はパッパとオレ達を3組ずつに分けた。
黒谷先生はチーム分けをすると練習時間だけを告げて、マコト、カツヒサ、アキラを連れてどこかへ行っていしまった。あの3人だけ秘密特訓でもするのだろううか？
そんなことは置いておいて、自分のことに集中しないと。
オレはアキヒトとミノルとの組になった。

相手はリョウスケ、エイジ、カズキだ。コッチとは違って全員がスコアラーだ。マークを外したところからあっという間に点を取られてしまった。

今度はこっちの番だ！と、景気よく行きたいところだが世の中そんな甘くない。なんたって相手のリョウスケはウチの攻守の要だ。ディフェンスも相当厳しくくるからアキヒトは苦労している。オレが近づいて早くもらわないと…

ダッ

えっアキヒトが強引に突っ込んでいった！？

その意外な行動に相手よりも先に対応したミノルがボールを受け取り、シュート。

「ナイスアシスト、アキヒトっ」

「ありがと！」

「おいおいアキヒト、いつの間にそんなスタイルになったんだ！？」

「3人じゃオレも普段より積極的に攻めていかないとね。ストリートバスケの時の金髪くんがいい見本になったから。オレもそろそろ一皮むけないとと思って参考にしてみたんだ。」

その後のディフェンスでも、いつもは堅実的な守備をするアキヒトが何度も飛び出しにかかって相手のリズムを崩したのか、スティールに成功した。

「タイガ、今度はボーっとすんなよ？オレをちゃんと見てろ。」

なんだ?ミノルまで柄にもないこと言い出して。

アキヒトからボールを受け取って勢いよくドリブルしたはいいが、目の前にリョウスケとエイジが立っている。

ダメだ、完全にシュートコースふさがれてる!

その時ミノルがエイジの横からスッと現れた。

あっ、これならイケルかも。

ミノルを壁にしてエイジの方から強引に切り込んでシュートした。

よしっ、とりあえず初得点。

それにしてもミノルからは考えられないくらい完璧なタイミングと場所でスクリーン決めてきたな。あっ、あれは2m巨人がやってたプレーに似てるかも。ミノルもジャンプバカだけじゃなくなってきたみたいだ。

「すげぇなお前ら、なんかいつの間にか別人みたいじゃん!」

「あのアメリカ人達に刺激を受けたのはお前さんだけじゃないってことよ。」

「タイガは自分のことで頭いっぱいでオレらのことなんて全然見てないもんね〜」

まったくだ。

この2人も決して悔しくないわけがなかったのだ。

そういえば修学旅行から帰ってきてからは鬼のようなキソ練習や体力系メニューばかりで、試合形式のことなんて何もしてなかったな。

ここにきてその成果が爆発中といった感じだ。

その後もひたすらそのメンバー固定で３ｏｎ３が続いた。

今日の練習が終わった時、ようやく別メニューをしていた3人が帰ってきた。

なにをしていたのか知らないが、信じられないくらいの汗をかいている。いったい何があったっていうんだ?

きっと、キソ的な練習をひたすらやらされてたんだろうな。やっぱ補欠組は大変だな。スタメンになれてつくづくよかった～～

次の日はマコト達を相手に、ひたすら３ｏｎ３を繰り返して終わった。その間、今度はリョウスケ達がどこかへ消えて、練習を終えるころにはやはり死にそうな顔をして戻ってきた。

しかし、彼らがやつれた原因は、オレも次の日にイヤというほど知ることになる。自ら身を持って体験することによって。

その内容については、聞かないでくれ…思い出そうとするたび、いつかのアキラみたいになりかねない。とりあえず昨日までの３ｏｎ３がいかに天国の時間に感じられたかということだけは言っておこう。

ダイエットに付き合わされる姫

夏休み一発目は午後からの練習だ。すれ違いざまに男子に会ったけどタイガ達は疲れた様子もなくすっごく盛り上がってる。対照的に、1年生のうち3人が死にそうな顔してるんだけど何があったんだろう？

ま、男子は男子、女子は女子。ってことで、今から練習だぁ！

「女子は今日から5対4やるからね～」

なんだそれ？初めて聞く数字なんですけど。

「先生、ウチら8人しかいませんよ？」

「もしかしてマサミくん練習に参加させるんですか？」

「ムリっすよ～。オレバスケなんて見てるだけでおなかイッパイっすもん」

「だいじょうぶ、やるのは私だよ。」

えっ？

「いや～最近ちょっと二の腕のたるみとか気になってきてねぇ。」

「あ～そうなんですか～」

誰も表立ってノーとは言えない。「そんな軽い気持ちでバスケやらないでください！」なんて、絶対無理だ。

「チームは2年対1年とアタシで。」

しかも先生は人数少ない方！？

大丈夫なんだろうか？途中でぶっ倒れたりしなきゃいいけど。

そんな心配も、最初の1プレーで見事に吹っ飛ぶのであった。

黒谷先生がどうやらガードの役目を果たすみたいだ。ボールをもった瞬間、1人で突っ込んでさっさとあたし達をかわしたかと思うと、一人でシュートを決めてしまっていた。

「なにそろいもそろって突っ立ってんの?言っとくけど4人の相手なんかに負けたらインターバルの間走っててもらうから。」

なんだその理不尽な罰ゲーム!?
いや、でも言っても相手は4人。そうそう負けるなんてことはないよね。

しかしあたしの考えは甘かった。とんでもなく甘かったのだ。

黒谷先生の突破力は並みではなかった。
さっきはレイたちも油断したんだろう、黒谷先生がまさかあそこまで動けるなんて誰も思わないもんね。

どうなってるんだ!?どうして2対1でマークしててあんなにあっさりと抜かされるんだ?

いっこうに止められずにいるこの状況に、レイもあせっていた。
「もうしょうがない!3枚付くよ!」
捨て身の作戦だがどうにかして先生の動きを封じないことには話にならない。それに、これならパスも簡単には出せないはず。

しかし先生の足は止まるどころかさらにドリブルのキレは増し、一瞬で一人を振り切るとその隙間からヒナにパス。当然誰にもマークされてないヒナは悠々とゴール。

なにこのチート的存在…

ディフェンスの時もその例外ではなかった。レイとアカネが2人ともいいように抑えられている。そのせいでシズクはディフェンスの時に他の人のことなんて気にしてない。終始ぴったりあたしに張り付いてて自由に動けない。

最初の1ゲーム目は負けてしまった。いやでもへこんでるヒマなんてない。3分あるからここでなんとか立て直さないと。

「なに座ってんの？あんたらは今はダッシュの時間って言ったでしょ。」

まじだったんですか～！？

その後、休みのたびに走らされ、そんな疲れた状態でやっても勝てるわけもなく、また走らされという無限ループに陥ったあたし達はその日、とんでもない疲労感と敗北感を味わったのであった。

3×3×9王子

「ようオージ、おっはよ～」
「終わった」
「おいおいナニ言ってんだ、やっと今日から2学期の始まりじゃないか☆」
「燃え尽きたぜ…」
「たしかに今年の夏は例年にも増してあっつかったよな～」
「もう高校で思い残すことはない。」
「ってさっきからいったいどうしたってんだよ!?高校ライフはまだ半分だぜ?」
「あ、なんだゲンキか。」
「ちょ、まて～～い!!久々の親友再会なのにその反応はひど過ぎないかい!?　2年に入ってから出番がなさ過ぎて読者の半分はオレの存在も忘れてる頃だっていうのに。シクシクシク…」
「ん、どうした?なんで泣いてるんだ?」
「そりゃおめぇ、こんな多彩的な放置プレーくらったらさすがのゲンキくんも落ち込まずにはいられないってもんよ!」

そう、いつの間にか夏なんて終わっていたのだ。ゲンキが最近見なかったことどころか、とっくに存在丸ごと忘れていたくらいだ。

「まぁいいさ、オージ見るからに疲れてるもんな。その様子だとたっぷり部活でしごかれてたみたいだな。どうだ、夏休みは充実してた?」
「やめろ、夏のことを思い出させるんじゃない!」

「わりい、いきなり怒鳴っちまって。やっぱ聞いてくれるか?」
「別にいいけどさ、それよりどうだったんだよ。」

「2日目までは楽しかったんだ。3on3でおもいっきりバスケできたからな。」
「「までは」ってことは3日目の3対3でなんかあったのか？」
「あ～～～！！！その文字を口にするな！！それに3日目は3on3じゃないんだ。」
「？？　わ、わかった、そこは触れちゃいけないんだな？で、4日目以降はどうなったんだ。」
「休みだ。」
「そりゃよかったじゃないか。」
「そしてまた連続して3日間練習日があるんだが…。」
「楽しくみんなで毎日3on3三昧だぁ～！ってわけには、いかないとか？」
「そうだ。」
「その間にはお前にとって思い出したくもない、オレにとっては謎のナニカがあったわけだな。」
「それを9セットだ。」
「…鬼だな。」
「ああ鬼だ。しかもその練習は、さ、さ、3人でこなすからメニューも『3』づくしなんだ。だから今オレ達は『3』という言葉に対して敏感なんだ。」
「ふ～んそうなのか。」
そう言うと、ゲンキの目はイヤな光を帯びたまま、教室の隅で寝ているカズキのそばに近寄っていた。なんだかイヤな予感がする。あれは夏休みにさんざん目にしてきたものだ。そう、黒谷先生と同じ目をしていたのである。
「おっはよカズキ、今日『サン』デー発売日だけど買ってきた？」
「ぐあ～～」
「どうしたんだ～い？おまえ『サン』デー好きだったろ？」

「頼むから今はその話はしないでくれ！」

今ちょうどアキヒトが教室に入ってきた。やめろっ、これ以上無意味な血を流させないでくれ！

「お、雰囲気代わったね～。『散』髪してきた？」

「うわ～～」

そう言ってアキヒトは回れ右して廊下を走り出してしまった。言っておくが、これは決してアキヒトが髪形を失敗したわけではない。

ちなみにオレも御多分に漏れず、一緒に仲良く（？）発狂している。

その後もゲンキは久々の自分の見せ場に、ここぞとばかり男バスメンバーに『あの言葉』を浴びせるのであった。そのためしばらくウチの教室では雄叫びが聞こえるという珍現象が続いた。

再戦に萌えに燃える姫

「ちゃんと覚悟はできてる？早くもリベンジのチャンスが舞い込んでくるなんてアンタ達運がいいね～。とりあえずスタメンは2年でいくけど気持ちがたるんでるようなヤツがたらすぐに変えるからね！」

「はい！」

そんなのありえない。だって今目の前にいるのは、この前の地区予選で大惨敗したお茶の時女子高校なのだから。

今は新人戦3回戦の直前ミーティングの最中である。ちなみに1、2回戦は、なんというか思った以上にあっさり終わった。夏休みのあの地獄の日々に比べれば、あのレベルの試合なんて準備体操みたいなものだ。そう言い切れるのも、それくらい夏休みでの全員のレベルアップは大きかったのだと思う。

「あちらさんも3年生はいなかったから前回と同じ面子だ。スタメンは変わらずPGユイ、SGミオ、SFあずにゃん、PFムギ、Cりっちゃんだよ。ただしこの夏にシックスマンとして入ったウイってのが意外といい動きするからあなどるんじゃないよ！」

「はい！」

「同じ相手に負けんじゃないよ！あんたらのこの3か月での違いを見せつけてやりな！」

「はい！」

試合は序盤から速い展開が続いた。相手チームは機動力の高さと積極的なパス回しによるチームプレイでガンガン攻めてくる。

でもこれくらいじゃ焦ったりしない。落ち着こう、まず1番目の課題はしっかりマークにつくことだ。この前は相手チームのレベルの高さに圧倒されて一気に序盤でやられちゃったからな。

「アンタけっこうやるじゃん♪夏は相当走りこんできたっしょ？」

「ま、まぁ。」

「いいぜぇ、燃えてきた☆ついてきなっ」

りっちゃんは今まで対戦してきたどのCとも違うタイプだった。Cにしては小柄な体格にもかかわらず、当たりはけっこう強い。それになんたって、その運動量がスゴかった。黒谷先生のあのチートっぷりを経験していなかったら今回もなすすべなく負けていただろう。

「ユイ、くれっ」

「あ～い。いくよ～りっちゃ～ん！」

相変わらずユイちゃんてかわいいよな～。女のあたしまで変な気分にさせてしまう。しかしそんな見た目とは裏腹に、強烈なパスが飛んでくる。りっちゃんは3Pゾーンの外側でボールを受け取ると、一気にドリブルでゴール下まで迫ったきた。

ったく、こんなのCの動きじゃないっての。でもあたしだってそんな簡単にはやられない。一瞬抜かされそうになる所を必死にくらいついていく。それでもりっちゃんは強引にシュートを打ってきた。

すかさずあたしは手を出す。しかしボールには手が届かなかった。

ガスッ

「あちゃ～、やっぱムチャだったか。あんた反応イイね。」
「そりゃどうもありがと…ってウソッ！？」

いつの間にか目の前にいたはずのりっちゃんは消えていて、慌てて振り向くとそこにはさっきシュートしてあたしと会話までしたはずのりっちゃんが飛んでる！？

しっかりとリバウンドをとってそのまま得点を決めてしまっていた。

「う～ん、プレーの途中で油断はいけないんだな～☆」
「うっ」
「ヒメ、なに相手にアドバイスまでされちゃってんのよ！ちゃんとゴール下守ってなさいよ！」
「ごめん！」

くそっ、まだまだ集中力が足りないみたいだ。スピードがゼンゼン違うから少しでも目を離せばあっという間に置いて行かれてしまう！

うちのチームもすかさず攻めたてる。レイとサアヤで一気にコートを駆け上がる。そしてアカネが３Ｐを放ったが、惜しくもリングに嫌われる。

よしっ、今度こそっ！

今回はなんとかリバウンドが取れたものの、りっちゃんの動きが激しすぎてとてもじゃないがシュートになんていけない。どうしよう、時間がっ！

「ヒメっ！」

声がした方を確認し、近づいてくる影にほとんど手渡しでパスをする。

パシュッ

「ナイスレイっ！」
「あたぼうよ！」

そうだ、あたしにはまだりっちゃんから1対1で点を取る実力はなくとも、それが負ける理由にはならない。だってあたしには頼りになる仲間がいるんだから。

「よし、ここ抑えてもう一本決めるよ！」
「はい！」

ただ見入る王子

今日の試合は女子にとって大一番ということで、男バス全員で応援しに来ている。この前の大会では女子は最後まで応援してくれたので、そのお返しだ。

さて、試合の状況はというと、

ヒメのやつ今のはアシストだったな。あれで翔泉高校の方に流れがきたみたいだ。

よしっ、スティールから逆転シュートも決まった。

しかし、次の攻撃から相手ＰＧのユイが爆発する。

「あずにゃん！」

シュッ

「も～ユイセンパイのパス強すぎですよ！」

「いいじゃん入ったんだし♪」

今度は自分からペネトレイトしてジャンプシュートを決めた。

「ミオ、ナイス～！」

「なにを言ってるの？決めたのはユイじゃないか。」

「相手の子をしっかりと抑えてあたしがドリブルする道を作ってく

れたんだよね、ありがとっ」
「バ、バカっ。チームなんだから協力するのは当たり前でしょ！？
それに、あたしにボールくれれば3点とってたけどなっ！」
「またまた強がって～。ミオ殿は今日なにげに得点0ですぞ！」
「うるさいリツ～！」

みんなで和気アイアイと楽しげにふざけ合ってるのに、バスケのキレは増すばかりだ。

「なんか急に一方的な展開になってきたな。」
「たしかに。ああいうムードメーカーがいると強いよな。とにかくあのPGを止めないと。」
「あっ、でもそのユイちゃんが倒れちゃったぞ？」
「ガス欠か？まぁあんだけ一人で暴れまわればな。これで少しは楽になるかも。」

しかしお茶時女子高はそんなに甘くはなかった。
代わりに入ったウイという子もなかなかのプレーヤーだったからだ。
ウイちゃんはユイちゃんとは違って的確な攻めをしてくる。

「あなたには負けませんわ！」
珍しく声を荒げているミズちゃんと、その相手のムギちゃんとはプレースタイルもそっくりで、実力は互角と言ったところだ。両PFからは並々ならぬ気品あふれるオーラが溢れ出ていて、もうオーラ対決まで始まっているように見えるような気がするはオレだけだろうか？

しかしそんな均衡も、ウイちゃんの手にかかれば簡単に崩されてし

まう。一瞬ミスズちゃんが右足方向に力を入れたのを見逃さず、すかさず逆方向に対してムギちゃんにパスを送る。ほんの半歩分だけ出遅れてしまったミスズちゃんをかわし、ゴール。

その後も微妙なディフェンスのもつれみたいなものを突かれ、徐々に点差を離されていった。

「レイちゃん相当きつそうだな。」

「さっきまであんな暴れ牛相手にしてたからな。彼女だっていつ倒れてもおかしくないよ。」

「うちの女子にもＰＧがもう１人でもいれば少しは休めるんだけどね…」

もうフラフラなのに、少しも気持ちは負けてないみたいだ。体は小っちゃいけど強い子だな。なんとか勝たせてあげたい。

「翔泉ファイト――！！！」

今のオレ達にはこれくらいしかできない。せめて目いっぱい声を出さないと。

しかし次の瞬間、思いもよらないことが起こる。

さっきまで疲れていても気丈にふるまっていたレイちゃんが倒れこんでいる。

「どうしたんだ！？」

「なんか右手を伸ばしてパスカットをしたあとうずくまってしまったみたいだけど、大丈夫かな…」

「突き指くらいならレイちゃんなら試合続けそうだよな。」

「たしかにな。たいしたことないといいんだけど。」

しかし、しばらく待ってもいっこうに立ち上がらない。黒谷先生がかけつけて、そのまま負ぶわれて体育館を出て行ってしまった。

動揺を隠せなかった姫

「まずは一本だよ！」

あたしは今ベンチにいる。レイが急に倒れて運ばれていってから、まともにプレーができていなかったからだ。レイも黒谷先生もいない状況で、マネージャーのマサミくんが急きょメンバーの入れ替えを仕切ることになった。彼は尋常じゃない汗をかきながらも冷静で、気持ちの入っていないあたしを見て交代を告げた。

「ヒメさんおつかれっす。とりあえず今はしっかり休んでくださいよ？」

「ありがと」

いつもはおちゃらけていて苦手なはずのマサミくんの言葉も、今はありがたく思えた。

そうだ、代わりに入ったヒナやシズクはがんばってくれている。今はベンチにいるあたしは、声を出して盛り上げていかなきゃ。まだ試合は終わっていないんだから。そう頭では分かっているんだけど、レイのいないコートを見ていてもバスケをしているという感覚がわかなかった。

アカネをＰＧにしてサアヤがそれをフォローするような形でなんとか攻めてはいるものの、慣れないポジションでは連携はなかなかうまくはいかなかった。

司令塔を急に失ったショックからは簡単には立ち直れず、その後もズルズルと点差は離されていった。

「みんな精神的な疲れが大きいみたいですね。全然集中できてない。」

隣でアイカが精いっぱい応援しているものの、あたしにはその熱は戻っていなかった。

「アイカちゃん、出番だからね。しっかりみんなを支えてあげてくれ。ヒメさんももういっぺんお願いします！」

「う、うん。」

正直いって全然休めた気がしなかったし、完全に立ち直っているとは言い難かった。でもいつまでも落ち込んでいられない、他のメンバーはそれでもなんとかプレーを続けているんだ。勝手に自分だけ終わったような顔してちゃダメだ！ツラいのはみんな一緒なんだから。

「アカネ、へばってない？あたしがんばるからどんどんボール回してね。」

「ば、ばか言ってんじゃないわよ、まだ全然余裕だっつうの！　あんたこそ戻ってきたはいいけどヘマしたら承知しないんだからね！」

「そんだけ強がり言えればまだまだイケるわね。サアヤも動きっぱなしで大変だと思うけどよろしくね。」

「アタシが抜けたら試合にならないじゃん。」

まったく頼りになる子たちだな。

あたしは残り時間の間ずっと、とにかくガムシャラに走り回った。

声を出してアピールして、何度もパスを要求した。今はプレー以外のことを考えなくて済むように。

ピ――

試合の終了を告げる笛が鳴ったけれど、あたしには自分とは関係ない世界の音みたいに聞こえた。

アクセル全開王子

「女子に起こったハプニングは男子にはないとは言い切れない。みんなストレッチは十分にしてプレー中もケガには気を付けること！」
「うっす！」

イヤなムードの中、オレ達男子の新人大会は始まった。

「いいか、仮にオレが抜けようとアキヒトがぶったおれようと絶対に最後まであきらめずに勝ちにいくぞっ！」
「おう！」
浮足立っていた部の雰囲気を人一倍に感じているリョウスケの、キャプテンらしい一言だった。そのおかげでベスト４を決める試合でいつも通りのプレーができたオレ達は、今回も無事に決勝トーナメントを迎えることになった。

「最初の相手は彩色学芸高校よ。ここ最近の大会ではうちはずっと県の４位だけど、ここは間違いなく堂々の３位ね。要するに、まずここに勝てないようじゃこの先の相手はお話にならないからね！」

「スタメンは２年で行くわ。最初に呑まれたら負けよ。うちの１年はフォワード陣にいいのが２人そろってるから、タイガは後半のことなんか考えずに初っ端から全力で行きなさい！」
「うっす！」

その先生の期待通り、オレは最初の攻撃から動きまくっていつでもチャンスを狙っていた。

アキヒトからリョウスケへボールをつないだ後、一度ボールの動きが止まる。しかしすぐにボールは逆サイドに放られた。それをキャッチしたオレはそのままの勢いでゴールまで向かう。

「ナイッシュゥ！調子いいじゃんタイガ。」

「まぁね。どんどんボール集めてくれよ、全部決めてやっから。」

その後すぐにミノルがファールをして一旦プレーが止まった時、ふいに声をかけられた。

「チビの割にやるじゃん。あんたフォワードだったんだ？」

そう話しかけてきたのは相手ＳＦの白須だ。たしか１年のころからレギュラーで、毎試合と言っていいほどチームの得点王になっている。たしかこの前の夏の予選じゃ、コイツ一人に４０点とられたんだよな。

「ああそうだよ、王地タイガって言うんだ、以後お見知りおきを。」

「覚えておいてやるよ、オレより点を取れたらな。」

自己紹介してからオレをライバルと認めたのか、本気を出すようになった白須からは一発目のように簡単には点を取らせてもらえなくはなった。

だからと言ってそこで終わりなわけじゃない。アキヒトは白須のクセを相当研究してきたのか、一瞬マークが外れた瞬間を見逃さず、オレに完璧なタイミングでパスをくれた。ここで応えなきゃ翔泉のレギュラーはもらえてないっつうの！そりゃっ！

パシュッ

「今のでｐ－０だぜ？」
「くっ」

その後も今日のオレはよくシュートが入り、第１クォーターは２５－１６でスタートダッシュに成功する。

逆にお見舞いされる姫

トントン

「どうぞ～」

「レイ、元気？」

「元気よ、元気！なによそんな心配そうな声出して～。だってただの骨折だよ？これくらいでいつまで入院させとくんだっつうの。」

「そう、それなら良かったわ。これ、ベタだけどフルーツ買ってきたの。みんなでカンパしたんだけど、病院に大勢押しかけちゃ悪いと思ってあたしが代表で来たの。」

「そんな気ぃ使わなくてもみんなで来てくれていいのに～。差し入れありがと！もうずっと病院食でウンザリしてたのよね。　カプッぶはふふぉのほうはほう？ふぃふはふぁんほふぇんふゅうひへふ？（部活の方はどう？みんなちゃんと練習してる？）」

「うん。アカネが張り切っちゃって、「あたしが部長代理だ、臨時キャプテンだ～」って言って部活の間中仕切りまくってるよ。」

「そう言えば副部長とか副キャプテンとか決めてなかったね。まぁアカネが適任だと思うよ、うん。」

「レイもそう思う？よかった。」

そう言ったきり、あたしは次の会話がなかなか思いつかなかった。

あ～ダメだ。せっかく来たんだからあたしがちゃんと励まさないといけないのに！

レイは特に気にしてないのか、おいしそうにリンゴをむしゃむしゃ食べている。

「今年いっぱいは間に合わないって。」
「え？」
「アタシの手の完治。」
「そ、そっか大変だね…」
「やだナニ深刻な顔して～。言っとくけど来週には退院して学校には行くし、部活にも顔出すからね？」
「そうなんだ、でもムリはしないでね。」
「ムリなんかしてないよ～。むしろ早く体動かしたくてしょうがないしっ！」
そう言うとレイはギブスを巻いている右腕をぶんぶんと振り回した。

「あ、あぶないよ？」
「ちょっとぉ、人がケガした体張ってるっていうのにナニその腑抜けた返しは！？それにさっきアタシがリンゴくわえながらしゃべってた時もフツーに話進めるしさ～。ヒメこそ調子悪いんじゃない？いつもはうるさいくらいツッコミまくりなのに。」
「ごめん。」

「どうした？なんか悩みがあるならレイおねえさんが聞いてやるぞ？」

「…ダメなの。」
「なにが？」
「レイがいなきゃダメなの！学校行って他の子たちと話してもなんか楽しくないっていうか。それに、部活はみんな練習がんばってるんだけど、あたしだけバスケしてるっていう感じしなくて。寂しいよ、レイ…」
「キモチワル。」

「…へ？」

「気持ち悪いって言ってんの！アタシがいないとバスケの感じがしない？楽しくない？甘えてんじゃないわよ！子どもじゃないんだから自立しなさいよ！」
「ごめん。」
「ほら～すぐ謝る～～。アンタはもう初心者じゃない、立派な1バスケットプレーヤーなんだから部活でもしゃきっとしなさい！」

「ごめ…、はい！」
「よし、いい返事。」
「てへっ」
「なんだ、そんなカワイイ顔もできんじゃない。でも、寂しいって言ってくれたのは嬉しいかも。最近結果出さなきゃ、早く男子に追いつかなきゃって焦ってたんだよね。張り切って部を創立してキャプテンになって新人大会までぐわーっと来た感じ。なんかあの試合、アタシも気負い過ぎてたのかもな。だからこんなケガしちゃうんだろうね。」
「そんなムリしなくてもとっくにみんなレイのこと認めてると思うけどな。いい機会だし、しばらくバスケ離れて体だけじゃなくて気持ち的にもゆっくり休んでみたら？」
「フッ、さっきまで「レイがいなきゃダメなの！」って言ってたのダレよ？でもそうね、ちょっと気を抜いてみようかな。」
「その間はあたし達に任せておいてね。」
「おう、頼んだよ副副副副副キャプテン！」
「副副…ってあたし部で一番下ってこと！？」
「そのとーり！これからも精進するように、七福神ならぬ7副姫！」
「は～い」

「フフフフフ」
「アハハハハハ」

お見舞いに来たのに、けっきょくあたしがレイに励まされちゃったな。明日からまたがんばろう。

「エイジ、点やるんじゃないぞ！」
「はい、タイガ先輩！」
「バカ、いちいちこっち振り返って返事しなくていいんだっつうの！」

第2クォーターからはエイジに交代してオレはかつての指定席、ベンチに座っている。しかしもうここに定住することはない。
「タイガ、後半いくから白須の動きよく見とくんだよ！」
「はい！」

というわけだ。

試合の方はというと、徐々に彩色学芸の『色』が現れ始めていた。

司令塔である黄金井が光のような高速ドリブルで切り込む。ディフェンスが全体的にかき乱されている間に、そこでずっと待っていたかのようにボールを受け取った青山が落ち着いてシュート。この2人のガードによる、絶妙な『動』と『静』とのコンビネーション、通称『グリーンライン』に何度もやられている。

ゴール下でも攻撃の手は休まらない。ジャンプ力で勝るミノルがリバウンドできっちり抑えた、に思えたがそのボールを強引に奪った赤丸は、ロングパスで白須につなげる。
「今のってファールじゃないんすか？」
「う～ん、あれはお見事というしかないねぇ～」

審判も先生と同じ意見なのか、笛は鳴らずにそのまま速攻で決められてしまった。

白須はとにかくドリブルで走らせるチャンスを与えようものなら手におえない。エイジはぴったりと張り付いてディフェンスしているが、構わずエンドラインまで走りこんでボード裏からシュートした。へっ、そんなんじゃ入るわけないだろ。案の定、ボールはボードに当たって跳ね返る。

ガシャッ

一呼吸遅れて、観客の息を飲み込む音が聞こえてくる。
筋骨隆々、しかも1人だけ日焼けしていて、黒人かと見まがう黒川がこぼれ球をダンクで押し込んできた。

「先生、今こっち押されぎみじゃないっすか?オレ、そろそろ行きます!」
「まぁ待ちなって。ものにはタイミングってもんがあんのよ。それに少しは自分の仲間を信頼しなさいな。」

そうは言ったってよぉ。

リョウスケが放った3Pは、リングに嫌われ大きく弾んでしまう。
ほらぁ、なんか今ウチに流れがきてなんだよなぁ。これじゃいっきに追いつかれちゃ…

ガシャッ

さきほどの黒川のお株を奪うように、豪快な音が再びコートで鳴り響く。

カズキがさっきのボールをそのままダンクで決めてしまったのだ。

「やるじゃんカズキ！さすがセンターフォワード！」

「サンキュ！」

「まったくゲンキンなやつだね。ほらタイガ、出番だよ引き離しておいで」

「うっす！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7987u/

センター姫とスモール王子

2011年12月25日00時54分発行